

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第487集

ちとみやくまどう  
本宮熊堂B遺跡第27次発掘調査報告書

盛岡南新都市区画整理事業関連遺跡発掘調査

2006

岩手県盛岡市

(財)岩手県文化振興事業団  
埋蔵文化財センター

# 本宮熊堂B遺跡第27次発掘調査報告書

盛岡南新都市区画整理事業関連遺跡発掘調査

## 序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民の財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によってやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成16年度に発掘調査された本宮熊堂B遺跡第27次調査の調査成果をまとめたものです。調査の結果、雫石川右岸の河岸段丘縁辺部に立地する奈良～平安時代の集落跡であることが明らかになりました。住居跡からは、煮炊きや盛付け、貯蔵などに使用した土器をはじめとし、鉄製の鋤先などの農具も出土しており、この地域の集落構造を考えると貴重な資料を提供することができました。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成18年3月

財団法人 岩手県文化振興事業団  
理事長 合 田 武

## 例 言

- 1 本報告は、岩手県盛岡市本宮字熊款38-5ほかにある本宮熊堂B遺跡第27次発掘調査の結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の発掘調査は、盛岡市新都市土地区画整理事業に伴う緊急発掘調査である。調査は、岩手県教育委員会生涯学習文化課の調整を経て、盛岡市から委託を受けた(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 岩手県遺跡登録台帳番号と調査時の遺跡各次略号は、以下のとおりである。  
遺跡登録台帳番号……LE16-2118  
遺跡略号……………OKO-04-27
- 4 野外の調査期間・調査面積と調査担当者は、以下のとおりである。  
調査期間 平成16年8月6日～9月14日  
調査面積 3,661㎡  
担当者 小松則也・福島止和
- 5 調査の室内整理期間と整理担当者は、以下のとおりである。  
整理期間 平成16年11月1日～平成17年3月31日  
担当者 小松則也
- 6 座標原点の測量は、次の機関に委託した。  
座標原点の測量……(株)吉田測量設計  
なお、第27次調査の基準点設定については第25次調査の「補2 X=-35290.000、Y=25600.000、H=124.937m」を基点とし、各基準杭、補助杭を打設した。
- 7 本報告書の作成にあたり、盛岡市教育委員会からご指導とご協力をいただいた。
- 8 野外調査にあたっては、盛岡市、紫波町、平石町、滝沢村の方々に多大なるご協力をいただいた。
- 9 調査成果の一部は、これまでに「現地公開資料」や概報を発表しているが、本報告書の内容が優先するものである。
- 10 土層観察の土色は、『新版標準土色帳』(小山正忠・竹原秀雄：1992)による。
- 11 本報告書で使用した地形図は、国土地理院発行のものであり、図中に図幅と縮尺を記している。
- 12 本遺跡から出土の遺物および調査に関わる資料は岩手県立埋蔵文化財センターにおいて保管・管理している。

## 目 次

I 調査に至る経過	2
II 遺跡の立地と環境	2
1 遺跡の位置	2
2 地理的環境	2
3 周辺の遺跡	6
III 調査の方法と室内整理	8
1 野外調査の方法	8
2 室内整理の方法	10
IV 検出遺構と出土遺物	12
1 基本層序と遺構配置	12
2 出土遺物の掲載基準	13
3 遺構と遺物	13
4 遺構外出土物	48
V ま と め	58
1 遺 構	58
(1) 第25次調査との関係	58
(2) 調査区及び遺構の特徴	58
(3) ま と め	60
2 遺 物	60
(1) 土師器の細分比較	60
(2) 酒美平遺跡Ⅱとの遺物比較	61
(3) ま と め	65
報告書抄録	94

## 図 版 目 次

第1図 岩手県図・遺跡位置	1	第3図 周辺の遺跡図	4
第2図 地形分類図	3	第4図 本宮熊堂B遺跡各次調査全体図	7

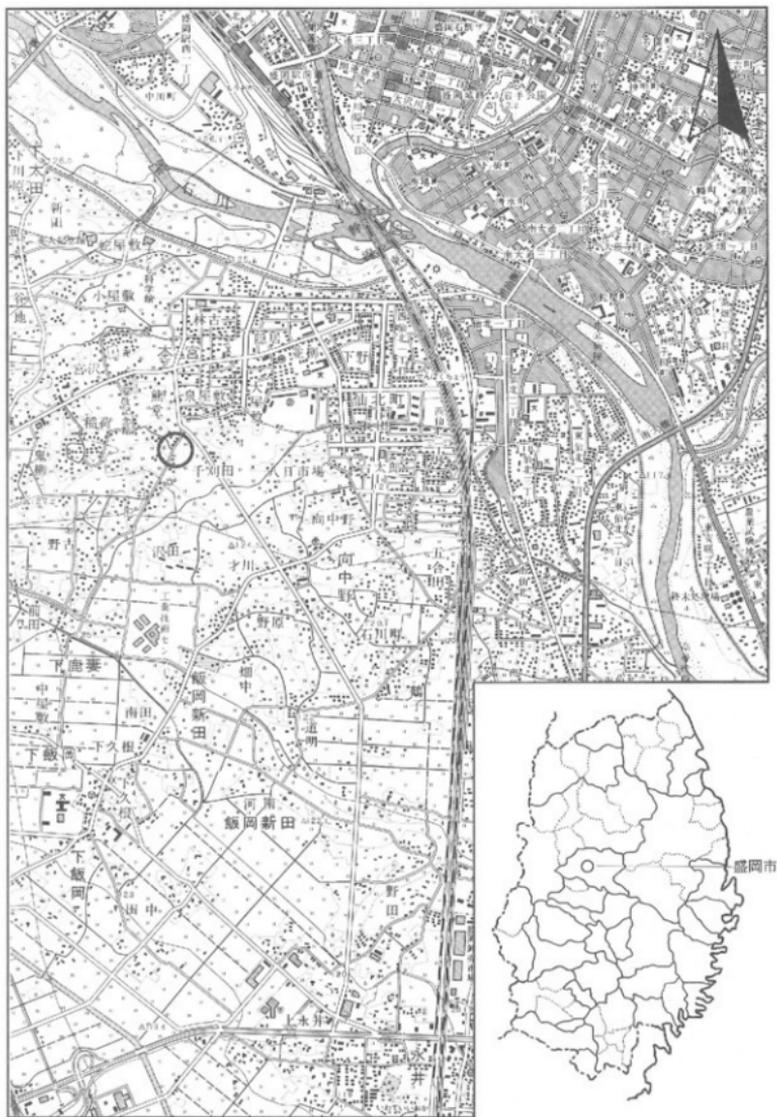
第5図	グリッド配置図・調査区図	9	第25図	R A 088竪穴住居跡出土遺物	34
第6図	凡例	10	第26図	R A 089竪穴住居跡	35
第7図	遺構配置図	11	第27図	R A 089竪穴住居跡出土遺物	36
第8図	基本層序	12	第28図	R A 090竪穴住居跡	37
第9図	R A 084竪穴住居跡 (1)	14	第29図	R A 090竪穴住居跡出土遺物 (1)	38
第10図	R A 084竪穴住居跡 (2)	15	第30図	R A 090竪穴住居跡出土遺物 (2)	39
第11図	R A 084竪穴住居跡出土遺物 (1)	17	第31図	R E 016住居状遺構・出土遺物	40
第12図	R A 084竪穴住居跡出土遺物 (2)	18	第32図	R D 187土坑	41
第13図	R A 084竪穴住居跡出土遺物 (3)	19	第33図	R D 188土坑・出土遺物	41
第14図	R A 084竪穴住居跡出土遺物 (4)	20	第34図	R D 189土坑	42
第15図	R A 085竪穴住居跡	22	第35図	R D 190土坑	43
第16図	R A 085竪穴住居跡出土遺物	23	第36図	R D 190土坑・出土遺物	44
第17図	R A 086竪穴住居跡	24	第37図	R G 110・138溝跡	46
第18図	R A 086竪穴住居跡出土遺物	25	第38図	R G 138・139・140溝跡	47
第19図	R A 087竪穴住居跡 (1)	27	第39図	R G 138・139溝跡出土遺物	49
第20図	R A 087竪穴住居跡 (2)	28	第40図	遺構外出土遺物	50
第21図	R A 087竪穴住居跡出土遺物 (1)	30	第41図	第25・27次遺構全体図	59
第22図	R A 087竪穴住居跡出土遺物 (2)	31	第42図	R A 084・087竪穴住居跡遺物出土状況	62
第23図	R A 087竪穴住居跡出土遺物 (3)	32	第43図	R A 084・087竪穴住居跡土器集成図	63
第24図	R A 088竪穴住居跡	33	第44図	S 117・18竪穴住居跡土器集成図	64

## 表 目 次

第1表	周辺の遺跡一覧	5	第6表	遺物観察表 (5)	55
第2表	遺物観察表 (1)	51	第7表	遺物観察表 (6)	56
第3表	遺物観察表 (2)	52	第8表	遺物観察表 (7)	57
第4表	遺物観察表 (3)	53	第9表	土器細分一覧	61
第5表	遺物観察表 (4)	54			

## 写真図版目次

写真図版1	空中写真 (1)	67	写真図版17	R G 138・139溝跡	83
写真図版2	空中写真 (2)	68	写真図版18	R G 110・139・140溝跡	84
写真図版3	土器集合写真	69	写真図版19	R A 084竪穴住居跡出土遺物 (1)	85
写真図版4	表上除去・調査前風景	70	写真図版20	R A 084竪穴住居跡出土遺物 (2)	86
写真図版5	基本層序	71	写真図版21	R A 084 (3)・085・086竪穴住居跡出土遺物	87
写真図版6	R A 084竪穴住居跡 (1)	72	写真図版22	R A 087竪穴住居跡出土遺物 (1)	88
写真図版7	R A 084竪穴住居跡 (2)	73	写真図版23	R A 087竪穴住居跡出土遺物 (2)	89
写真図版8	R A 085竪穴住居跡	74	写真図版24	R A 087 (3)・088竪穴住居跡出土遺物	90
写真図版9	R A 086竪穴住居跡	75	写真図版25	R A 089・090竪穴住居跡、R E 016住居状遺構出土遺物	91
写真図版10	R A 087竪穴住居跡 (1)	76	写真図版26	R D 188・190土坑、R G 138・139溝跡出土遺物	92
写真図版11	R A 087竪穴住居跡 (2)	77	写真図版27	遺構外出土遺物、R D 190土坑出土銭貨	93
写真図版12	R A 088竪穴住居跡・作業風景	78			
写真図版13	R A 089竪穴住居跡	79			
写真図版14	R A 090竪穴住居跡	80			
写真図版15	R E 016住居状遺構	81			
写真図版16	R D 187・188・189・190土坑	82			



1:25,000 盛岡・矢幅

第1図 岩手県図・遺跡位置

## I 調査に至る経過

盛岡南都市開発計画（いわゆる盛南開発）は、盛岡市が21世紀に向けて、経済・文化などに対する各機能を兼ね備えた北東北の拠点都市として発展していくことを目指し、現在の既成市街地の他に南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた軸状都市を形成するために策定された土地地区画整理事業である。

この事業は、平成2年9月に岩手県、盛岡市、旧郡南村の三者が地域振興整備公団に対して事業要請を行い、これを受けて公団が実施計画を作成した。平成3年12月に建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可が下り、平成3年度から平成17年度までの15年間を事業予定期間とし、面積約313haを対象とした土地地区画整理事業が実施されることとなった。

この間、事業の対象地域に関わる埋蔵文化財の取り扱いについても協議が重ねられた。その結果、本件に関しては盛岡市教育委員会が試掘調査を行い、調査を必要とする範囲を確定し、(財)岩手県文化振興事業団の受託事業とすることとなった。当遺跡第27次調査については、岩手県教育委員会が盛岡市と協議の結果、平成16年度の事業として確定した。（盛岡市都市整備部盛岡南整備課）

## II 遺跡の立地と環境

### 1 遺跡の位置（第1図）

本宮熊堂B遺跡は、岩手県盛岡市本宮字熊堂38-5ほかに所在する。同上地理院発行の5万分の1の地形図「盛岡」(NJ-54-13-14)の図幅に含まれ、北緯39度41分06秒、東経141度07分38秒付近に位置する。調査区はJR東日本盛岡駅の南西1.7km付近で、雫石川によって形成された自然堤防上に立地している。標高は124m前後で宅地として利用されてきたが、近年は道路及び更地になっていた。

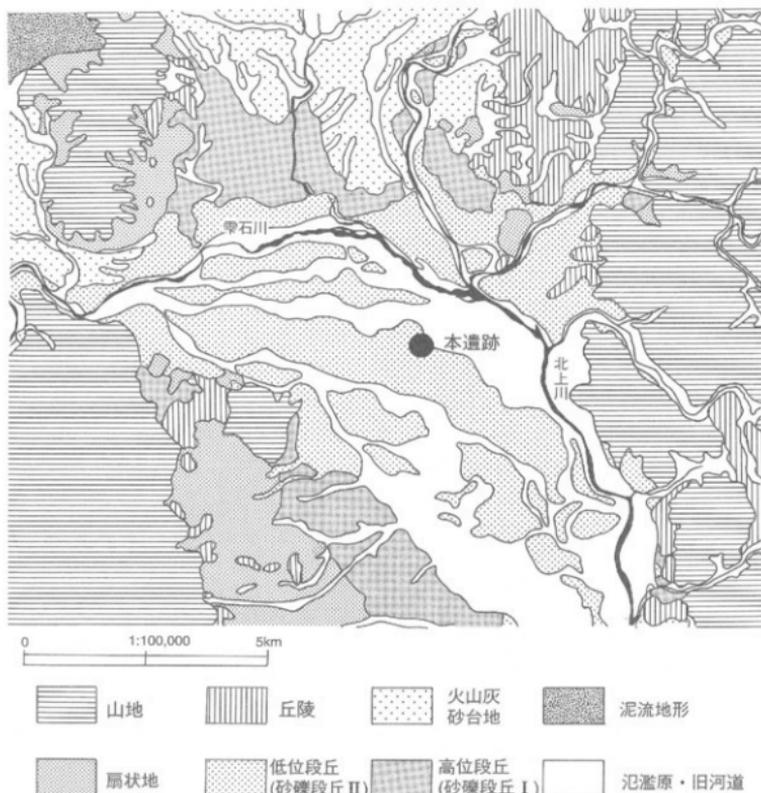
### 2 地理的環境

盛岡市は東西に迫る山々に挟まれた盆地を中心に広がる、緑と水の街である。市街地からは北西にコニーデ火山特有の裾野を東側に広げる岩手山（標高2,038.2m）、北東側に姫神山（1,124.5m）、南東側に霊峰早池峰山（標高1,917m）を望むことができる。また、白鳥が飛来する北上川とその支流中津川・梁川・雫石川が合流し、力強く南下を始める地点でもある。

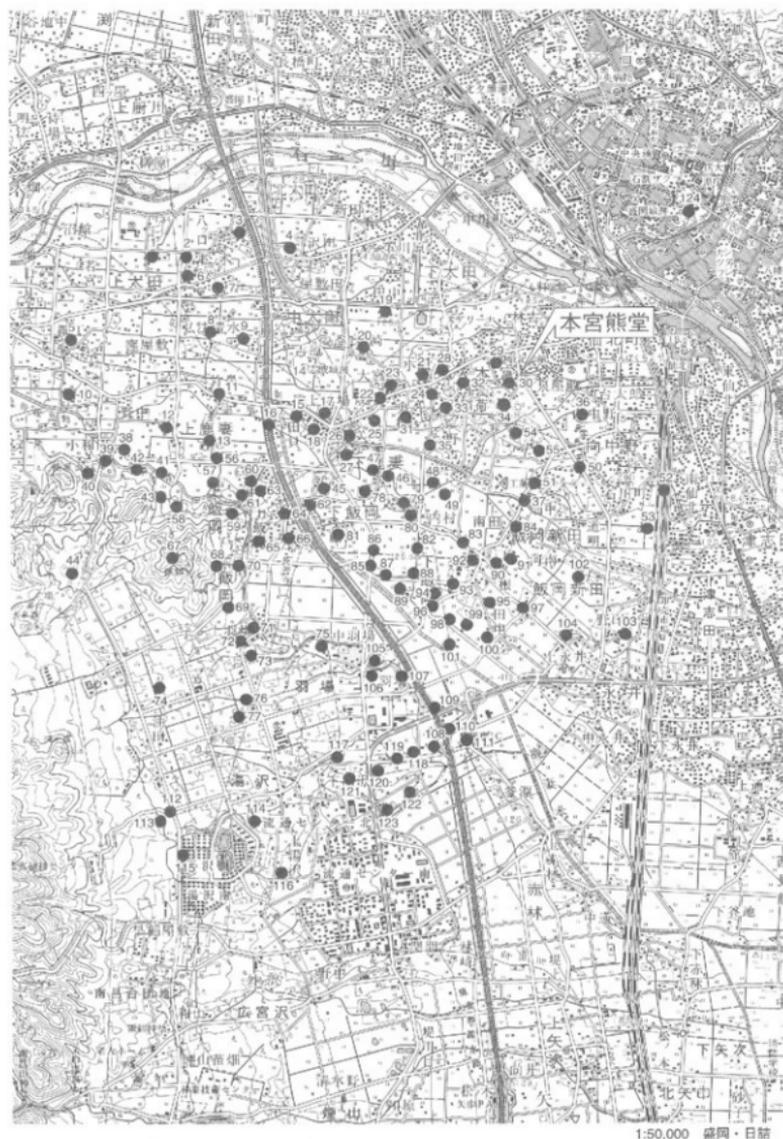
北上川は東北地方最大の1級河川で、主流部の延長294km、流域面積10,250km<sup>2</sup>藍支流数216を有し、西側に連なる奥羽脊梁山脈と東側に広がる北上山地の間の低地帯を涵養し、宮城県石巻湾に注いでいる。古代より人と物の流れは北上川により司られ、時には荒れ狂う自然の恐ろしさを人間に知らしめ、またある時にはその豊かな恵みを人々に分け与えてきた大河である。流域は、盛岡市北部の四十四田峡谷と一関市孤押寺峡谷を境にして上・中・下流に分けられており、盛岡市は中流域上部にあたる。中流域の地形は、背後に控える山地構造の違いにより対照的な様相を呈している。新第三系及び火山岩類を主体とする褶曲山地である奥羽山脈は、各支流に多量の土砂を供給し、西岸に大小の扇状地が複合する広い平野部を作り出している。これらの扇状地は更新世中・後期に形成されたもので、支流によって解析され段丘化している。これに対して老年期山地がその後の地殻変動によって隆起準平原化した北上山地側では、山地に続く丘陵線片部に小規模な段丘と沖積地が観察されるにすぎない。北

上川流域の第四系及び地形の研究は中川久夫他の業績が大きく、中流域の段丘を上部から西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘に分類した。中流域北部ではこれらに相当するものとして石鳥谷段丘、二枚橋段丘、都南段丘が設定されている。

本遺跡の所在する北上川中流域北部右岸では、大規模な平野と奥羽脊梁山脈から供給される多量の堆積物による扇状地が形成されており、雫石川以南北上川以西には雫石川の下刻・堆積作用により高位から順に「砂礫段丘Ⅰ」「砂礫段丘Ⅱ」「砂礫段丘Ⅲ」の沖積段丘面が形成されている。低位の「砂礫段丘Ⅲ」面には雫石川の河道変遷に伴う4期にわたる旧河道が確認されている。文献資料によれば、志波城は雫石川の水害が原因で廃絶したとされており、発掘の結果からも志波城北辺部分は雫石川の旧河道によりきられて消失していることが確認されている。さらに小河川の河道痕跡が網目状に入り組んでおり、小規模な自然堤防状の微高地を形成する。本遺跡を含めた古代遺跡の多くは「砂礫段丘Ⅲ」面の微高地や扇状地の縁辺部に位置している（註1）。



第2図 地形分類図



第3図 周辺の遺跡図

第1表 周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種別	時代 / 備考	No.	遺跡名	種別	時代 / 備考
1	稲田	散布地	平安 / 土師器	63	高田	集落跡	縄文・縄文土器(中)・石器
2	松ノ木	集落跡	平安 / 土師器	64	大柳I	散布地	古代 / 土師器・須恵器
3	ハツロ	散布地	古代 / 土師器・住居跡	65	大柳II	散布地	古代? / 土師器
4	入路	集落跡	古代 / 土師器・住居跡・土坑	66	船野宮	散布地	縄文・縄文土器(後)
5	人形原奥春日嶺	古墳	奈良 / 土師器・刀・玉・相間陶器	67	飯田山館	城跡	中世
6	谷	集落跡	平安 / 土師器・住居跡・城跡跡 / 堀	68	飯岡水塚	散布地	古代
7	上野原坂	散布地	古代 / 土師器	69	いたこ塚	墓	原始群
8	道中	集落跡	古代 / 土師器	70	赤坂II	散布地	平安? / 土師器
9	小沼	集落跡	平安 / 土師器・器胎陶器 / 住居跡	71	沼津	城跡	中世 / 空堀
10	木本	集落跡	平安 / 土師器 / 住居跡	72	窪田西日本	散布地	縄文・縄文土器(中)
11	五兵衛新田	集落跡	古代 / 土師器	73	砂子塚	散布地	古代・小塚
12	茨田	集落跡	古代 / 土師器	74	アイノ野	散布地	縄文・縄文土器(晩)
13	竹鼻	集落跡	古代 / 土師器	75	因幡	散布地	縄文・古代 / 縄文土器・土師器
14	忠誠城	城跡	平安 / 土師器 / 獨立存在建物跡 / 門跡	76	木部	集落跡	平安
15	田月	集落跡	古代 / 土師器 / 住居跡	77	福丁代	集落跡	奈良
16	竹左衛門	集落跡	古代 / 土師器・儀物陶器 / 住居跡	78	二又	散布地	古代 / 土師器・須恵器
17	羽黒溝	城跡	縄文・古代 / 縄文土器(晩)・土師器	79	内行	集落跡	平安 / 土師器・菅沼
18	石仏	集落跡	古代 / 土師器	80	中取	散布地	古代 / 土師器
19	田中	散布地	平安 / 土師器	81	森島I	集落跡	縄文・古代 / 縄文土器・土師器
20	林崎	集落跡	平安 / 土師器 / 獨立存在建物跡	82	深沼下	集落跡	平安 / 住居跡
21	小福	集落跡	平安 / 土師器 / 住居跡 / 堀	83	高塚	散布地	古代 / 住居跡
22	大宮	集落跡	古代 / 中世 / 土師器・住居跡	84	法徳塚	城跡	古代不明
23	八豆北	散布地	平安 / 土師器 / 住居跡・土坑 / 溝跡	85	奥四郎崎II	散布地	古代 / 土師器・須恵器・住居跡
24	奥島A	集落跡	古代 / 土師器	86	飯岡崎I	集落跡	平安 / 土師器
25	小外	集落跡	古代 / 土師器	87	下新田	集落跡	平安 / 土師器 / 住居跡
26	水門	集落跡	古代 / 土師器	88	深沼上	集落跡	平安 / 住居跡
27	上野崎	集落跡	古代 / 土師器	89	上新田I	集落跡	平安 / 住居跡 / 上新田と菅沼
28	菅沢	散布地	平安 / 儀物遺構	90	下久保	散布地	縄文・古代 / 縄文土器・土師器
29	小宮橋堂A	散布地	縄文・縄文土器(晩) / 住居跡等	91	石井	散布地	古代 / 土師器・須恵器
30	小宮橋堂B	集落跡	奈良・近世 / 土師器・住居跡・土坑	92	高塚II	散布地	平安 / 土師器・須恵器 / 住居跡
31	鬼舟B	集落跡	古代 / 土師器	93	西	集落跡	平安 / 土師器 / 無蓋
32	新倉	集落跡	古代 / 土師器・須恵器 / 溝跡	94	西田	集落跡	平安 / 須恵器
33	鬼舟C	集落跡	古代 / 土師器	95	下久保II	散布地	縄文・古代 / 縄文土器
34	野古A	集落跡	古墳末 / 平安 / 土師器 / 住居跡跡 / 土坑	96	新倉上	集落跡	縄文・古代 / 縄文土器・土師器
35	野古B	散布地	古代 / 土師器	97	松島	集落跡	古代 / 土師器・須恵器
36	百人郎	集落跡	奈良・近世 / 土師器 / 住居跡 / 溝跡	98	藤堂	集落跡	平安 / 土師器・須恵器 / 住居跡
37	矢塚	集落跡	平安 / 土師器 / 住居跡 / 土坑 / 溝跡	99	須堂II	集落跡	平安 / 土師器・須恵器 / 住居跡
38	藤沢下	散布地	古代 / 土師器	100	田中	集落跡	平安 / 土師器・須恵器 / 石器
39	ニッ沢	散布地	縄文・古代 / 土師(中・後) / 土師器	101	南谷地	集落跡	平安 / 土師器・須恵器 / 住居跡
40	小和山館	城跡	中世 / 堀 / 郭	102	夕雲	散布地	古代 / 土師器
41	蟹沢	散布地	縄文・古代 / 縄文土器・土師器	103	株所	集落跡	古代 / 土師器・須恵器
42	ヘビ堂	散布地	縄文・古代 / 縄文土器・土師器	104	暮木	散布地	古代 / 土師器・石器
43	オミ坂	散布地	縄文・古代 / 縄文土器・土師器	105	新井出I	散布地	古代 / 土師器・須恵器
44	大ヶ森	散布地	縄文・古代 / 縄文土器・土師器	106	新井出II	散布地	古代 / 土師器・須恵器
45	止留坂	集落跡	古代 / 土師器	107	新田	集落跡	平安 / 土師器・須恵器
46	西田A	集落跡	古代 / 土師器	108	湖波I	散布地	古代 / 土師器
47	上野島B	集落跡	古代 / 土師器	109	下野崎	集落跡	平安 / 土師器・須恵器・緑釉陶器
48	西田B	集落跡	古代 / 土師器・須恵器	110	下野沢	散布地	古代 / 土師器・須恵器
49	原田	集落跡	古代 / 土師器	111	人馬	散布地	古代 / 土師器・須恵器
50	山中野崎	城跡	古代 / 土師器(中)・堀・土壘	112	福永	集落跡	縄文・縄文土器(晩)・石器
51	越谷地	集落跡	平安 / 土師器 / 住居跡 / 陥穴 / 溝	113	藤堂坪坂	城跡	中世 / 菅沼
52	南仙北	集落跡	縄文・古代 / 縄文土器・土師器	114	熊崎	散布地	縄文・縄文土器・石器
53	山中野崎	集落跡	古代 / 土師器	115	湯沢	散布地	縄文・縄文土器(中・後)
54	飯岡新田	集落跡	古墳末・中世 / 土師器・古墳関係遺構・住居跡	116	堀	堀	時代不明 / 小塚
55	飯岡川	集落跡	平安 / 土師器 / 河川関係獨立存在建物跡	117	小田I	散布地	古代 / 土師器
56	中村	散布地	平安 / 土師器・須恵器	118	間波II	散布地	古代 / 土師器・須恵器
57	月見山	散布地	縄文・古代 / 土師器	119	間波I	散布地	平安 / 土師器・須恵器
58	山中	散布地	縄文・古代 / 縄文土器・土師器	120	藤子	散布地	古代 / 土師器
59	飯岡原	城跡	中世 / 縄文・縄文土器(中) / 中堀	121	小田II	散布地	平安 / 土師器
60	堤	散布地	縄文・古代 / 縄文土器 / 土師器	122	湯沢大塚	城跡	古代・中世 / 土師器・須恵器
61	高塚古墳群	古墳	奈良・平安 / 土師器・短手刀	123	沼沢	散布地	古代 / 土師器
62	藤島II	散布地	平安? / 土師器	124	盛岡城	城跡	中世・近世 / 瓦・陶磁器 / その他

### 3 周辺の遺跡

盛岡市内における遺跡は、岩手県遺跡台帳平成7年度によれば、521箇所余が登録されている。第3回は本宮熊堂B遺跡周辺の主な遺跡の分布を示したものである。これらの遺跡分布状況を見ると、半石川左岸と右岸では相対的な様相を示している。左岸の台地上には、大館遺跡群をはじめとする縄文時代の集落群が数多く分布している。それに対し右岸の低位段丘上には、縄文時代の遺構は陥し穴状遺構が散在する程度となり、僅かに本宮熊堂A遺跡から縄文時代晩期の竪穴住居跡が発見されたにすぎない。しかし、古代の遺跡は多く、八掛遺跡などの8世紀時代の集落跡や太田蝦夷森古墳群、803年に造営された古代城柵である志波城や林崎遺跡などの集落跡が数多く分布している。

このような遺跡の分布域の相違は立地する地形面と大きく係わるものと考えられる。遺跡周辺の沖積層は、半石川の度重なる氾濫や流路の変更によって、旧河道や自然堤防が入り込む地形であり、地図上でも水田の区割り等から読み取ることができる。遺跡の周囲は、近年の盛岡南新都市計画整備事業により、宅地整備や道路建設などの区画整理がめざましく進み、従来の水田や自然堤防上に立地する畑や集落などの田園の景観が変わりつつある。以下は平成16年度発掘調査が行われた周辺遺跡の発掘概要である(平成16年度発掘調査報告書による)。

#### (14) 志波城跡

木遺跡の北西約2kmに位置する太田方八丁遺跡は、昭和51・52年に東北縦貫自動車道建設に伴う調査が行われた。その後には盛岡市教育委員会による範囲確認調査を経て、所在地が不明であった古代城柵「志波城跡」と認定された。昭和55年度から59年度に亘る5カ年計画による発掘調査によって、陸奥の国最北端の城柵跡としての独自性が明らかになり、昭和59年に国指定史跡となった。発掘調査は昭和55年から毎年継続して行われており、平成17年度迄に第97次調査を数えている。平成5年度からは史跡保存整備事業も着手され、槽および築地塀の復元工事が行われている。

#### (29) 本宮熊堂A遺跡

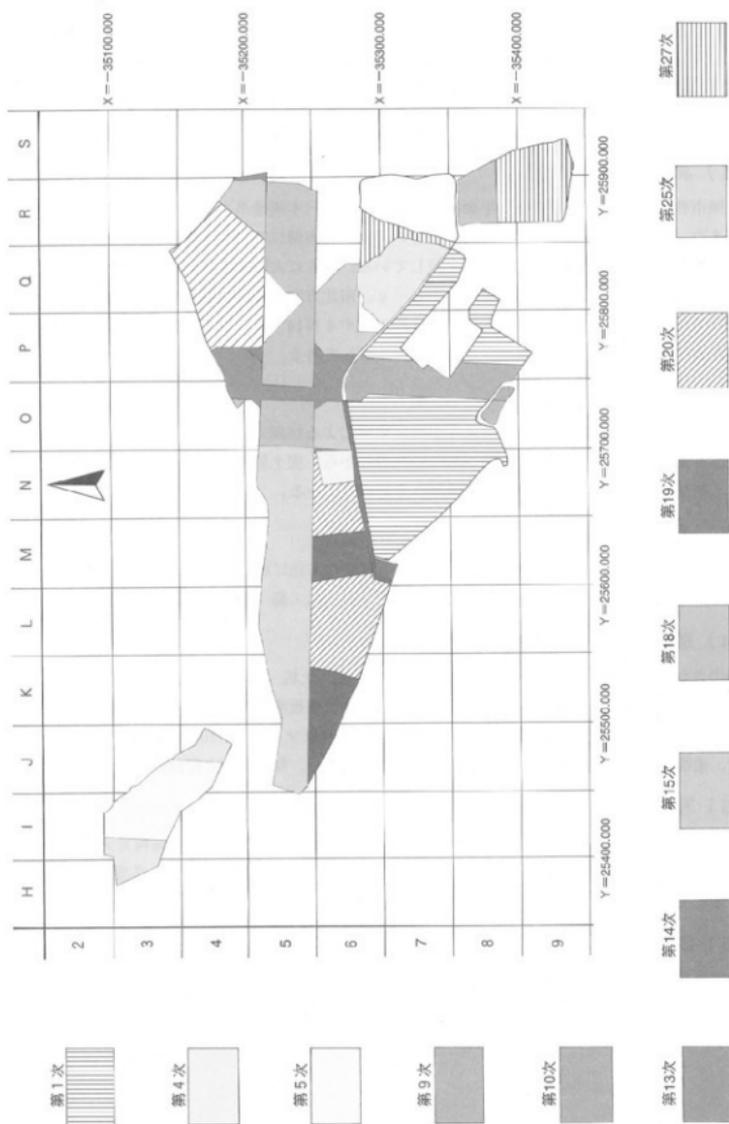
盛岡市の南西部、JR仙北町駅の西約1.5kmに位置し、半石川右岸の標高123m前後の河岸段丘上に立地している。調査前は宅地跡であった。平成16年度の調査は第24・26次調査を数える。26次調査の検出遺構は竪穴住居跡(縄文晩期後葉)、土坑、集石土坑、焼土跡、溝跡である。出土遺物は、縄文土器(甕・甕・土付浅鉢・浅鉢)、土製品(土偶・土版・耳栓)、石器(石鏃・石匙・石錐・鉋状石器)等多種にわたる。第24・26次調査の旧河道から動植物遺体を検出している。

#### (36) 台太郎遺跡

盛岡市の南西部、JR仙北町駅の南西約900mに位置し、半石川右岸の標高120m前後の河岸段丘上に立地している。調査前は水田、畑地、道路と宅地であり、建物の基礎や配水管工事の影響等で遺構の残存状態はあまりよくなかった。平成16年度の調査は第53・54次調査を数える。検出遺構は竪穴住居跡(縄文晩期 古墳末～平安時代)、住居状遺構、土坑、溝跡、井戸跡、柱穴状土坑である。出土遺物は、縄文土器、土師器や須恵器などの土器(関東系土師器1点有)、中～近世の陶磁器、鉄製品(紡錘車・鉄鏃)、土製品(紡錘車・勾玉)、石器・石製品(石鏃・敲磨器類・紡錘車)などである。

#### (34) 野古A遺跡

盛岡市の南西部、JR仙北町駅の南約1.5km、半石川右岸の標高124m前後の河岸段丘上に位置する。調査前は主に宅地や畑地として利用されていた。平成16年度は第23・24次調査が行われた。検出遺構は、竪穴住居跡(奈良時代・平安時代)、溝跡及び土坑を検出した。出土遺物は、土師器や須恵器な



第4図 本町篠野B遷移各次調査全体図

どの土器のほか、鉄製品（鋤鉄・鋸先）などがある。平安時代に属する土器の中に黒書・刻書土器も見られた。

### Ⅲ 調査の方法と室内整理

#### 1 野外調査の方法

##### (1) 調査区の区制設定

盛岡市教育委員会の方針に準じ平面直角座標第X系（日本測地系）に合わせてグリッド設定を行った。また、一辺50×50mの大区画に区割を行い、北から南側にアラビア数字大1～25を付し、西から東側にアルファベットの英文字A～Oを付している。さらに大区画を2×2mの625小区画に細分し、東西方向に西からアルファベットの小文字a～y、南北方向に北から数字の1～25を与えている。調査区の名称は大区画と小区画の組合せで、4N1aや4N14jというように呼称する。調査区内における各基準点と補助杭の成果値は、遺構配置図に示してある。

##### (2) 粗掘りと遺構検出

本調査に先立ち岩手県教育委員会生涯学習文化課による試掘調査が実施されており、今年度第27次調査区も遺物の分布がある程度把握されていたことから、表土除去と粗掘りは重機を使用することとし、その後に人力（鋤簾掛け）で遺構検出作業を行っている。

##### (3) 遺構の命名

検出された遺構の命名については盛岡市教育委員会の方法に準じており、下記のとおりに行った。

竪穴住居跡……RA 住居状遺構……RE 土坑・墓・墳……RD 溝跡……RG

##### (4) 遺構の精査と実測

検出された竪穴住居跡・竪穴状遺構の精査は4分法、土坑・墓・墳の精査は2分法で実施している。遺跡の平面実測は従来の簡易通り方測量で行い、溝跡は平板測量を使い平面図を作成した。各遺構の実測図縮尺は、1/20を基本に実測したが、竪穴住居跡のカマド部は1/10、溝跡の平面図は1/40で実測した。遺構内から出土した遺物は必要に応じて番号を付し、写真撮影と記録後に取り上げている。

##### (5) 写真撮影

野外調査における写真撮影は、6×7cm判カメラ1台（モノクロ）と35mm判カメラ2台（モノクロ・リバーサル）を使用し、遺構検出、遺物の出土状況、断面、掘り上げ等を必要に応じて行っている。他にデジタルカメラ1台をメモ的に活用した。

##### (6) 広報活動

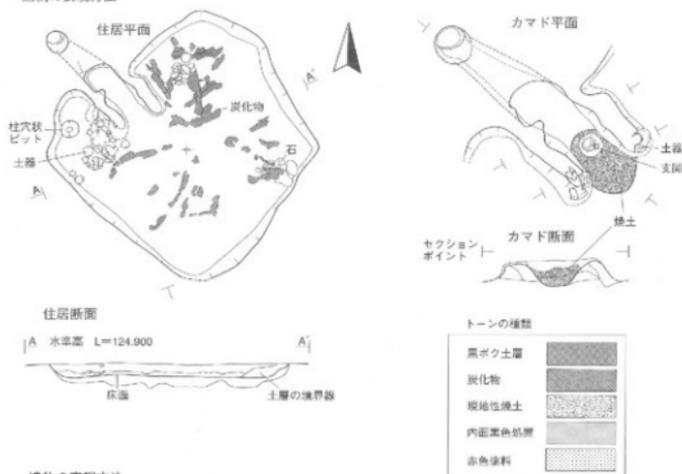
啓蒙活動の一環として、平成16年10月30日(土)に第25次調査と合同の現地説明会を行った。



第5図 グリッド配置図・調査区図

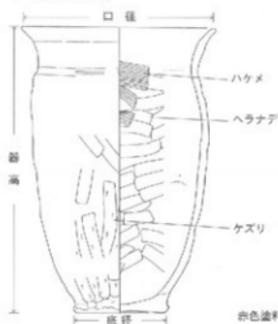
## 2 室内整理の方法

### 遺構の表現方法



### 遺物の表現方法

#### 1 土師器(甕)



#### 2 土師器(ロクロ未使用・坏)



#### 3 土師器(ロクロ使用・坏)



#### 4 土師器



#### 5 須恵器



第6図 凡例

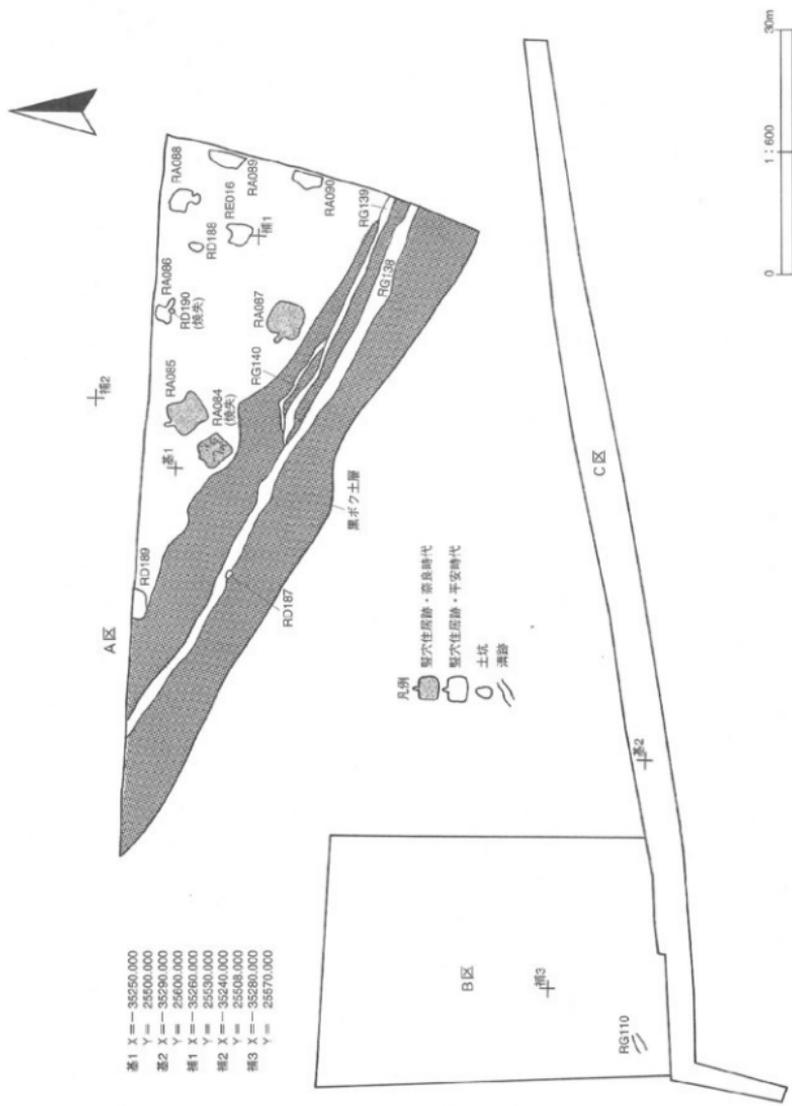
## 2 室内整理の方法

### (1) 作業手順

遺物の整理作業は①水洗、②注記、③各遺物の仕分け・登録、④接合復元、⑤拓本、⑥写真撮影、⑦実測、⑧トレース、⑨遺物図版作成の順に行っている。遺構の整理作業は①原因の点検・合成、②第2原因の作成、③トレース、④遺構図版作成の順に進めた。また、これらと並行し各種の計測、分析、原稿の執筆を行った。

### (2) 遺構図版

各遺構図版は次の縮尺を原則とし、各図面にスケールを付している。遺構配置図は1/600、壘穴住



第7図 遺構配置図

居RA・REは平面・断面1/40、カマドは1/20、土坑及び墓壇RDは平面・断面1/40、溝跡RGは平面1/40・断面1/20である。

### (3) 遺物 図版

掲載遺物図版の縮尺率は、土器・陶器、拓影・石器・鉄製品1/3、銭貨原寸とし、図版に縮尺を掲載している。土器や石器の調整技法等の表現方法は実測凡例に記した。

## IV 検出遺構と出土遺物

### 1 基本層序と遺構配置

今次調査区はA区、B区、C区に分かれるが、遺構・遺物はA区に集中する。B区からは溝1条（RG110）のみを検出した。C区に遺構はなく遺物は土器の小破片が2点だけの出土である。したがって、遺構・遺物が集中するA区の層序を基本土層として扱うこととした。

A区中央部分の南北に長さは24.5mの基本土層ベルトを設定した。

I層 砂利、川砂利、砂礫（現表土）

II層 7.5YR3/1黒色シルト主体に7.5YR4/6褐色鉄分混入 粘性なし 締り極強（旧表土）

III層 7.5YR2/2黒褐色シルト主体に7.5YR4/6褐色鉄分混入 粘性なし 締り強（耕作土）

IV-1層 10YR2/1黒色シルト 極小砂粒混入 粘性なし 締り強（黒ボク土）

IV-2層 10YR2/1黒色シルト 極小砂粒混入 十和田aテフラ溝跡埋土含む 粘性なし 締り強（黒ボク土：検出面）

V-1層 10YR2/3黒褐色砂質シルト 十和田aテフラ含む 粘性あり 締り弱（溝埋土）

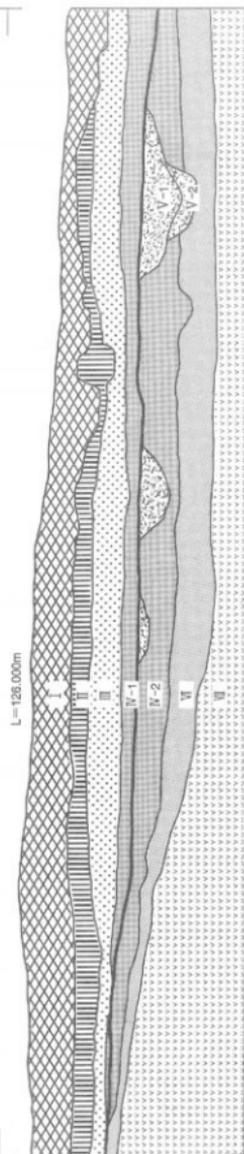
V-2層 10YR3/4暗褐色粘質シルト 10YR2/3黒褐色粘質シルト混合 粘性あり 締り弱（溝埋土）

VI層 10YR3/3暗褐色粘質シルト 粘性あり 締り強（漸移層）

VII層 10YR4/6褐色粘質シルト 粘性あり 締り中

（地山ローム層：検出面）

I層は現表土でアスファルトを剥がした後の砂利である。II層は堅く締り鉄分の沈着を含む。旧表土である。III層は黒褐色シルトの旧耕作土である。IV層は黒色シルトに極小砂粒が混入する。いわゆる黒ボク土層である。IV-2層は十和田aテフラを含み第1検出面とした。V-1層とV-2層は溝跡の埋土である。VI層は黒ボク土層



第8図 基本層序

から地山ローム層に移行する漸移層である。Ⅴ層は褐色粘質シルトの地山ローム層で第2検出面である。黒ボク土層が存在する面ではⅣ-2層を検出面とし、黒ボク土層が存在しない面ではⅤ層を検出面とした。

層は北から南方向に最大で110cmの高低差をもって下降する。Ⅳ層黒ボク土が埋土する範囲は河川の浸食により生じた旧河道跡である。

今回の調査では7棟の竪穴住居跡を検出した。3棟が奈良時代の竪穴住居跡、4棟が平安時代の竪穴住居跡である。奈良時代の竪穴住居跡は旧河道の縁辺付近に存在し、平安時代の竪穴住居跡はそれよりも北方向にやや離れ5～30cm高いところに存在する。奈良時代RA084とRA087の竪穴住居跡は比較的残存状況がよく遺物も多く出土しているが、やや高いところに位置するそれ以外の竪穴住居跡は大きく削平や攪乱の影響を受けていて遺構・遺物の残存は良くない。

## 2 出土遺物の掲載基準

出土遺物は大コンテナ(40×30×30cm)で土器6箱である。そのほとんどが土師器で占められ、須恵器または陶磁器は数点である。出土遺物を接合復元し、口縁部または底部が残存し実測可能な遺物を基本的に掲載することとし、体部だけの遺物であっても次の基準に該当する場合は掲載することとした。

- ① 残存率が30%以上であること
- ② 器種等が稀であること
- ③ 調整等が際立つこと

掲載した遺物は土師器の立体37点、破片93点、須恵器の破片2点、陶磁器1点、土製品2点、石器は1点、鉄製品7点、古銭6点、計149点である。不掲載遺物量は竪穴住居跡・竪穴状遺構から3,429g、土坑から712g、溝跡から2,824g、合計6,965gであった。遺構外遺物量は表採や攪乱等から2,993gであった。不掲載遺物量は合計で9,958gであった。以上はA区からの出土である。B区の出土遺物はない。C区の出土遺物は土師器の小破片1点、須恵器の小破片1点、計2点であったが体部の小破片(3～5cm)であったため不掲載とした。

## 3 遺構と遺物

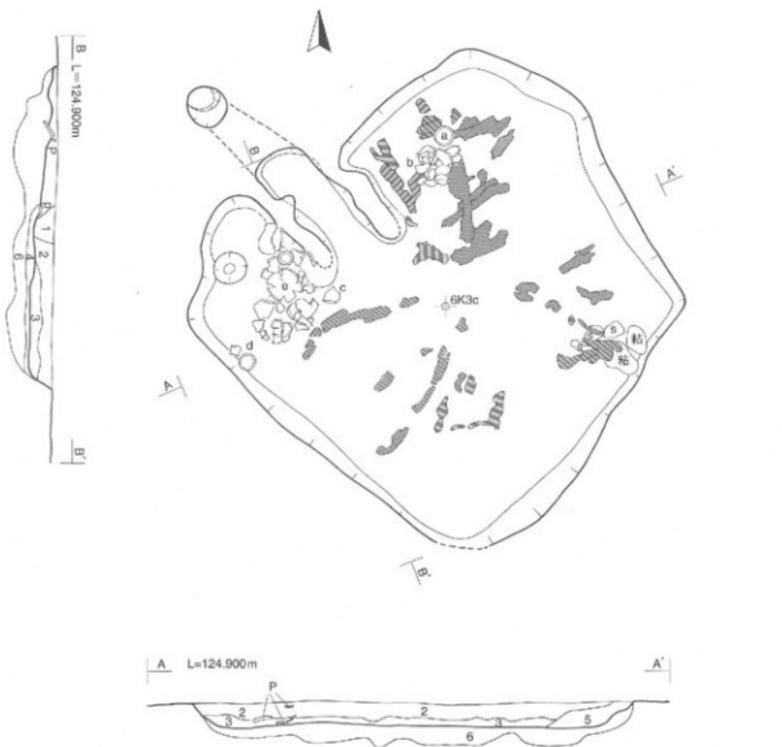
### RA084竪穴住居跡

#### 遺構(第9・10図、写真図版6・7)

A区6K3cに位置する。床面の標高は12.42mである。黄褐色ロームでの検出であり埋土はシルトであった。プランの境日は不明瞭であったこととプランの南端部分は、旧河道の黒ボク土と接触するため平面全体の確認が難しく切り合いの可能性も考えられた。よって、トレンチを入れ埋土断面で土層を確認する必要がある。竪穴住居跡の断面位置が中心を大きく外れているのはそのためである。

規模は長径が東西に3.51m、短径は南北に3.1m、深さは最大で35cmを測る。平面形はほぼ隅丸方形を呈している。埋土は黒褐色シルトと灰黄褐色シルトに大別される。

カマドは北西の壁に設置され、カマドの両袖の先端部分は土器芯材によって構築している。両袖のほぼ中心には、支脚として用いられた甕(10)が伏せた状態で設置してある。煙道の長さは支脚からの1.4mで、幅は30～35cmと推定される。煙出しの径は32～35cm、深さ42cmを測る。煙道埋土からは天井部が崩落した焼土を確認している。燃烧部の規模は長径65cm、短径28cm、厚さ15cmを測る。褐色

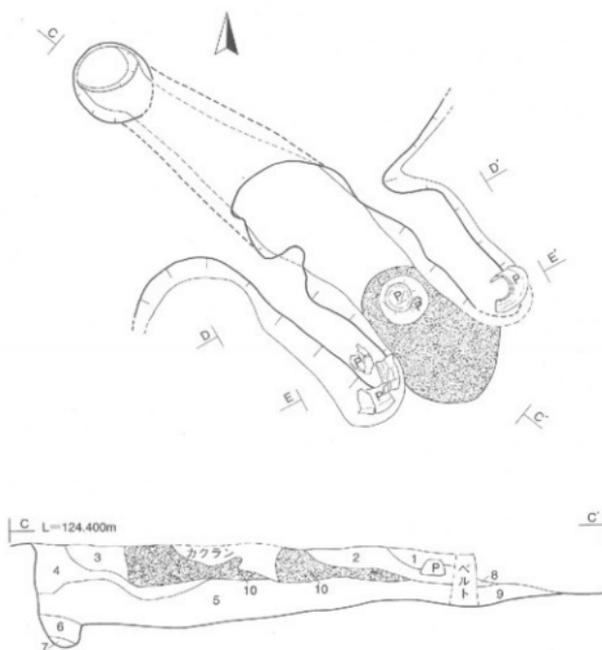


R A084 A-A' と B-B' 共通

- 1 : 10YR3/1 黒褐色シルト 微量砂混入 粘性なし 締り強  
 2 : 10YR3/2 黒褐色シルト 地山ブロック少量混入 粘性なし 締り強  
 3 : 10YR3/2 黒褐色シルト 炭化物・焼土多量混入 粘性ややあり 締り中  
 4 : 10YR3/2 黒褐色シルト 地山ブロック・焼土多量混入 粘性ややあり 締り中  
 5 : 10YR4/2 灰黄褐色シルト 焼土ブロック混入 粘性ややあり 締り中  
 6 : 10YR4/2 灰黄褐色シルト 粘性ややあり 締り中

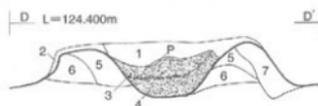
0 1:40 1m

第9図 RA084竪穴住居跡(1)



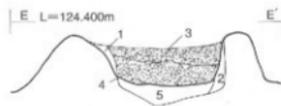
## R A084 カマD-C'

- 1:7.5YR3/3 暗褐色シルト 焼土ブロック混入 粘性なし 締り中  
 2:10YR3/1 黒褐色シルト 炭化物・焼土・地山ブロック混入 粘性なし 締り中  
 3:10YR5/4 にぶい黄褐色シルト 褐色シルトブロック混入 粘性なし 締り中  
 4:10YR3/1 黒褐色シルト 炭化物・焼土ブロック混入  
 5:10YR2/2 黒褐色シルト 炭化物・焼土ブロック多量混入 粘性ややあり 締り中  
 6:10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 炭化物混入 粘性なし 締り中  
 7:10YR2/1 黒色シルト 炭化物多量混入 粘性なし 締り中  
 8:7.5YR4/6 褐色シルト 焼土ブロック混入 粘性ややあり 締り中  
 9:7.5YR3/3 暗褐色シルト 炭化物・焼土ブロック混入 粘性なし 締り中  
 10:10YR4/2 灰黄褐色シルト 焼土ブロック多量混入 粘性なし 締り中



## R A084 カマD-D'

- 1:10YR3/1 黒褐色シルト 炭化物・焼土ブロック混入 粘性なし 締り中  
 2:10YR4/3 にぶい黄褐色シルト 焼土ブロック混入 粘性なし 締り中  
 3:10YR4/2 灰黄褐色シルト 焼土ブロック多量混入 粘性なし 締り中  
 4:10YR2/2 黒褐色シルト 炭化物・焼土ブロック多量混入 粘性なし 締り中  
 5:10YR4/6 褐色シルト 炭化物・焼土ブロック混入 粘性なし 締り中  
 6:10YR4/6 褐色シルト (地山? やや汚れあり) 粘性なし 締り中  
 7:10YR3/2 黒褐色シルト 炭化物・焼土多量混入 粘性なし 締り中



## R A084 カマE-E'

- 1:7.5YR4/3 褐色シルト 焼土ブロック混入 粘性なし 締り中  
 2:7.5YR3/4 暗褐色シルト 焼土ブロック混入 粘性なし 締り中  
 3:7.5YR3/3 暗褐色シルト 焼土ブロック混入 粘性なし 締り中  
 4:7.5YR4/6 褐色シルト 焼土ブロック混入 粘性ややあり 締り中  
 5:7.5YR3/3 暗褐色シルト 炭化物・焼土ブロック混入 粘性なし 締り中

0 1:20 50cm

第10図 R A084竪穴住居跡(2)

砂質シルトの床面は堅く締っている。床面には40個程度の炭化材(ケヤキ・ナラ)が中央から隅の方向に散乱して検出された。年輪が確認できるほどの材で、散乱の様子から焼失住居跡であると思われる。また、住居跡の東壁際に灰白色の粘土塊が2つ検出されたが詳細は不明である。

#### 出土遺物(第11~14図、写真図版19~21)

遺物はカマド付近から集中し土器類が多く出土している。甕が15個、坏が4個、破片が3点である。他に土製紡錘車1点が出土している。

1はカマド袖左付近の床直上より出土した土師器球胴甕である。口縁部から底部にかけて良好に残存し、口唇部をヨコナデで、頸部に明瞭な2本の稜線が巡っている。外面体部上半の調整はミガキで、内面が回転ナデである。底部に木葉痕がある。遺物の中で最も大きい土器であり、輪積痕から3回に分けて成形されたものと思われる。

2はカマド袖右付近の床直上より出土した土師器球胴甕である。口縁部から底部にかけて良好に残存する。口縁部はヨコナデでほぼ直角に屈曲し立ち上がり、3本の稜線を持つ。外面上半部の調整はハケメである。輪積痕が2ヶ所に見られ、数回に分けて成形したものと思われる。

3はカマド煙道埋土から出土した土師器球胴甕である。体部から底部にかけての剥片である。外面体部に僅かにヘラナデ調整が見られ、胎土は粗い。底部は木葉痕である。

4はカマド周辺から出土した土師器球胴甕である。体部から底部にかけての剥片である。外面体部にハケメが、内面にヘラナデ調整が見られ、胎土は粗い。底部は木葉痕である。

5はカマド袖左付近から出土した土師器長胴甕である。口縁部から底部にかけて良好に残存し、調整は内外面ともにヘラナデである。胎土は粗く、外面にはスガが内面にはコゲが付着する。

6は土師器長胴甕で、口縁部から体部下半にかけて残存する。調整は外面がケズリで内面はヘラナデである。器厚は他の土師器に比べ厚く、胎土・焼成共に良好である。土器は伏せた状態でカマド右袖の芯材として使用されていた。

7は唯一の土師器鉢で、カマド左袖付近から出土している。頸部から肩部にかけて明瞭な段を持ち、外面はケズリの調整である。内面はヘラナデの後に指で押した押捺痕の調整が見られる。

8はベルト埋土から出土した土師器小甕である。口縁部から底部にかけて良好に残存し、内外面ともに明瞭なハケメ調整を施している。器厚は薄い。

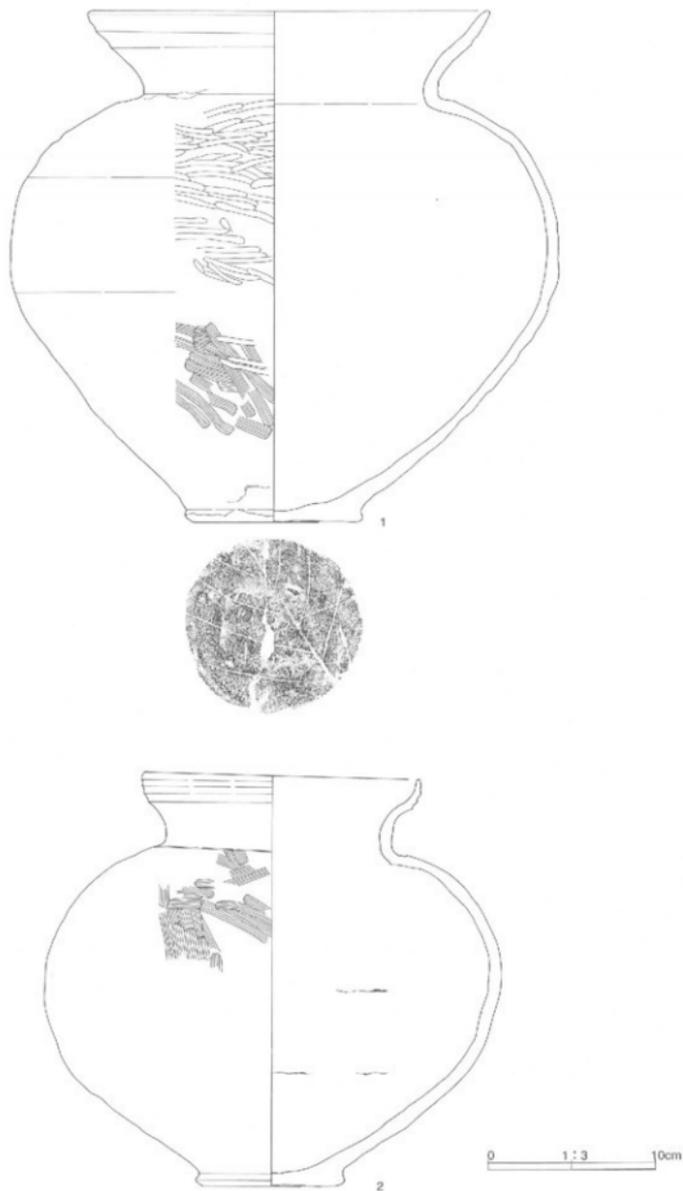
9はベルト埋土中から出土した土師器小甕である。口縁部から底部にかけて良好に残存している。調整は内外面ともにハケメである。器厚は薄く、胎土はかなり粗い。外面にスス付着。底部に押捺痕がある。

10は土師器甕である。体部下半から底部にかけて残存し、内外面ともに調整はハケメである。器厚は最大で1.7cmあり、胎土・焼成ともに良好で堅く締まっている。カマド中央から伏せた状態で出土したことから支脚に転用使用されたものと思われる。

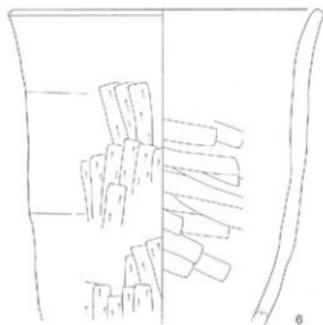
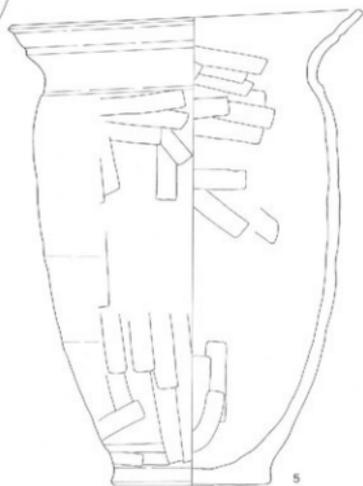
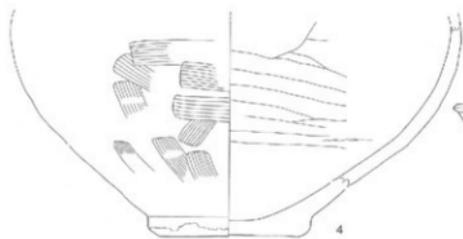
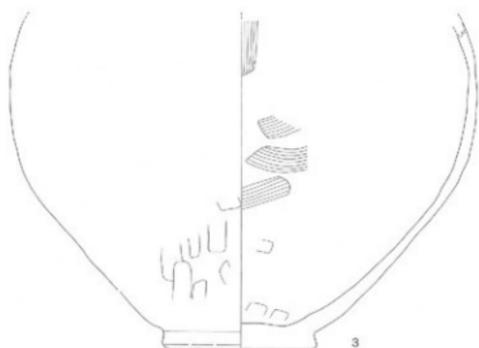
11は土師器甕で、口縁部から体部上半にかけて残存する。頸部はヨコナデ調整が施され体部との境目に段を持つ。外面はハケメ、内面はヘラナデの調整である。胎土・焼成ともに良好で堅く締まっている。カマド左袖傍からの出土で、芯材に使用された可能性もある。

12は土師器長胴甕で、口縁部から体部までの1/3が残存する。頸部から体部の境目に明瞭な沈線有する。外面はハケメ、内面はヘラナデ調整である。胎土・焼成ともに良好で堅く締まっている。外面にはスガが、内面にコゲが付着する。カマド左袖からの出土で、煮炊きに使用された後に芯材として転用されたものと思われる。

13はベルト埋土から出土した土師器甕である。口縁部から体部までの1/3が残存する。頸部から体

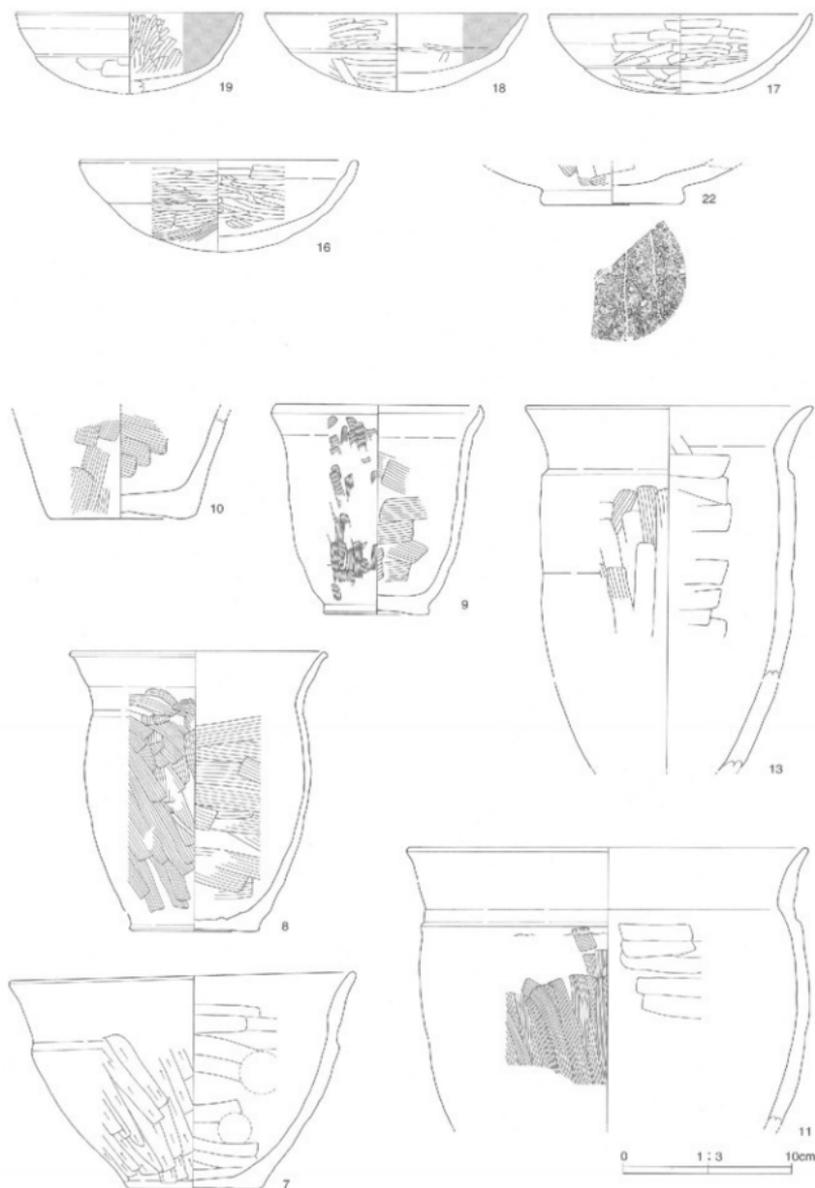


第11図 R A084竪穴住居跡出土遺物 (1)



0 1:3 10cm

第12図 R A084竪穴住居跡出土遺物(2)



第13図 RA084竪穴住居跡出土遺物 (3)

部の境目に明瞭な段を有し、外面はハケメ、内面はヘラナデ調整である。胎土・焼成ともに良好で堅く締まっている。外面にスス、内面にコゲが付着する。

14・15は土師器甕で口縁部から体部までの1/5が残存する。頸部から体部の境目に明瞭な段を有し、内外面ともにハケメ調整である。胎土・焼成ともに良好で堅く締まっている。14は南西埋土、15は北西埋土上層からの出土である。

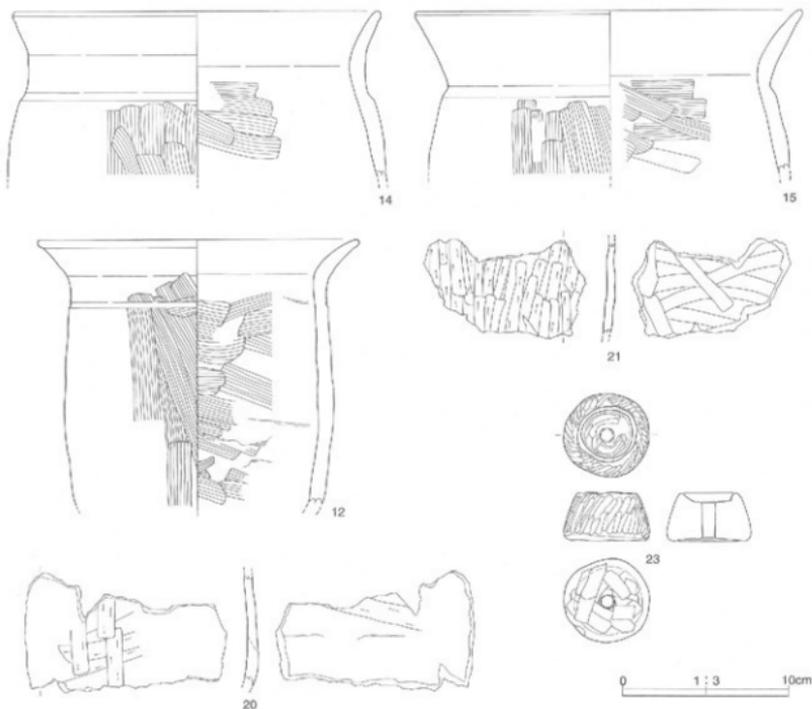
16～19は土師器坏で、口縁部から底部にかけて良好に残存する。17～19は外面に緩い段を有し、内外面はミガキまたはヘラナデ調整後、内面は黒化処理されている。すべて丸底である。胎土は粗いものが目立ち、特に18はスコリアを含む。カマド付近南壁端からの出土である。

20・21は土師器甕体部破片で、内外面ともにケズリ調整である。断面と内面に輪積痕が見られる。胎土は粗く焼成は良くない。カマド埋土からの出土で、20と21同一個体と思われる。

22は土師器甕底部破片である。外面には僅かにヘラナデ調整、断面には輪積痕が見られる。底部は木葉痕がある。胎土は粗い。ベルト埋土から出土している。

23はカマド付近南壁際床直から出土した土製紡錘車である。円錐台形をしており中央部に径8mmの穿孔を有する。側面には細かなミガキ調整が施され、底部にヘラナデ調整痕が見られる。

所属時期 住居形態や遺物から7世紀末～8世紀前半の奈良時代と考えられる。



第14図 R A 084 竪穴住居跡出土遺物 (4)

## R A085竪穴住居跡

## 遺 構 (第15図、写真図版8)

A区6 K 1cに位置する。床面の標高は125.51mである。黄褐色ロームでの検出であり埋土は褐色シルトである。この竪穴住居跡は周りより約20cm高い場所に位置することから礫は削平され3~10cm残存するのみである。また、東端は撓乱を受け一部破壊されている。

規模は長径が4.1m、短径が3.8m、深さは最大で10cmを測る。平面形は隅丸方形を呈している。埋土は暗褐色シルト単層である。床面はやや締まった黄褐色粘土質土で、10個の小ピットを有するが用途は不明である。

カマドは北西の壁に設置されているが、煙道を僅かに残すのみで本体部と袖は削平され、燃焼部焼土のみが存在する。燃焼部焼土の厚さは最大8cmを測る。煙道の長さは1.1m残存している。

## 出土遺物 (第16図、写真図版21)

南に穿った床土から残存が良好な甕が出土している。

24は西側埋土下層から出土した鋤先である。1/4程度残存し、表裏ともに腐食が著しく錆が浮き上がっている。装着部の内側にV字状の溝が浅く巡り、長さは10.5cm、幅が3.0cm、重さ32.9gである。

25はベルト埋土から出土した鋤先で、1/5程度残存する。長さは6.5cm、幅が3.2cm、重さ25.4gである。装着部の内側にV字状の溝が浅く巡ることから本体の横部と思われる。26と同一体の可能性がある。

26は鋤先で、1/5程度残存する。長さは7.0cm、幅3.2cm、重さ29.6gである。表裏ともに腐食が著しく錆が浮き上がっている。装着部の内側にV字状の溝が深く巡ることから先端部と思われる。25と同一体の可能性がある。

27は床直上から出土した土師器甕である。口縁部から体部下が残存し、頸部と体部の境目に明瞭な段を有する。外面はハケメを中心にヘラナデが混在する。内面は工具で押しつけた後に指で撫で最後にハケメで調整した痕が見られる。器厚は薄く、体部に黒斑が吸着している。

28は土師器体部破片で、体部と底部の境目に明瞭な段を有し、外部の段の上はヘラナデ、段の下はケズリ調整である。内面は黒色処理され細かなミガキ調整が縦に入る。器厚は厚く、胎土・焼成ともに良好で堅く締まっている。

29は土師器体部破片である。内外面ともにミガキ調整で内面は黒化処理されている。

30は埋土から出土した土師器甕底部の破片である。外面はヘラナデ調整を施している。

31は土師器甕口縁部破片で、内外面ともにヨコナデ調整である。

32は土師器体部破片である。外面はヨコナデ、内面はケズリ調整で、外面には赤色顔料が付着し、内面に化粧土が施されている。胎土は粗く焼成は不良である。33と同一体と思われる。

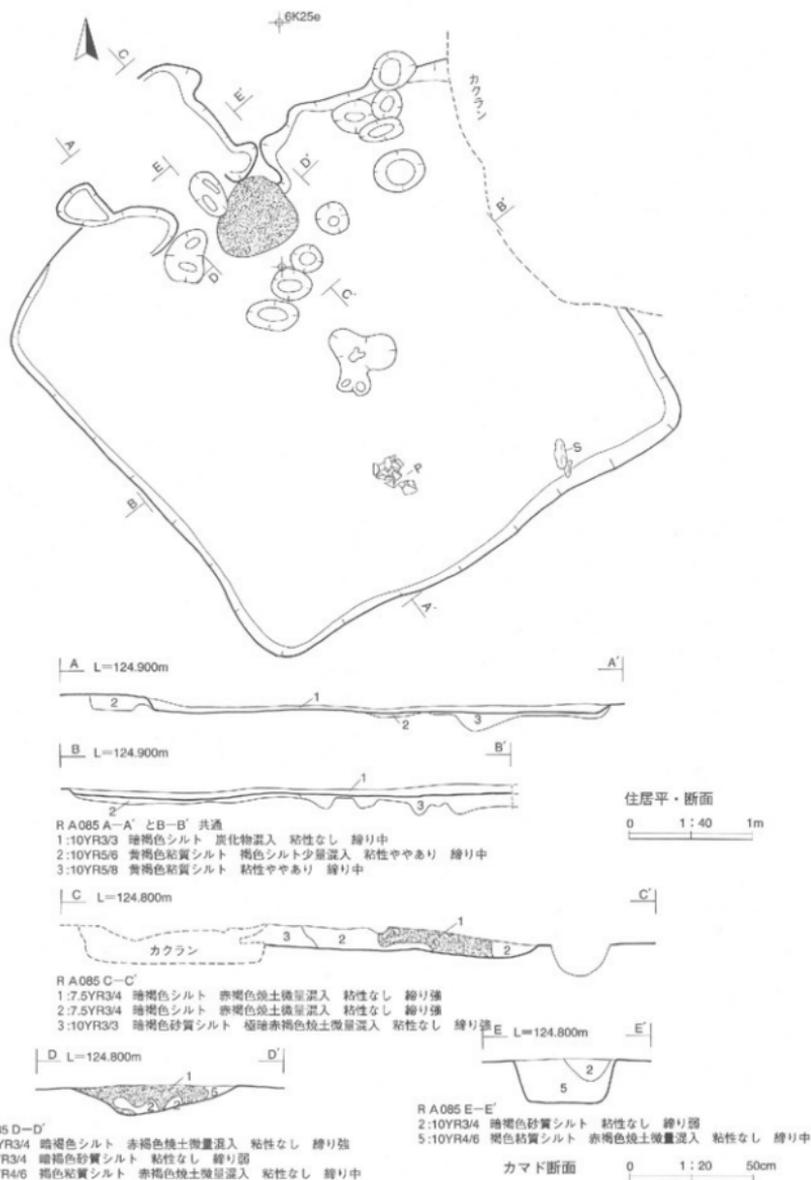
33は土師器体部破片である。外面はヨコナデ、内面はケズリ調整である。外面には赤色顔料が付着し、内面には化粧土が施されている。32と同一体と思われる。

所属時期 住居形態や遺物から7世紀末~8世紀前半の奈良時代と考えられる。

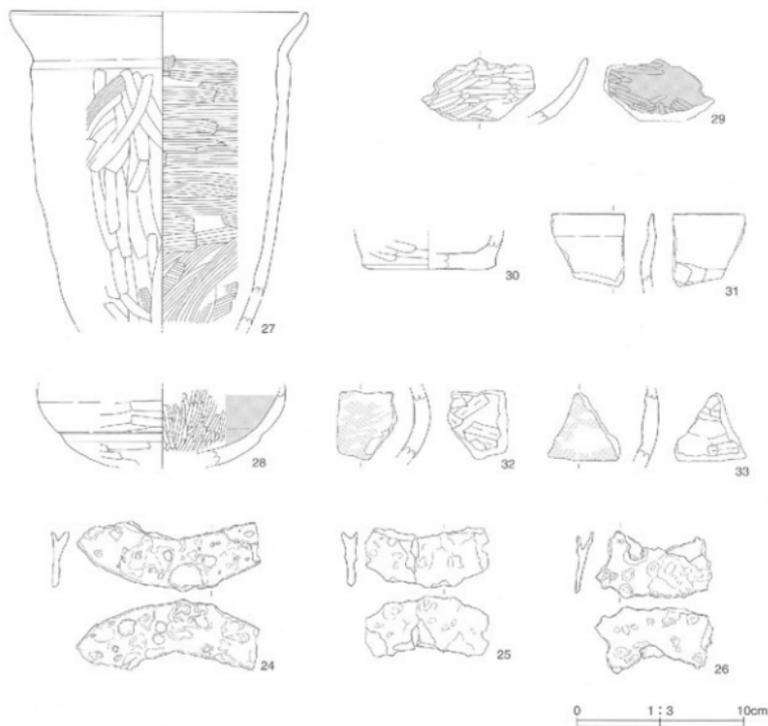
## R A086竪穴住居跡

## 遺 構 (第17図、写真図版9)

A区5 K 25 Iに位置する。床面の標高は125.10mである。黄褐色砂質シルトで検出され、埋土は褐色シルトの単層である。このエリアは削平されている上に激しく撓乱されており、残存するのは煙道の一部と床面の一部だけであった。床面は黒色シルトで極小砂粒を含み堅く締まっている。



第15図 R A 085 竪穴住居跡



第16図 R A 085竪穴住居跡出土遺物

カマドは東方向に設置されているが袖は削平されている。燃焼部から煙出しまでの長さは2.2m、最大幅35cm、深さは50cmを測る。煙出部は平面でも明瞭に確認でき焼土も良好に残存していた。煙出し開口部の最大径は51cmで、深さ30cmを測る。

煙道の規模からこの住居跡は6mを越える大形であったと推測されるが、壁は全て攪乱により破壊されている。

#### 出土遺物（第18図、写真図版21）

遺物はカマド燃焼部付近から土師器の甕・坏の破片が9点出土している。また、R A 086を切るR D 190の埋土中から土師器甕・坏の破片が出土しており同時期であることからR A 086に共存する遺物として扱うこととした。R D 190から出土した遺物は110～118である。

34はカマド燃焼部から出土した土師器甕口縁部から体部にかけて破片である。内外面ともに回転ナデ調整で、口唇部の端部は直角気味に立ち上がっている。胎土は粗く色調は橙である。37と同一の個体と思われる。

35はカマド燃焼部から出土した土師器小甕である。体部から底部にかけて1/3残存し、内外面とも



に回転ナデ調整を施し、内面にハケメ調整とヘラナデ調整が見られる。底部は回転糸切である。

36は土師器坏底部破片である。底部は回転糸切で、カマド燃焼部から出土している。

37はカマド燃焼部から出土した土師器甕の口縁部から体部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデ調整で、口唇部の端部は直角気味に立ち上がっている。胎土は粗く色調は橙である。34と同一の個体と思われる。

38はカマド燃焼部から出土した土師器小甕の口縁部破片である。内外面ともに回転ナデで、内面に一部ハケメ調整が見られる。胎土・焼成ともに良好である。

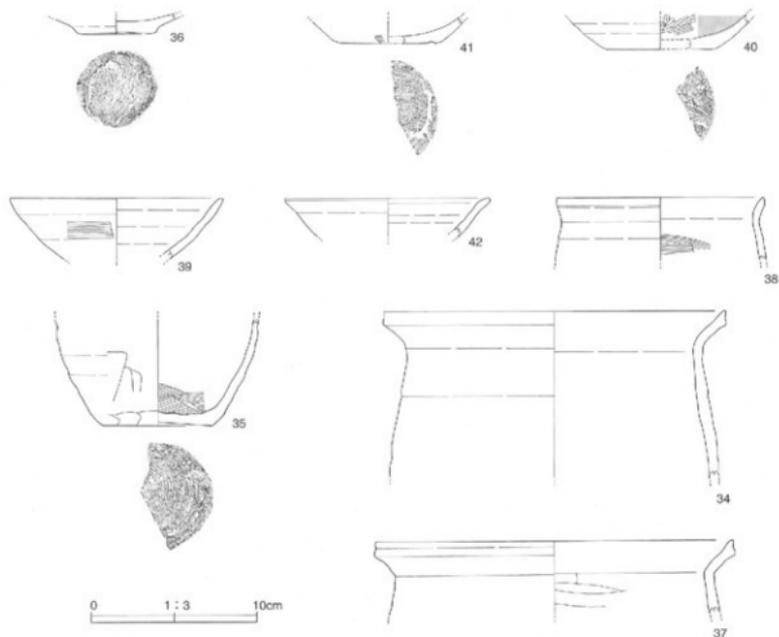
39はカマド燃焼部から出土した土師器坏口縁部から体部にかけての破片である。内外面ともに回転ナデ調整で、外面に一部ハケメ調整が見られる。胎土は良好である。

40はカマド燃焼部付近から出土した土師器坏体部から底部にかけての破片である。外面は回転ナデ調整で、内面はミガキ調整で黒色処理されている。

41はカマド燃焼部から出土した土師器坏底部の破片である。内外面ともに回転ナデ調整で、外面に一部ハケメ調整が見られる。胎土は良好だが焼成は不良で、色調は赤褐色である。底部は回転糸切り痕である。

42はカマド燃焼部付近から出土した土師器坏口縁部の破片である。内外面ともに回転ナデ調整を施し、胎土・焼成ともに良好である。

所属時期 住居形態や遺物から9世紀末～10世紀前半の平安時代と考えられる。



第18図 R A 086 竪穴住居跡出土遺物

## R A 087竈穴住居跡

遺 構 (第19・20図、写真図版10・11)

A区6K7kに位置する。床面の標高は124.97mである。旧河道際の黒ボク土層に接近しているためプランの境日は不明瞭で、当初は遺構が無いものと考えていた。また、カマド位置をなかなか特定できずベルトをかけて全体を把握する必要があった。

規模は長径が東西に4.4m、短径は南北に4.1m、深さは最大で50cmを測る。平面形はほぼ隅丸方形を呈している。埋土は主に黒褐色粘質シルトからなり、炭化物を含んでいる。床面は黒褐色粘質シルトで締っている。また、3基の焼土を検出した。

カマドは北西の壁に設置されている。カマドの両袖の先端部分に土器が集中し、土器を芯材にしてカマドを構築している。両袖のほぼ中心には、支脚として用いられた小甕(52)が伏せた状態で設置してあった。支脚からの煙道の長さは1.3mで、幅は30~35cmである。煙出しの径は37~40cm、深さ28cmを測る。燃焼部焼土の規模は長径78cm×短径36cm、厚さ5cmを測る。

## 出土遺物 (第21~23図、写真図版22~24)

遺物はカマド埋土から土師器の甕や坏が多く出土し、カマド以外の床からも数点出土した。立体の甕が11個、坏が4個、鉢1個、土師器の破片が8点である。他に鉄製品3点、土錘1点が出土している。

43は土師器球胴甕である。口縁部から底部まで良好に残存し、頸部と体部の境日に明瞭な段を有する。内外面ともにハケメ調整で、外面にはススが付着している。胎土は粗く焼成は不良である。

44は土師器長胴甕で、口縁部から底部まで残存する。口唇部はほぼ直角に立ち上がり、外面はハケメ、内面はヨコナデ調整である。底部は木葉痕である。胎土は粗く焼成は不良である。カマド両袖の中央支脚の上から出土し、外面にススが内面にコゲが付着している。

45はカマド周辺から出土した土師器長胴甕である。口縁部から底部まで良好に残存し、外面はケズリ、内面はハケメ調整である。内面に輪積痕が数ヶ所見られ、胎土は粗く焼成は不良である。

46は土師器長胴甕である。口縁部から底部まで残存する。外面はケズリ、内面はハケメ調整で、底部は木葉痕である。胎土は粗く焼成は不良である。カマド右袖付近から出土している。

47は土師器長胴甕である。外面はハケメ、内面はヘラナデ調整を施している。胎土・焼成ともに不良で、色調は橙で一方の面は強く熱を受けている。伏せた状態でカマド右袖から出土したことからカマドの芯材に使用したものと思われる。

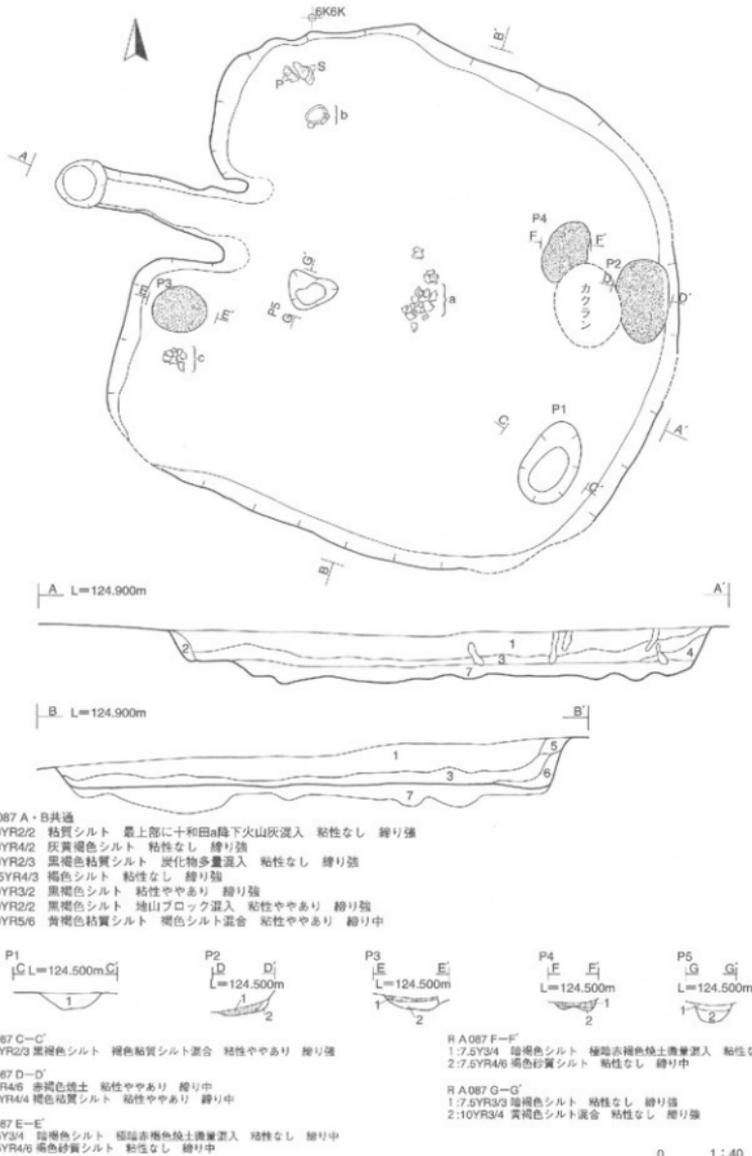
48は土師器長胴甕で、口縁部から底部まで残存している。口唇部がほぼ直角に立ち上がり、外面はヘラナデとケズリ調整、内面はヨコナデとヘラナデ調整である。底部は木葉痕である。胎土は粗く焼成は不良で、外面にスス、内面にコゲが付着する。

49は土師器長胴甕である。口縁部から底部まで残存する。外面はケズリ、内面はヘラナデ調整である。外面にスス、内面にコゲが付着する。

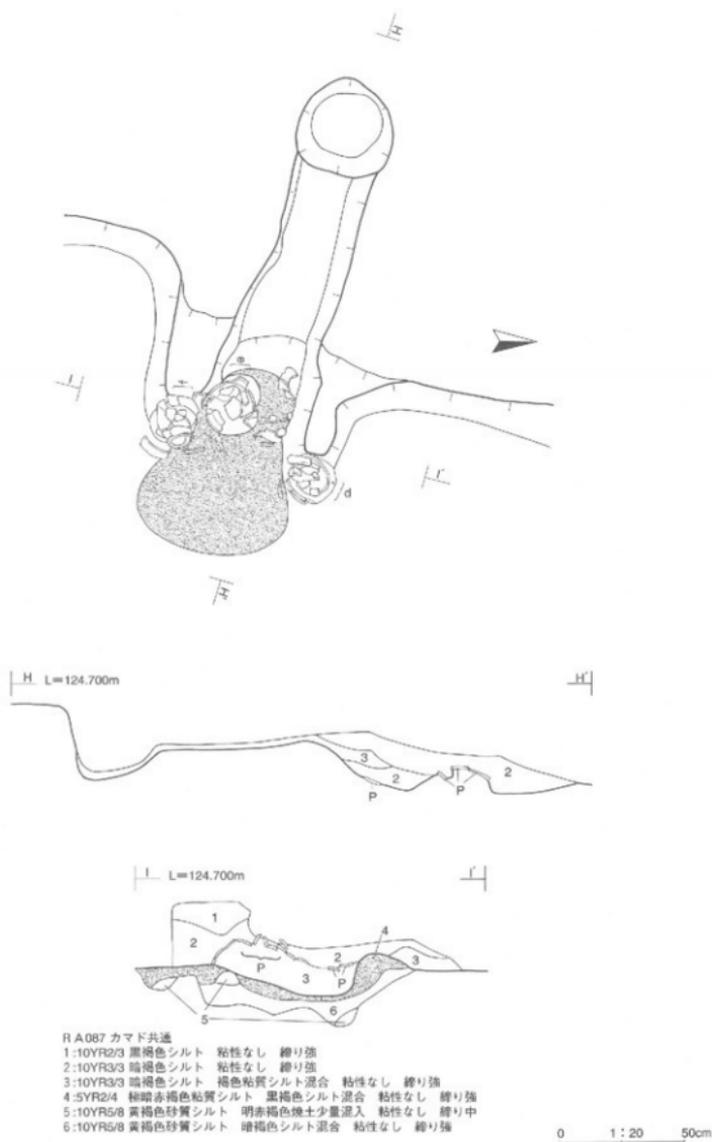
50はカマド左袖付近から出土した土師器長胴甕である。1/2が残存し、外面はヘラナデとケズリ調整、内面はハケメ調整を施し、底部は木葉痕である。

51はカマド燃焼部から出土した土師器鉢である。口縁部は外傾し体部との境目に明瞭な段を有し、内外面ともにヘラナデ調整である。器厚は薄く、胎土は粗いものの焼成は良好である。

52は土師器小甕である。内外面ともにハケメ調整で、器厚は7~10mmと厚く焼成は良好である。カマド両袖中央から伏せた状態で出土し、外面にススが内面にコゲが付着していることから煮炊きに使用した後、土師器の体部上半を欠き支脚に転用したものと思われる。



第19図 R A087竪穴住居跡(1)



第20図 R A087竪穴住居跡(2)

53は床直から出土した土師器小甕で、体部から底部にかけて1/4が残存する。外面はヘラナデ・ハケメ調整、内面はヘラナデ調整である。胎土・焼成ともに不良である。

54は貼床から出土の土師器小甕である。体部から底部にかけて1/4が残存する。外面はケズリ調整、内面はハケメ調整である。底部は木葉痕である。胎土粗く焼成は良好である。

55は土師器小甕で、口縁部から底部にかけて残存する。内外面ともにヨコナデ調整で一部ハケメが見られる。胎土・焼成ともにあまり良好ではない。カマド付近からの出土である。

56は土師器坏で、口縁部から底部まで残存する。口径が16.9cmで大形である。口縁部と体部の境目に明瞭な段を持ち、内外面ともにハケメ調整で内面は黒色処理されている。胎土・焼成ともにあまり良好ではない。床直上からの出土である。

57は床直上から出土した土師器坏で、口縁部から底部まで良好に残存する。口縁部と体部の一方の境目に段を有し、外面はミガキ調整、内面はヘラナデ調整後黒色処理されている。

58は埋土下層から出土した土師器坏である。口縁部から底部まで1/3残存し、口縁部と体部の境目に段を持ち、外面はミガキ調整、段の下はケズリ調整である。内面はヘラナデ調整後黒色処理されている。

59・60は同一個体と思われる土師器甕の破片である。1/4が残存し、外面はケズリ調整、内面はヘラナデ調整である。胎土・焼成ともに良好である。カマド右袖からの出土で、被熱の状況から芯材に使用された可能性がある。

61は土師器甕底部の破片で、1/4が残存する。外面はハケメ調整、内面はハケメ・ヘラナデ調整である。埋土下層からの出土である。

62は土師器甕の口縁部から体部にかけての破片で、1/4以下残存する。口縁部は直角気味に外傾する。外面はハケメ調整、内面はヘラナデ調整で、内面にコゲが付着する。カマド両袖中央からの出土である。

63・64は土師器甕底部の破片で、1/4以下が残存する。63・64ともに内外面はヘラナデまたはケズリ調整である。64の底部は木葉痕である。63は埋土上層、64はカマド付近からの出土である。

65は土師器坏口縁部から体部の破片で、1/4以下が残存する。体部下層の外面はヘラナデで、内面は細かいミガキ調整後黒色処理されている。

66は床から出土した土錘である。長さ2.5cm、幅1.8cm、厚さ1.8cm、孔径0.3cmを測る。外面は黒色処理されている。

67は削端が欠損した角釘である。長さは5.0cm、幅0.7cm、厚さ0.4cmを測る。埋土上層からの出土である。

68も角釘で、先端が欠けている。長さ4.2cm、幅0.3cm、厚さ0.3cmを測る。埋土上層からの出土である。

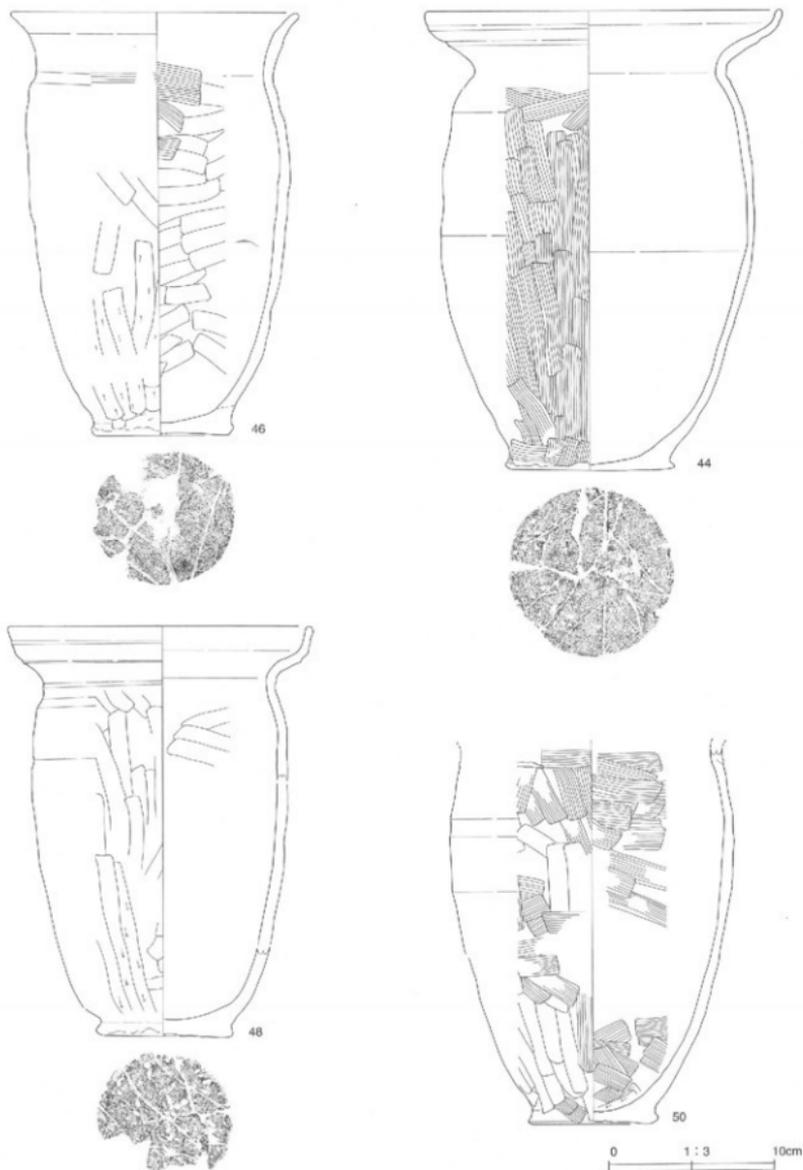
69は不明鉄製品である。中央に穿孔を有し、端部が欠けている。表面は錆が浮き上がり凹凸がある。形状は三角形で、一辺が3.3cm、2.8cm、3.0cm、穿孔径0.8cmである。埋土上層からの出土である。

所属時期 住居形態や遺物から7世紀末～8世紀前半の奈良時代と考えられる。

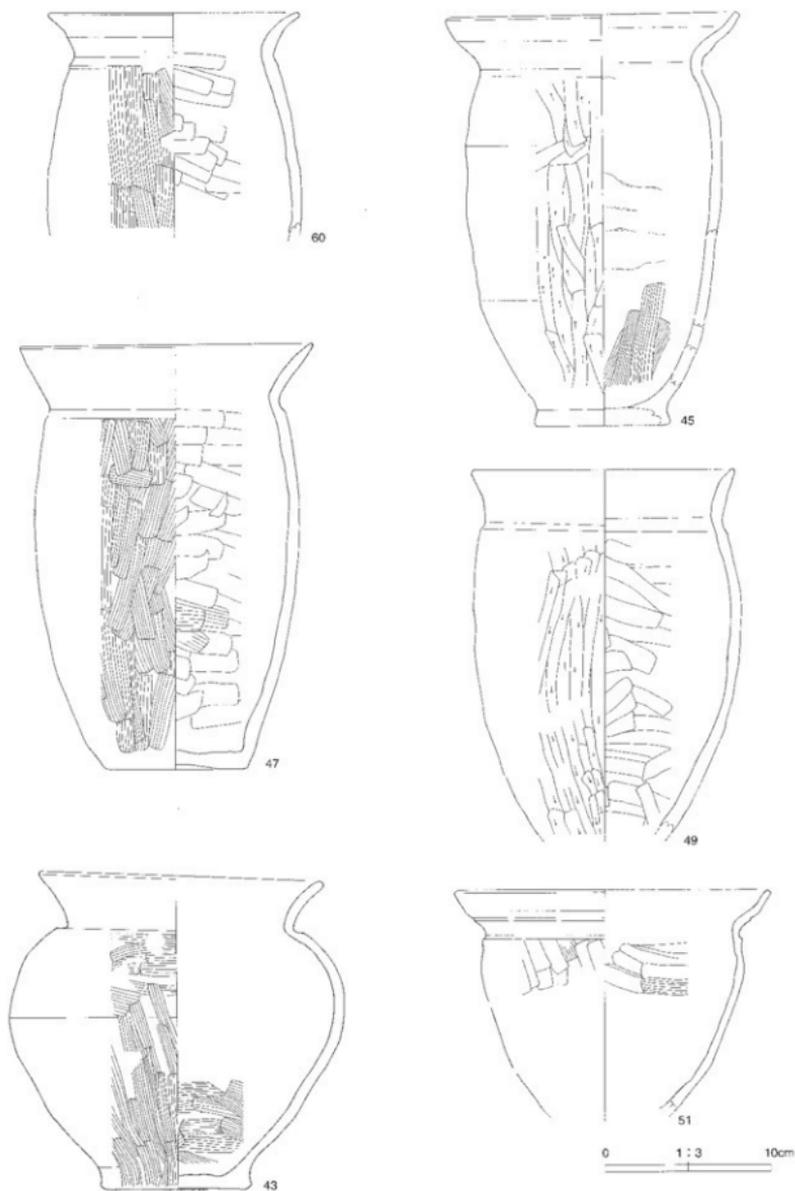
#### RA088竪穴住居跡

##### 遺構 (第24図、写真図版12)

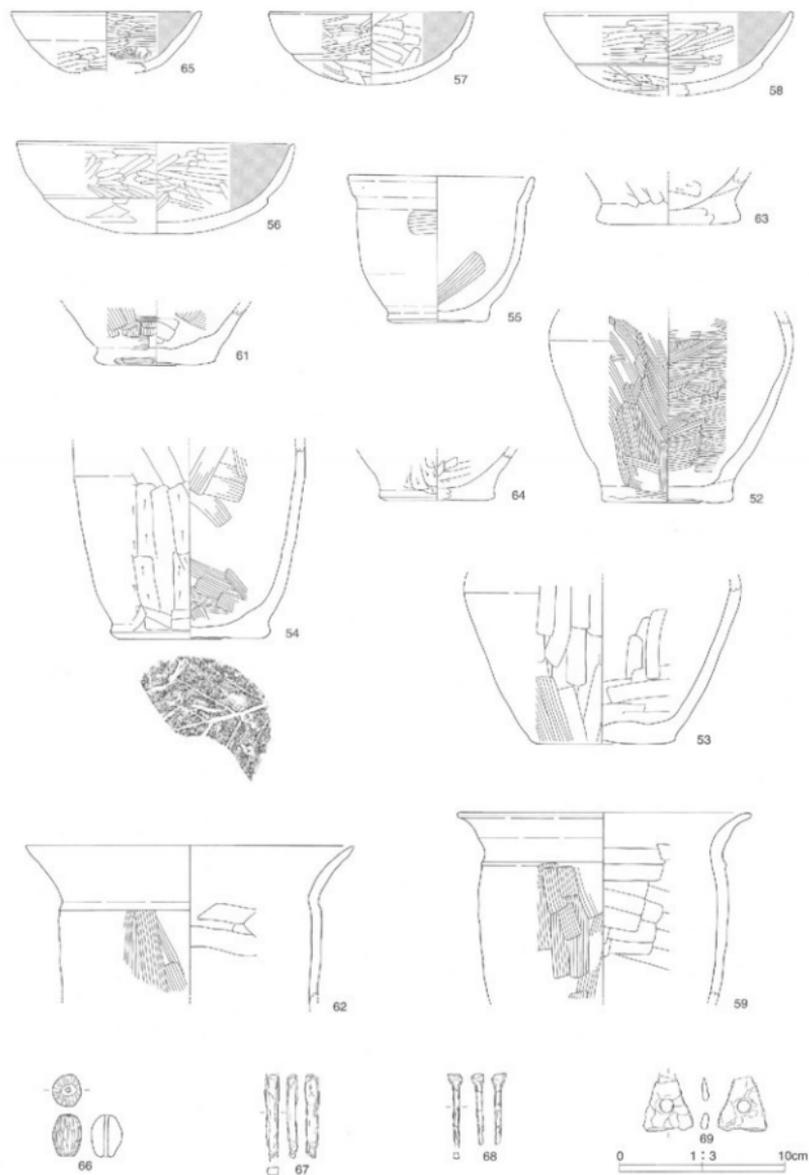
A区6K1sに位置する。床面の標高は125.29mである。黄褐色砂質シルトでの検出であり埋土は褐色シルトである。しかし、この地区は削平されている上に激しく擾乱されていて残存するのは、床



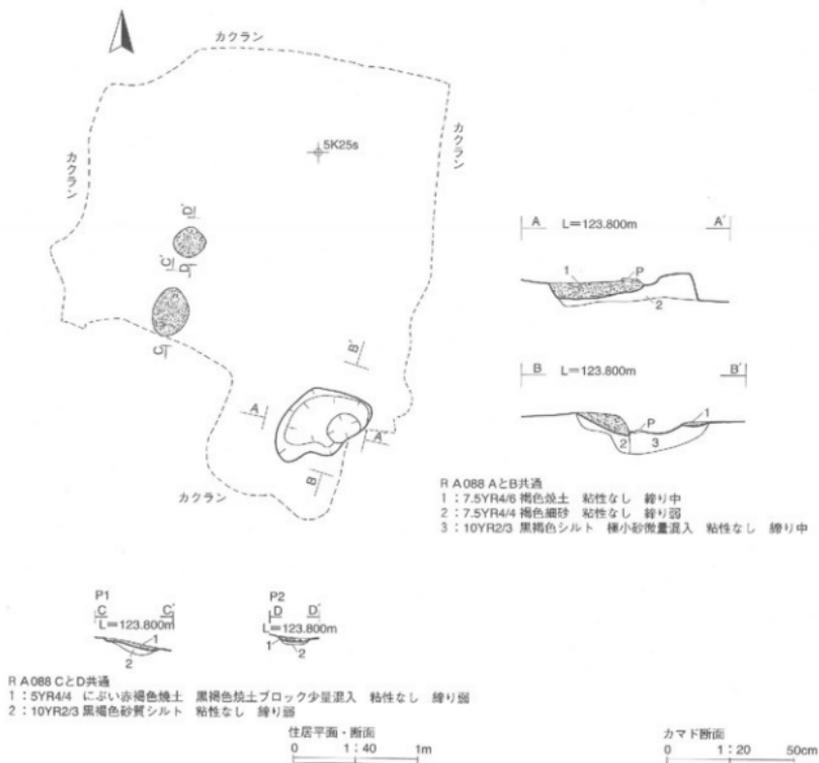
第21図 R A087竪穴住居跡出土遺物(1)



第22図 R A087竪穴住居跡出土遺物(2)



第23図 RA087竪穴住居跡出土遺物(3)



第24図 R A088竪穴住居跡

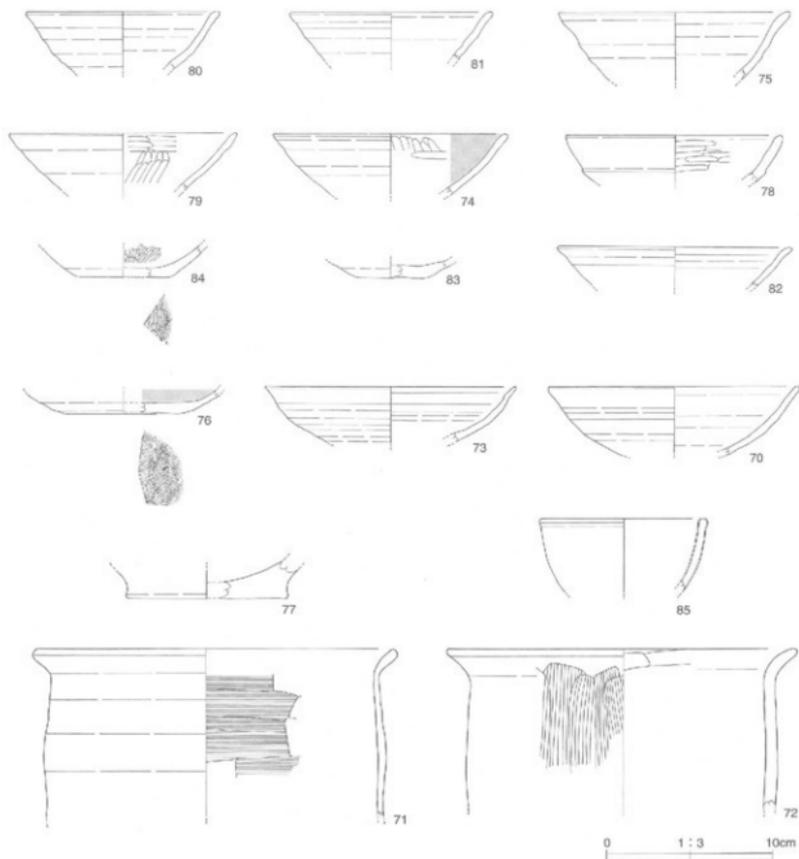
面の一部とカマド燃焼部のみであった。壁が破壊されていて住居跡規模の詳細は不明である。床面の埋土は削平されていて存在せず2つの焼土のみが存在した。焼土C-C'の規模は長径20cm、短径14cm、深さ5cmを測る。焼土D-D'の規模は長径14cm、短径13cm、深さ3cmを測る。

カマドは東方向に設置されているが、煙道と袖部は削平されている。燃焼部は南北に55cm、東西に38cm、厚さ8cmを測る。

#### 出土遺物 (第25図、写真図版24)

遺物はカマド燃焼部埋土中から主に出土した。掲載遺物は土師器杯の破片が12点、土師器壺の破片が3点、陶器の破片が1点の計16点である。

70はカマド燃焼部から出土した土師器杯破片である。口縁部から体部まで1/2残存し、内外面ともに回転ナデ調整である。器厚は薄く、色調は橙である。



第25図 RA 088 竪穴住居跡出土遺物

71はカマド燃焼部から出土した土師器甕の破片で、口縁部から体部まで1/4が残存する。口縁部は外傾する。外面は回転ナデ調整で、内面はカキメ調整である。胎土は粗く焼成は不良で、器厚は0.3cmで薄い。外面にススが付着している。

72はカマド燃焼部から出土した土師器甕の破片である。口縁部から体部まで1/4残存し、口縁部は外傾する。外面はハケメ調整、内面はヨコナデ調整である。胎土は粗く、焼成は不良である。

73は土師器杯の破片で、口縁部から体部まで1/4残存する。内外面ともに回転ナデ調整で、器厚は薄い。カマド燃焼部からの出土である。

74はカマド燃焼部から出土した土師器杯の破片である。口縁部から体部まで1/4残存し、外面は回転ナデ調整である。内面はミガキ調整で黒色処理されている。

75は土師器杯の破片で、口縁部から体部まで1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。

カマド燃焼部からの出土である。

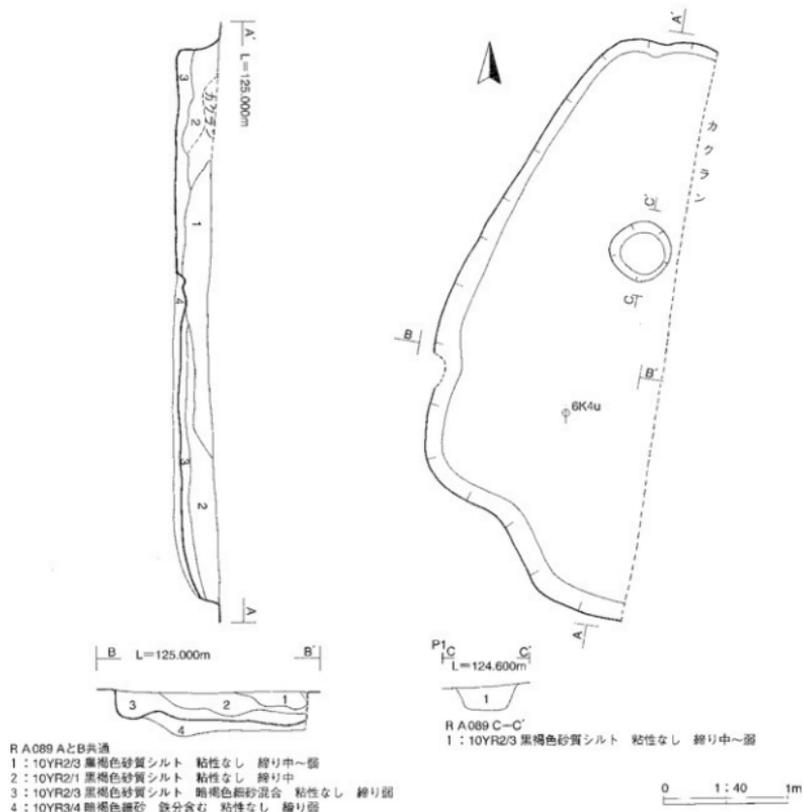
76はカマド燃焼部から出土した土師器坏の破片である。口縁部から体部まで1/4以下残存し、外面は回転ナデ調整である。内面はミガキ調整で黒色処理されている。底部の切り離しは回転糸切りで切り離した後調整している。

77は土師器甕の底部破片である。内外面ともヨコナデ調整で、胎土は粗い。カマド燃焼部からの出土である。

78は土師器坏破片で、口縁部から体部まで1/4以下残存する。口縁部と体部の境目に段を有し、外面は回転ナデ調整である。内面はミガキ調整で黒色処理されている。カマド燃焼部からの出土である。

79はカマド燃焼部から出土した土師器坏の破片で、口縁部から体部まで1/4残存する。外面は回転ナデ調整、内面はミガキ調整である。器厚は0.3cmと薄い。

80は土師器坏破片である。口縁部から体部まで1/4残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。器厚は0.3cmで薄い。カマド燃焼部からの出土である。



第26図 R A 089 竪穴住居跡

81は土師器坏破片である。口縁部から体部まで1/4残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。胎土に炭化物含む。カマド燃焼部からの出土である。

82は土師器坏破片である。口縁部から体部まで1/4残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。カマド燃焼部からの出土である。

83は土師器坏破片である。底部のみ残存する。底部に回転糸切痕があり切り離し後調整している。カマド燃焼部からの出土である。

84は土師器坏破片である。口縁部から体部まで1/4残存する。外面は回転ナデ調整、内面はミガキ調整である。底部に回転糸切痕があり切り離し後調整している。カマド燃焼部からの出土である。

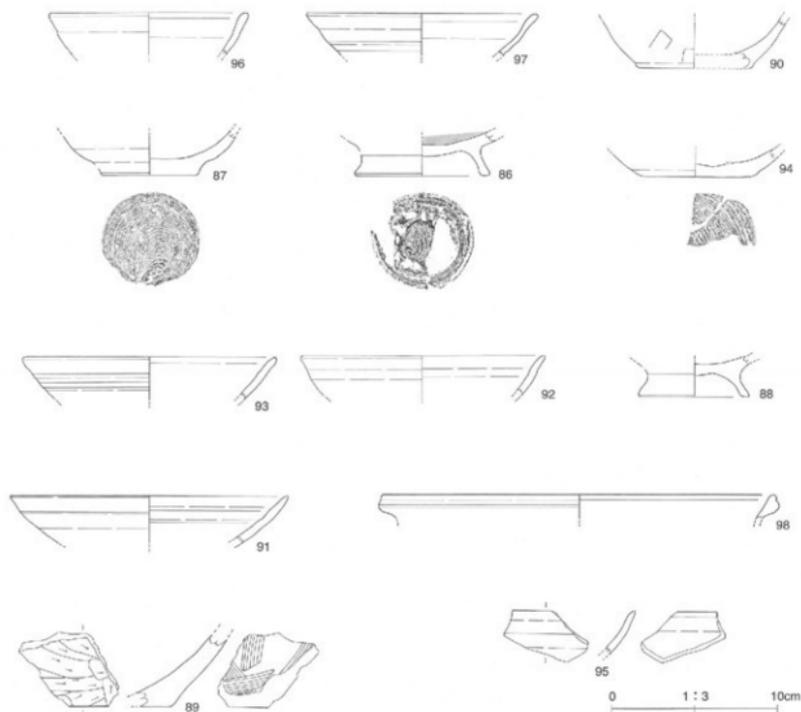
85は流れ込みの瀬戸美濃産の灰釉陶器碗の破片である。内外面の色調は灰白色、胎土は灰オリーブである。

所属時期 住居形態や遺物から9世紀末～10世紀前半の平安時代と考えられる。

#### R A 089竪穴住居跡

遺 構 (第26図、写真図版13)

A区6K4uに位置する。床面の標高は125.10mである。黄褐色砂質シルト面で検出されている。



第27図 R A 089竪穴住居跡出土遺物

埋土は暗褐色シルトで明瞭に確認できた。この住居跡に関して攪乱は及んでいなかったが住居の半分は調査区域外に延びている。検出された規模は南北に4.7m、東西に1.7m、深さ43cmを測る。埋土は黒褐色砂質シルトが主体で、粘性・締りともに中～弱である。床面から規模長径50×短径50cm、深さ20cmの円形のピットが1基検出されている。カマドは調査区域外に設置されていると思われる。

#### 出土遺物 (第27回、写真図版25)

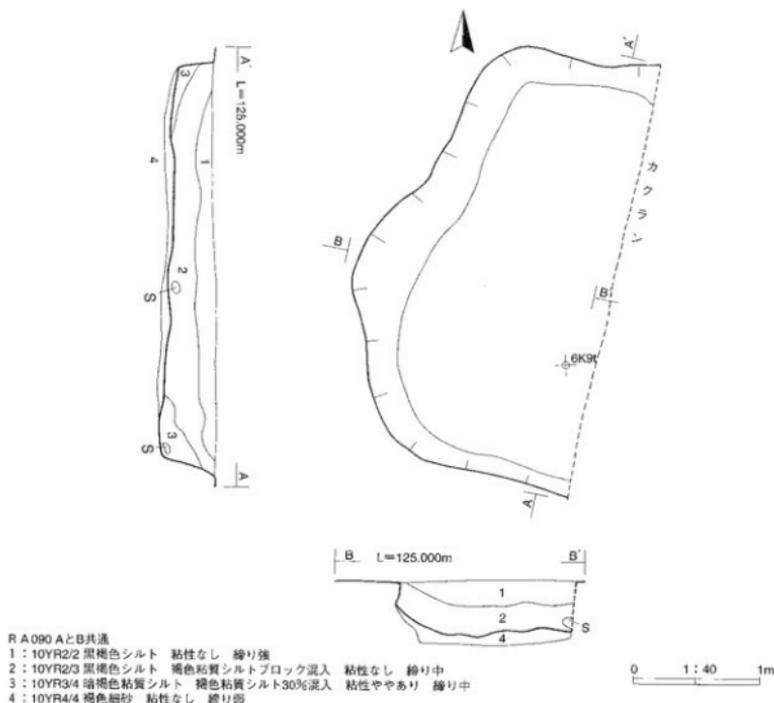
掲載遺物は埋土中から土師器杯の破片が11点、土師器甕の破片が2点である。

86はベルト埋土中から出土した土師器高台付杯の底部破片である。底部のみ残存し、内面はミガキ調整で黒色処理されている。底部には回転糸切の痕があり、切り離した後調整し高台部を接着したものである。

87は土師器杯の底部破片である。体部から底部まで1/4以下残存し、内外面ともに回転ナデ調整である。底部切り離しは回転糸切である。埋土中からの出土である

88は床直上から出土した土師器高台付杯の底部破片で、内面は回転ナデ調整を施している。底部は粘土を摘み出し撫でにより高台部を接着したものである。

89は土師器甕の破片で、体部から底部にかけて1/4以下残存する。外面はケズリ、内面はハケメ調整で、胎土・焼成ともに不良である。ベルト埋土中からの出土である。



第28回 RA090竪穴住居跡

90～97は土師器坏の破片で、体部のみ1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。90の底部は高台部が剥落した痕跡が見られる。94は回転糸切痕を有する。

98は土師器甕の口縁部破片である。口唇部は三角形の張出しを有し、内外面ともに回転ナデ調整である。埋土中からの出土である。

所属時期 住居形態や遺物から9世紀末～10世紀前半の平安時代と考えられる。

#### R A 090 竪穴住居跡

##### 遺 構 (第28図、写真図版14)

A区6K9tに位置する。床面の標高は124.94mである。黄褐色砂質シルト面での検出である。埋土は暗褐色シルトで明瞭に確認できた。この住居跡に関して攪乱は及んでいなかったが住居の半分は調査区域外に延びている。規模は南北に3.9m、東西に1.9m、深さ45cmを測る。埋土は黒褐色砂質シルトが主体で占められ、粘性・締りともに中～弱である。カマドは調査区域外に設置していたと思われる。

##### 出土遺物 (第29・30図、写真図版25)

掲載遺物は埋土中から土師器坏の破片が4点、土師器甕と須恵器の甕の破片が各1点、刀子が1点、計7点である。

99は床直上から出土した須恵器大甕破片である。体部のみ1/4以下残存し、外面はタタキ調整、内面は当具を使用している。色調は外面が黒色、内面・断面は黒に近い灰色である。胎土・焼成ともに良好である。

100は埋土中から出土した土師器坏破片である。口縁部から体部にかけて1/3残存し、内外面ともに回転ナデ調整を施している。器厚は0.3cmと薄い。

101は土師器坏破片で、体部から底部にかけて1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。底部切り離しは回転糸切である。胎土・焼成ともに良好で硬く締まる。

102・103は土師器坏破片である。体部から底部にかけて1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。102は床直上から103は埋土からの出土である。

104は床直上から出土した土師器小甕破片である。口縁部から体部にかけて1/4以下残存し、外面はハケメ調整、内面はハラナデ調整である。胎土・焼成ともに不良である。

105は床直上から出土した刀子で、刃部先端と茎部の両端を欠損している。錆付きが激しく表面が浮いたり陥没したりしている。残存値で長さ7.0cm、幅1.6cm、厚さ0.4cmを測る。

所属時期 住居形態や遺物から9世紀末～10世紀前半の平安時代と考えられる。

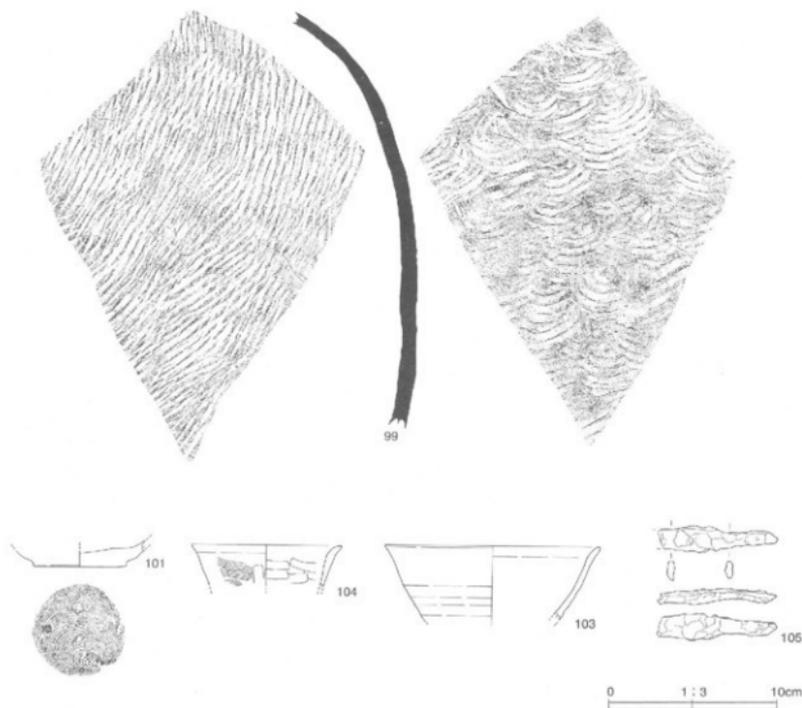
#### R E 016 住居状遺構

##### 遺 構 (第31図、写真図版15)

A区6K4pに位置する。床面の標高は125.16mである。黄褐色砂質シルト面での検出である。埋



第29図 R A 090 竪穴住居跡出土遺物 (1)



第30図 R A 090竪穴住居跡出土遺物(2)

土は暗褐色シルトで明瞭に確認できた。しかし、遺構の数箇所に攪乱が及んでいるため全体像は不明である。カマド部または焼土を検出できず住居状遺構とした。規模は南北に3.3m、東西に3.1m、深さ28cmを測る。埋土は黒褐色シルトが主体である。粘性無く締っている。

出土遺物(第31図、写真図版25)

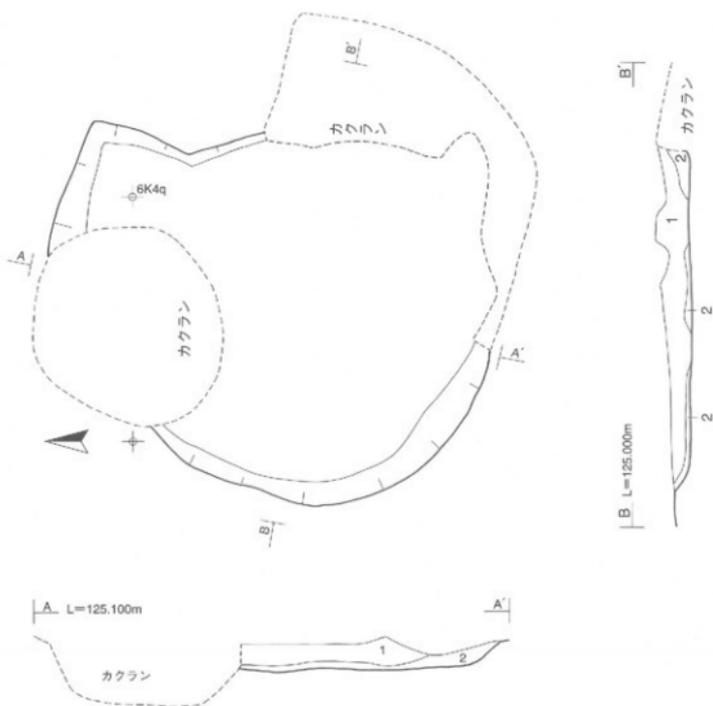
掲載遺物は埋土中から土師器環の破片が1点、土師器甕が2点、計3点である。

106は土師器環の破片で、口縁部から底部にかけて1/3残存する。外面は回転ナデ調整、内面はミガキ調整で黒色処理されている。底部は回転糸切り後にナデ調整している。ベルト埋土中からの出土である。

107はベルト埋土中から出土した土師器甕の破片である。底部のみ1/4以下残存する。外面はハケメ調整、内面はヘラナデ調整を施し、胎土・焼成ともに不良である。

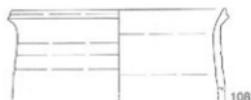
108は土師器甕の破片である。口縁部から底部にかけて1/4以下残存する。口唇部は三角形の張出しを有し、内外面ともに回転ナデ調整である。ベルト埋土中からの出土である。

所属時期 遺物から9世紀末～10世紀前半の平安時代と考えられる。



R E 016 AとB共通

- 1 : 10YR2/1 黒褐色シルト 2:2黒褐色シルトブロック混入 粘性なし 撈り強  
 2 : 10YR3/3 暗褐色砂質シルト 粘性なし 撈り中~弱

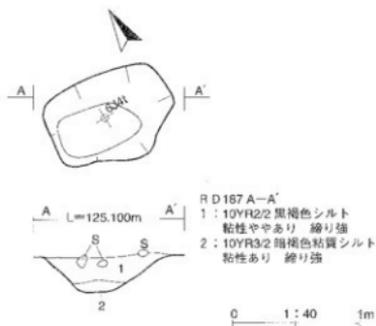


第31図 R E 016住居状遺構・出土遺物

## RD187土坑

遺構 (第32図、写真図版16)

A区6J4tに位置する。底面の標高は124.63mである。RD187土坑は旧河道黒ボク土層中を走るRG138溝跡を切って存在する。RG138の埋土を掘削しRD187の検出に至った。埋土は黒褐色粘土質シルトが主体で礫を含む。規模は開口部径105×72cm、底部径60×35cm、深さ28cmを測る。平面形は隅丸長方形である。底面は平坦で壁は緩やかに外傾する。遺物の出土は無く時期は不明である。



RD187 A-A'  
1: 10YR2/2 黒褐色シルト  
粘性ややあり 締り強  
2: 10YR3/2 暗褐色粘質シルト  
粘性あり 締り強

第32図 RD187土坑

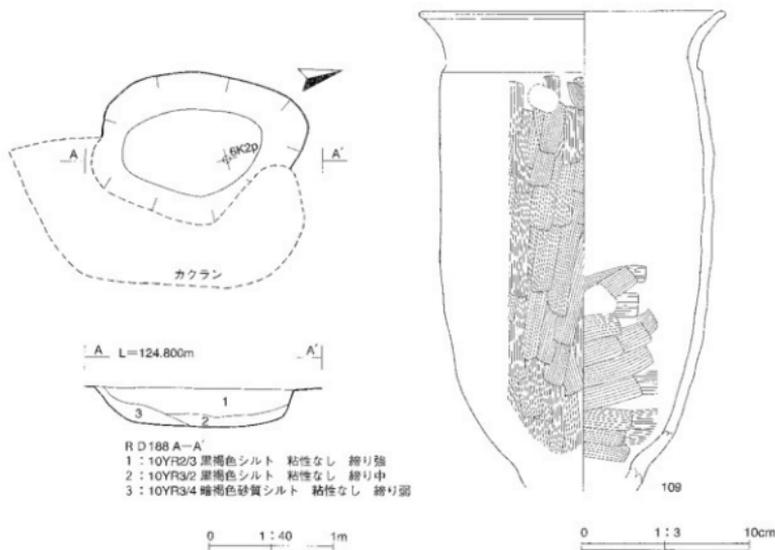
## RD188土坑

遺構 (第33図、写真図版16)

A区6K2pに位置する。底面の標高は125.20mである。黄褐色砂質シルト面での検出である。遺構の一部は攪乱されている。埋土は黒褐色シルトが主体で、粘性が無く締まっている。規模は開口部径170×115cm、底部径110×72cm、深さ30cmを測る。平面形はカクランを受け不明である。底面は平坦で北壁は直角気味に、南壁はゆるやかに外傾する。

出土遺物 (第33図、写真図版26)

出土遺物は土師器の甕が1点である。床直上から一箇体がまがまとして出土した。



RD188 A-A'  
1: 10YR2/3 黒褐色シルト 粘性なし 締り強  
2: 10YR3/2 黒褐色シルト 粘性なし 締り中  
3: 10YR3/4 黄褐色砂質シルト 粘性なし 締り弱

第33図 RD188土坑・出土遺物

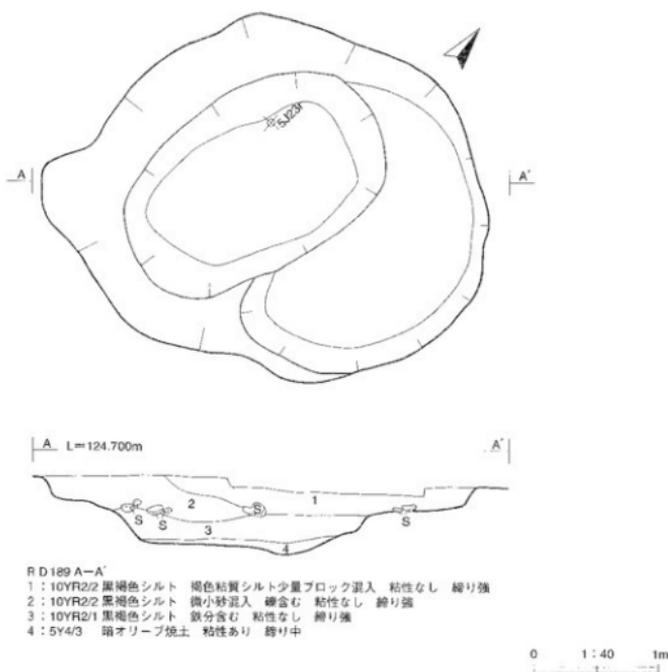
109は土師器長胴甕である。口縁部から底部にかけて良好に残存し、口縁部と体部の境目に明瞭な段を有する。内外面ともにハケメ調整で、押圧痕が見られる。外面全体にススが付着している。

所屬時期 遺物から8世紀前半の奈良時代と考えられる。

#### R D 189土坑

遺 構 (第34図、写真図版16)

A区5 J 23 rに位置する。底面の標高は125.52mである。R D 189の半分は本宮熊鷹B第25次調査区に延びている。黄褐色粘質シルト面での検出である。埋土は黒褐色シルトが主体で、粘性無く締っている。規模は開口部径350×275cm、底部径155×105cm、深さ55cmを測る。平面は不定形である。底面は凹凸があり、東西の縁は段々に広がって立ち上がる。遺構の埋土中または底面直上から50個以上の礫が見つかった。人為的に投げ込まれたものと思われる。出土遺物はなく、埋土には粘土質ブロック、砂質ブロック、鉄分や礫が混入することから、近世の土坑であると考えられる。



第34図 R D 189土坑

## R D 190土坑

## 遺 構 (第35図、写真図版16)

A区5 K 25 kに位置する。底面の標高は125.37mである。R D 190はR A 086のカマド右袖付近に位置し、重複し切っている。黄褐色粘質シルト面で検出されている。埋土は黒褐色シルトが主体で、粘性無く締っている。開口部両端は攪乱により削られているが、現存する規模は開口部径82×55cm、底部径55×45cm、深さ25cmを測る。平面は楕円形である。底面はほぼ平坦であり東西の壁は外傾して立ち上がる。

遺物は埋土中から土師器甕の破片が2点、杯の破片が7点、計9点出土しているが、R A 086出土遺物と同時期であることからR A 086に共存するものであると考えている。また、底面の北に寄った床直上から近世の古銭が6枚出土した。遺構と遺物(古銭)の出土状況から近世の墓塚であるとされている。

## 出土遺物 (第36図、写真図版26・27)

110は土師器甕破片で、口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。口唇部は三角形の張り出しがあり、外面はケズリ調整、内面は回転ナデ調整である。胎土は粗く焼成は良好である。埋土中からの出土である。

111は土師器甕破片である。口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。外面はケズリ調整、内面はハケメ・ケズリ調整である。埋土中からの出土である。

112は土師器杯破片で、体部から底部にかけて1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。色調は褐色である。埋土中からの出土である。

113は土師器杯破片である。口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。底部は切り離し後ナデ調整である。埋土中からの出土である。

114は土師器杯破片で、口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。外面は回転ナデである。内面はミガキ調整で黒色処理されている。回転糸切痕を有する。埋土中からの出土である。

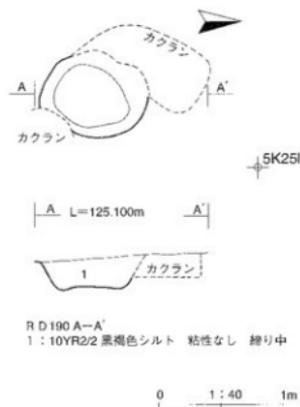
115は土師器杯破片である。体部から底部にかけて1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。底部は切り離し後ナデ調整である。埋土中からの出土である。

116は土師器甕破片で、口縁部のみ1/4以下残存する。内外面ともにヨコナデ調整である。埋土中からの出土である。

117は土師器杯破片である。口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。外面は回転ナデである。埋土中からの出土である。

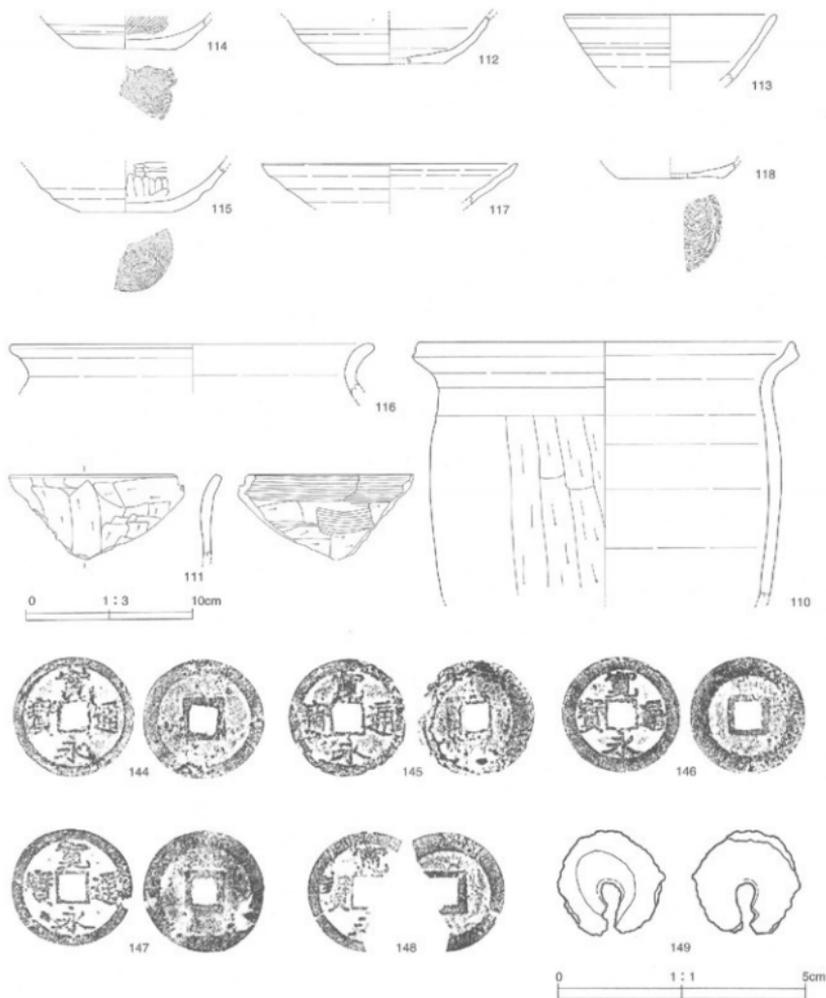
118は土師器甕底部破片である。内外面ともに回転ナデ調整で、底部は回転糸切である。埋土中からの出土である。

144~148の5点は寛永通寶である。いずれも直径2.4cm、金属の種類は銅、鑄造年代は1636年以降。銅鑄の緑青が付着している。同時期の古銭であり古寛永に属する。底面からの出土である。



第35図 R D 190土坑

149は煙管の火皿部分をつぶしたものと思われる。扁平して直径は約2.0cmである。キセルの火皿の部分をつぶし銭貨と見なす、いわゆる「雁首銭」とする向きもあり否定はできない。同地点から僅かにサシも出ている。埋土は人為的に埋め戻されていることに加え、銭貨が5枚といわゆる雁首銭1枚、計6枚が床直上から出土している。これらの客観的状況から「六道銭」を意味するものであると判断している（註2）。



第36図 R D 190土坑出土遺物

## R G 110溝跡

遺構(第37図、写真図版18)

B区6 M20 fに位置する。底面の標高は124.81mである。R G 110は第20次調査(平成16年度)において検出している。そこから延びる溝である。南西から北東に向き長さ1.8m、幅は60～70cm、深さ25cmを測る。埋土上層から十和田aテフラを検出したことから、平安時代の溝跡であると考えている。遺物は出土していない。

## R G 138溝跡

遺構(第37・38図、写真図版17)

A区5 J 24 l～6 K 15 qに位置する。底面の標高は126.53～126.68mで、平均すると126.61mである。R G 138は北西から南東に緩やかに下降し延びる。規模は長さ76m、幅は110～200cm、深さ35～50cm、高低差は19cmである。黒ボク土層上で検出されている。主な埋土層序は上層：十和田aテフラ・暗オリーブ褐色シルト、中層：黒色粘質シルト・暗褐色粘質シルト、下層：暗オリーブ褐色粘質シルトが主体である。粘質で締りは中から弱である。溝の底面は凹凸で埋土ブロックを含む工具痕が見られ、壁はやや直角気味に立ちあがり緩やかに外傾し開く。

出土遺物(第39図、写真図版26)

掲載遺物は土師器製の破片が3点、環が7点、計10点である。

119は土師器製の破片で、口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。外面はハケメ調整、内面はヘラナデ調整である。胎土・焼成ともに良好である。埋土中からの出土である。

120は土師器製の破片である。口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。外面は回転ナデ調整、内面はミガキ調整で黒色処理をしている。ベルト埋土中からの出土である。

121・122は土師器製の破片で、体部から底部にかけて1/4以下残存する。外面はヘラナデまたはハケメ調整、内面はハケメまたはケズリ調整である。胎土・焼成ともに不良である。ベルト埋土中からの出土である。

123は土師器製の破片である。体部から底部にかけて1/4以下残存する。外面はハケメ調整である。胎土は良好だが焼成は不良である。埋土中からの出土である。

124～126は土師器製の破片で、口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。124は内外面ともにヨコナデ調整、125は内外面ともに回転ナデ調整である。126は外面がケズリ調整、内面はミガキ調整である。埋土中からの出土である。

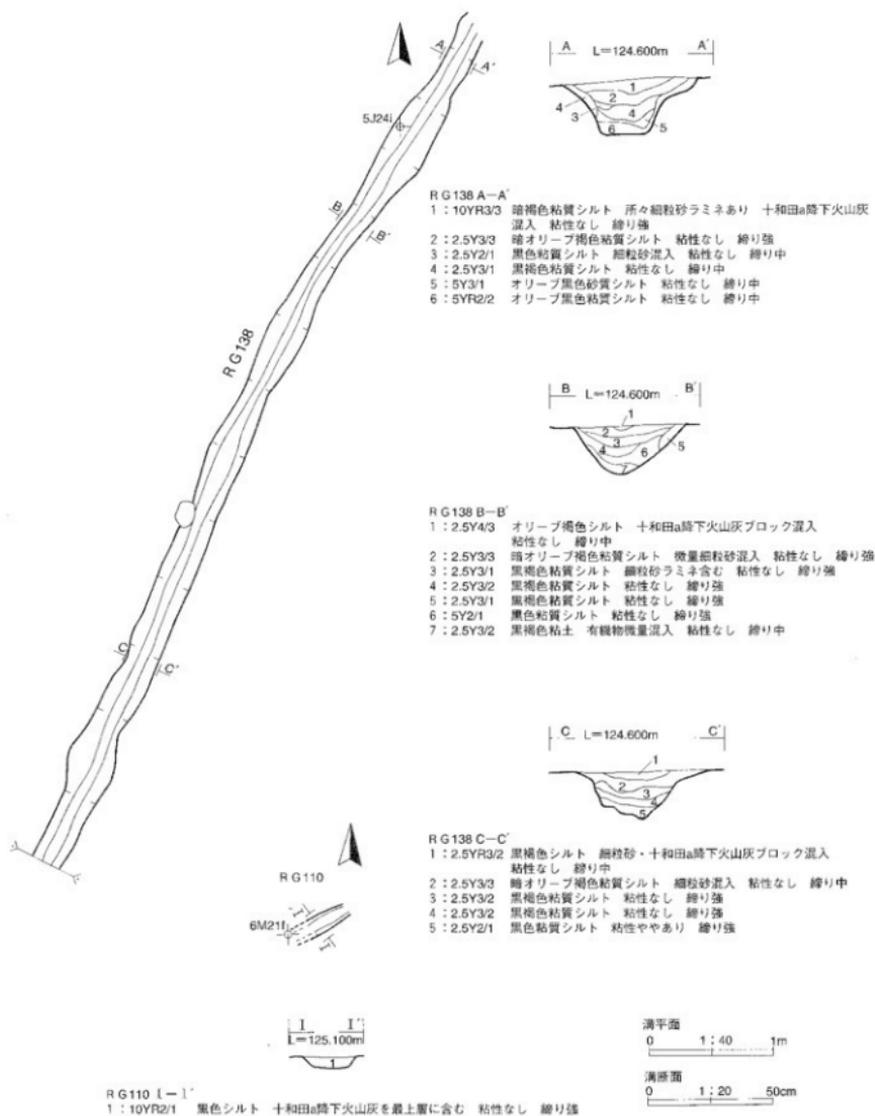
127は土師器製の破片である。体部から底部にかけて1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。切り離した後、ナデ調整をしている。埋土中からの出土である。

128は土師器製の破片で、体部から底部にかけて1/4以下残存する。内外面ともに回転ナデ調整である。切り離した後、ナデ調整をしている。埋土中からの出土である。

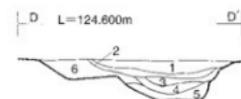
## R G 139溝跡

遺構(第38図、写真図版17・18)

A区6 K 8 d～6 K 13 qに位置する。底面の標高は124.35～124.39mで、平均すると126.37mである。R G 139はR G 138に切られてスタートし北西から南東に緩やかに下降し延びる。規模は長さ35m、幅は50～110cm、深さ15～24cm、高低差は6cmである。黒ボク土層上から検出されている。埋土上層には十和田aテフラを含む。埋土層序は上層が黒色粘質シルト、下層が黒褐色粘質シルトで占められている。粘質で締りは中から弱である。溝の底面は平坦で壁は緩やかに外傾し立ち上がる。



第37図 RG 110・138溝跡



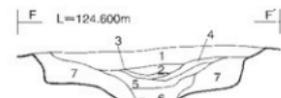
R G 138 D-D'

- 1: 2.5Y3/2 黒褐色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 2: 7.5YR4/3 褐色シルト 細粒砂混入 粘性なし 締り強
- 3: 5Y2/1 黒色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 4: 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 5: 2.5Y2/1 黒色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 6: 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性ややあり 締り強



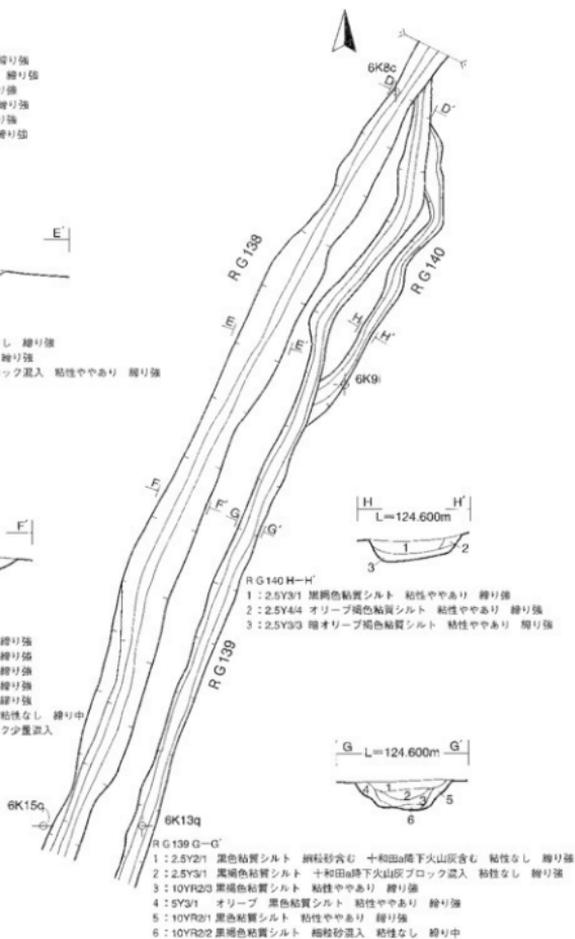
R G 138 E-E'

- 1: 10YR2/1 黒色シルト 粘性なし 締り強
- 2: 10YR3/4 暗褐色シルト 細粒砂混入 粘性なし 締り強
- 3: 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 4: 10YR1.7/1 黒色粘質シルト 黄褐色シルトブロック混入 粘性ややあり 締り強



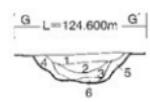
R G 138 F-F'

- 1: 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 2: 10YR3/4 暗褐色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 3: 10YR3/1 黒褐色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 4: 10YR3/3 暗褐色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 5: 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 6: 10YR1.7/1 黒色粘質シルト 黄色細粒砂混入 粘性なし 締り中
- 7: 10YR1.7/1 黒色粘質シルト 黄色シルトブロック少量混入 粘性なし 締り中



R G 140 H-H'

- 1: 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 2: 2.5Y4/4 オリーブ褐色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 3: 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色粘質シルト 粘性ややあり 締り強



R G 139 G-G'

- 1: 2.5Y2/1 黒色粘質シルト 細粒砂含む 十和田a階下火山灰含む 粘性なし 締り強
- 2: 2.5Y3/1 黒褐色粘質シルト 十和田a階下火山灰ブロック混入 粘性なし 締り強
- 3: 10YR2/3 黒褐色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 4: 5Y3/1 オリーブ 黒色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 5: 10YR2/1 黒色粘質シルト 粘性ややあり 締り強
- 6: 10YR2/2 黒褐色粘質シルト 細粒砂混入 粘性なし 締り中

溝平面  
0 1: 40 1m

溝断面  
0 1: 20 50cm

第38図 R G 138・139・140溝跡

#### 出土遺物（第39図、写真図版26）

掲載遺物は土師器甕の破片が4点である。

129は土師器甕の破片で、体部のみ1/4以下残存する。外面はハケメ調整、内面はハケメ・ヘラナデ調整である。埋土中からの出土である。

130は埋土中から出土した土師器甕の破片である。底部のみ1/4以下残存する。内外面ともにハケメ調整を施している。胎土・焼成ともに不良である。

131は土師器小甕の破片である。口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。内外面ともにヨコナデ調整である。埋土中からの出土である。

132は埋土中から出土した土師器小甕の破片である。口縁部から体部にかけて1/4以下残存する。内外面ともにヨコナデ調整である。

#### RG140溝跡

##### 遺構（第38図、写真図版18）

A区6K7c～6K9iに位置する。底面の標高は126.20mで、RG140はRG138に切られてスタートし北西から南東に緩やかに下降しRG139に切れられ合流する。規模は長さ14m、幅は50～80cm、深さ15～18cm、高低差は5cmである。黒ボク土層の黒色シルトに対して埋土は褐色シルトである。埋土上層には十和田aテフラを含む。溝の底面は平坦で壁は緩やかに外傾し立ち上がる。出土遺物はなく時期は不明である。

#### 4 遺構外出土遺物

掲載遺物（第40図、写真図版27）は土師器杯の破片が1点、甕が8点、甕が1点、計10点である。

133は土師器甕破片である。口縁部から体部にかけて1/3残存し、内外面ともにヘラナデ調整である。胎土は粗く、内面にコゲが付着する。

134は土師器杯破片で、体部から底部にかけて1/3残存する。内外面ともにミガキ調整で黒色処理されている。底径7.4cmの大型の杯である。

135は土師器甕破片である。口縁部から体部にかけて1/4残存する。内外面ともにハケメ調整で、口縁部と体部の境目に明瞭な段を有する。外面にスガが付着する。

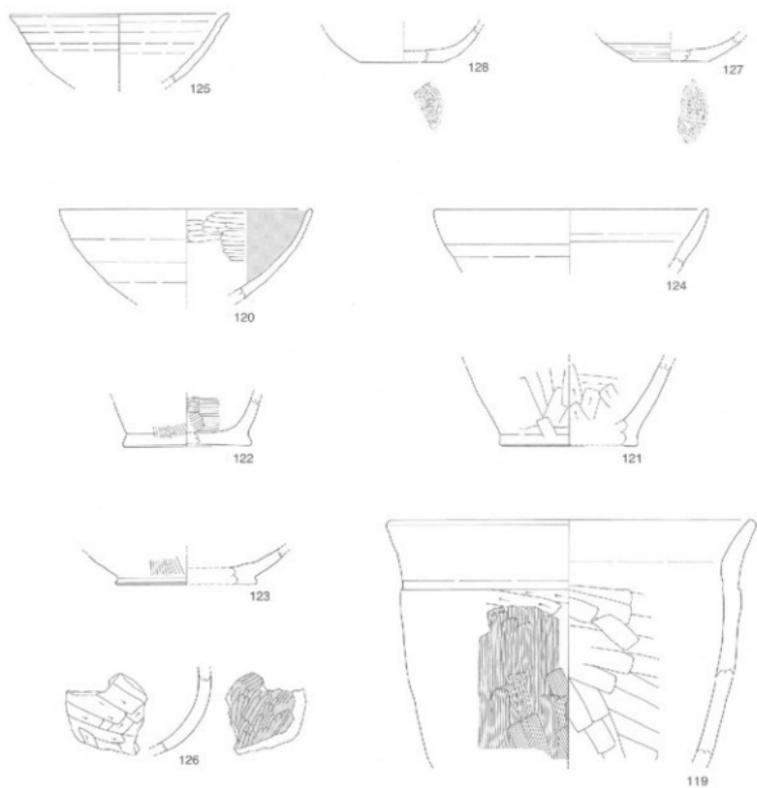
136は土師器甕破片である。体部から底部にかけて1/4以下残存し、内外面ともにハケメ調整を施している。底部に6個の穿孔を有しており、この内2個は完形である。穿孔径は5～7mmである。色調は橙色で、胎土は粗く焼成は良好である。

137は土師器甕破片で、口縁部のみ1/4以下残存する。口縁部と体部の境目に明瞭な段を有し、内外面ともにヘラナデ調整である。

138は土師器甕破片で、体部のみ1/4以下残存する。内外面ともにハケメ調整である。胎土・焼成ともに不良で、外面にスガが内面にコゲが付着する。

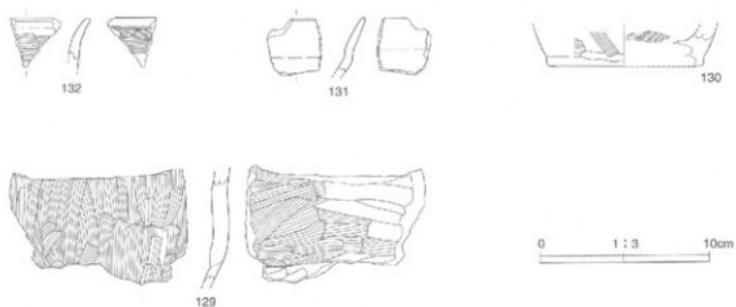
139・141・142は土師器甕破片である。体部のみ1/4以下残存する。外面に赤色顔料が内面に化粧土が施されており、色調は外面が浅黄橙色、内面が褐灰色である。胎土は良好で焼成は不良である。胎土や色調および内外面における顔料の付着状況からこれらは同一個体と思われる。

140は須臾器甕の体部破片である。外面はタタキ調整、内面はナデ調整である。胎土・焼成ともに良好である。

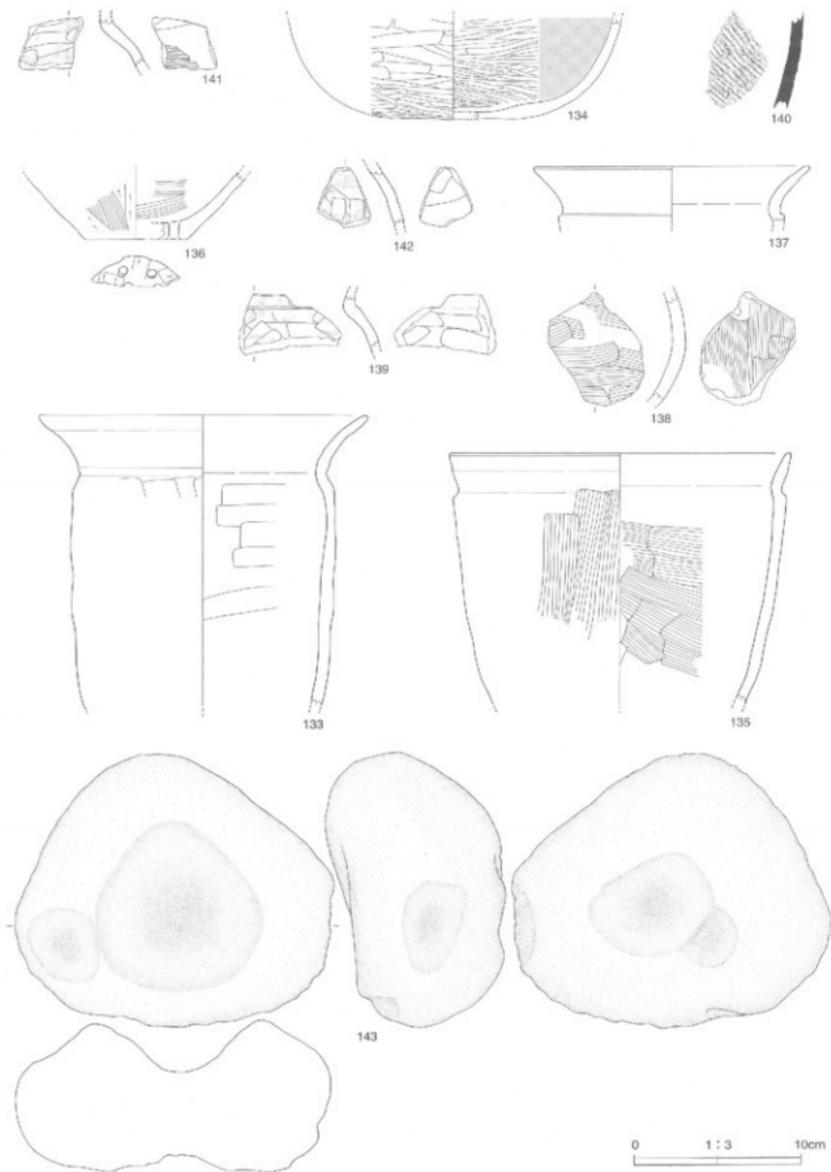


R G 138

R G 139



第39図 R G 138・139溝跡出土遺物



第40図 遺構外出土遺物

143は凹石で、使用痕が5ヶ所に見られる。長さ16.7cm、幅19.0cm、厚さ10.8cm、重量2310gを測る。石質は奥羽山脈産の安山岩である。

第2表 遺物観察表(1)

## 鉄製品

掲載番号	図版	写回	出土遺構	種類	残存部位	長さ(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
24	15	21	RA085	鋤先	刃部	10.5	0.5	32.9	V字抉れ
25	15	21	RA085	鋤先	刃部	6.5	0.5	25.4	V字抉れ
26	15	21	RA085	鋤先	刃部	7.0	0.3	29.6	V字抉れ
67	22	24	RA087	角釘	ほぼ完形	5.0	0.4	6.7	同層欠損
68	22	24	RA087	角釘	完形	4.2	0.3	1.1	
69	22	24	RA087	不明	主体部	3.0	0.2	3.9	穿孔有
105	28	25	RA090	刀子	刃部～基部	7.0	0.3	7.8	先端欠損

## 銭貨

掲載番号	図版	写回	出土遺構	種類	直径(cm)	厚さ(g)	金属の種類	年代
144	34	27	RD190	寛永通寶	2.4	2.5	銅	1636年以降
145	34	27	RD190	寛永通寶	2.4	2.5	銅	1636年以降
146	34	27	RD190	寛永通寶	2.4	2.7	銅	1636年以降
147	34	27	RD190	寛永通寶	2.4	2.0	銅	1636年以降
148	34	27	RD190	寛永通寶	2.4	0.7	銅	1636年以降
149	34	27	RD190	磨銭?	1.9	1.1	銅	不明

## 土製品

掲載番号	図版	写回	出土遺構	種類	最大径(cm)	最小径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備考
23	13	21	RA084	紡錘	4.2	3.2	3.0	79.0	8mm穿孔有
66	22	24	RA087	土 鉢	1.8	0.7	2.5	4.4	3mm穿孔有

## 石 器

掲載番号	図版	写回	出土遺構	種類	石 質	長さ(cm)	幅(cm)	重量(g)	産 地
143	40	27	遺構外	凹石	安山岩	16.7	19.0	2310	奥羽山脈

第3表 遺物調査表(2)

図版 番号	写尺	出土層位	種別	器種	取付寸	法			測 量			色 澤			出土	形状	備 考	
						口径	底径	器高	器幅	内面	外面	内面	外面	断面				
1	10	19	RA084	土師器	埴輪	95	24.4	10.0	31.2	0.7	ミガキ	同軸ナデ	7.5YR7/8 黄褐色 に赤い斑	10YR6/2 灰青緑 に赤い斑	○	木蓋状・皿蓋		
2	10	19	RA081	土師器	埴輪	100	16.8	9.1	25.4	0.7	ハケム	同軸ナデ	7.5YR7/4 黄褐色 に赤い斑	10YR4/0 黒灰 に赤い斑	○	スス・皿底 木蓋状・スス		
3	11	19	RA084	土師器	埴輪	40	—	9.2	(20.1)	0.6	ヘラナデ	ヘラナデ	7.5YR7/6 黄褐色 に赤い斑	5YR6/5 黄褐色 に赤い斑	△	○	皿底	
4	11	19	RA084	土師器	埴輪	40	—	(4.9)	(3.2)	0.8	ハケム	ヘラナデ	10YR7/2 黄褐色 に赤い斑	10YR7/2 黄褐色 に赤い斑	△	○	皿底	
5	11	19	RA084	土師器	埴輪	90	21.4	9.5	29.2	0.6	ハケム	ヘラナデ	10YR7/4 黄褐色 に赤い斑	10YR6/2 黄褐色 に赤い斑	△	○	スス・コブ・皿底	
6	11	20	RA084	土師器	埴輪	70	18.9	—	(19.0)	0.9	ミガキ	ヘラナデ	10YR6/6 黄褐色 に赤い斑	10YR6/6 黄褐色 に赤い斑	○	○	皿底	
7	12	20	RA084	土師器	埴輪	50	20.9	8.0	30.3	0.8	ケズリ	ヘラナデ	7.5YR6/6 黄褐色 に赤い斑	7.5YR6/6 黄褐色 に赤い斑	○	○	スス・皿底	
8	12	20	RA084	土師器	小壺	100	45.5	7.8	17.5	0.8	ハケム	ハケム	7.5YR4/6 黄褐色 に赤い斑	7.5YR5/4 黄褐色 に赤い斑	○	○	皿底	
9	12	20	RA081	土師器	小壺	85	32.2	6.2	12.9	0.5	ハケム	ハケム	10YR6/4 黄褐色 に赤い斑	10YR4/1 黒灰 に赤い斑	×	○	調整板?	
10	12	20	RA084	土師器	壺	30	—	8.8	(6.5)	0.8	ハケム	ハケム	7.5YR4/6 黄褐色 に赤い斑	7.5YR5/6 黄褐色 に赤い斑	×	△	スス・支脚	
11	12	20	RA081	土師器	壺	40	(24.2)	—	(17.0)	0.7	ハケム	ヘラナデ	7.5YR6/6 黄褐色 に赤い斑	10YR6/6 黄褐色 に赤い斑	○	○	皿底	
12	13	20	RA084	土師器	埴輪	40	(19.6)	—	(12.3)	0.9	ハケム	ハケム	7.5YR4/6 黄褐色 に赤い斑	7.5YR3/6 黄褐色 に赤い斑	○	○	スス・コブ	
13	12	20	RA084	土師器	埴輪	35	(17.2)	—	(22.4)	1.0	ヘラナデ	ヘラナデ	7.5YR5/4 黄褐色 に赤い斑	7.5YR6/6 黄褐色 に赤い斑	○	○	スス・コブ	
14	13	20	RA081	土師器	埴輪	30	(22.2)	—	(10.2)	0.8	ハケム	ハケム	7.5YR5/6 黄褐色 に赤い斑	10YR4/6 黄褐色 に赤い斑	○	○	皿底	
15	13	20	RA084	土師器	埴輪	39	(23.4)	—	(8.8)	0.9	ハケム	ハケム	10YR6/6 黄褐色 に赤い斑	10YR5/6 黄褐色 に赤い斑	○	○	皿底	
16	12	21	RA084	土師器	埴輪	95	16.8	—	5.7	0.5	ミガキ	内圧・ミガキ	7.5YR6/6 黄褐色 に赤い斑	7.5YR6/6 黄褐色 に赤い斑	○	○	大蓋・皿底	
17	12	21	RA084	土師器	埴輪	59	16.8	—	4.9	0.6	ミガキ	内面・ミガキ	7.5YR6/6 黄褐色 に赤い斑	7.5YR6/6 黄褐色 に赤い斑	○	○	大蓋・皿底	
18	12	21	RA084	土師器	埴輪	99	15.8	—	1.8	0.6	ミガキ	内面・ミガキ	10YR4/1 黒灰 に赤い斑	10YR4/1 黒灰 に赤い斑	○	○	皿底	
19	12	21	RA084	土師器	埴輪	45	(33.7)	—	(5.0)	0.1	ヘラナデ	内面・ミガキ	10YR1/1 黒灰 に赤い斑	10YR1/1 黒灰 に赤い斑	○	○	皿底	
20	13	21	RA084	土師器	壺	30	—	—	—	—	0.3	ケズリ	ケズリ	10YR7/3 黄褐色 に赤い斑	10YR7/3 黄褐色 に赤い斑	△	△	皿底
21	13	21	RA084	土師器	壺?	30	—	—	—	—	0.5	ケズリ	ケズリ	10YR5/3 黄褐色 に赤い斑	10YR5/3 黄褐色 に赤い斑	△	○	スス
22	12	21	RA084	土師器	壺?	30	—	—	(2.4)	1.0	ハケム	ヘラナデ	7.5YR3/6 黄褐色 に赤い斑	10YR5/4 黄褐色 に赤い斑	×	△	木蓋状・皿底	
27	15	21	RA085	土師器	壺	95	(17.9)	—	(19.3)	0.7	ヘラナデ	ハケム	7.5YR6/4 黄褐色 に赤い斑	7.5YR6/4 黄褐色 に赤い斑	○	○	スス・皿底	
28	15	21	RA085	土師器	埴輪	30	—	—	(4.7)	0.7	ヘラナデ	内面・ミガキ	7.5YR6/6 黄褐色 に赤い斑	10YR4/1 黒灰 に赤い斑	○	○	皿底	

第4表 遺物観察表(3)

標記番号	回層	方位	出土遺構	種類	形状	規格寸	口径	底径	高さ	容量	外周	内周	外周	内周	色澤	断面	胎土	装成	備考
29	15	21	RA085	土師器	杯	30.1	—	—	—	0.5	ミガキ	10YR7/1	10YR7/1	10YR7/1	褐色	△	—	風塵	
30	15	21	RA085	土師器	蓋?	30.1	—	(0.7)	—	—	ヘラナデ	10YR5/2	10YR5/6	7.5YR5/6	褐色	△	—		
31	15	21	RA085	土師器	蓋?	30.1	—	—	—	0.4	ナデ	10YR5/3	10YR5/4	10YR5/4	褐色	△	—		
32	15	21	RA085	土師器	蓋?	30.1	—	—	(0.9)	—	ナデ	10YR5/3	10YR5/3	10YR5/3	褐色	△	—		
33	15	21	RA085	土師器	蓋?	30.1	—	—	(0.9)	—	ナデ	10YR5/4	10YR5/4	10YR5/4	褐色	△	—		
34	17	21	RA085	土師器	蓋?	30.1	(0.8)	—	(10.2)	0.7	ヨコナデ	10YR7/4	10YR7/4	10YR7/4	褐色	△	—		
35	17	21	RA085	土師器	小蓋	40	—	6.6	(5.5)	0.6	圓底ナデ ヘラナデ	10YR7/4	10YR7/4	10YR7/4	褐色	△	—		
36	17	21	RA085	土師器	杯	30.1	—	4.8	—	0.4	—	5YR6/6	5YR6/6	5YR6/6	褐色	△	—		
37	17	21	RA086	土師器	蓋	30.1	(21.7)	—	(4.5)	0.6	圓底ナデ	7.5YR7/4	7.5YR7/4	7.5YR7/4	褐色	△	—		
38	17	21	RA086	土師器	小蓋	30.1	(12.6)	—	(—)	0.1	圓底ナデ	7.5YR6/4	7.5YR6/4	7.5YR6/4	褐色	△	—		
39	17	21	RA086	土師器	杯	30.1	(33.0)	—	(3.8)	0.4	圓底ナデ	7.5YR7/3	7.5YR7/3	7.5YR7/3	褐色	△	—		
40	17	21	RA086	土師器	杯	30.1	—	(6.5)	(2.2)	0.4	圓底ナデ	10YR5/4	10YR7/1	10YR7/1	褐色	△	—		
41	17	21	RA086	土師器	杯	30.1	—	(6.6)	(1.7)	0.4	圓底ナデ	5YR4/6	5YR4/6	5YR4/6	赤褐色	△	—		
42	17	21	RA086	土師器	杯	30.1	(12.6)	—	(2.4)	0.4	圓底ナデ	7.5YR7/6	7.5YR7/6	7.5YR7/6	褐色	△	—		
43	21	22	RA087	土師器	埴輪	95	17.3	9.2	19.5	(0.7)	ハケメ	2.5YR5/4	2.5YR3/4	2.5YR5/4	褐色	△	—		
44	20	22	RA087	土師器	蓋	90	21.7	10.2	28.3	0.5	ハケメ	10YR6/6	10YR6/6	10YR6/6	褐色	△	—		
45	21	22	RA087	土師器	蓋	85	18.0	8.2	25.4	0.6	ケズリ	2.5YR5/4	2.5YR5/4	2.5YR5/4	褐色	△	—		
46	20	22	RA087	土師器	蓋	85	(17.4)	8.3	26.0	1.1	ケズリ	10YR7/6	10YR7/6	10YR7/6	褐色	△	—		
47	21	22	RA087	土師器	蓋	90	(17.8)	8.6	26.2	0.7	ハケメ	10YR7/6	10YR7/6	10YR7/6	褐色	△	—		
48	20	23	RA087	土師器	蓋	60	19.4	8.2	25.3	0.6	ヘラナデ	5YR5/6	5YR5/6	5YR5/6	褐色	△	—		
49	21	23	RA087	土師器	蓋	60	15.9	—	22.8	0.6	ケズリ	7.5YR5/6	10YR7/4	10YR7/4	褐色	△	—		
50	20	23	RA087	土師器	蓋	50	—	7.8	(22.8)	0.6	ハケメ	10YR7/6	10YR6/3	10YR7/6	褐色	△	—		
51	21	23	RA087	土師器	鉢	90	(19.1)	—	(14.0)	0.1	ヘラナデ	2.5YR7/4	10YR8/4	10YR5/1	褐色	△	—		
52	22	23	RA087	土師器	小蓋	50	—	8.0	(11.4)	0.8	ハケメ	2.5YR4/6	7.5YR3/6	7.5YR3/6	褐色	△	—		

第5表 建物観察表(4)

採取番号	図版	写真	出土遺構	種別	器種	形状半	法		調整		色		出土状況	備考		
							口径	底径	口径	底径	外壁	内面			外周	内周
53	22	23	RA087	土師器	甕	30.1	—	(8.5)	(9.9)	1.2	ハケム	ヘラナデ	10YR4/3 土色、裏面に ハケム	10YR4/1 黒	△ ×	スス・黒炭
54	22	23	RA087	土師器	小甕	40	—	9.5	(12.0)	0.6	ケズリ	ハケム	7.5YR4/3 明褐色 ハケム	10YR5/3 明褐色 ハケム	△	木炭・黒炭
55	22	23	RA087	土師器	小甕	95	11.3	6.0	9.1	0.5	ヨコナデ	ヨコナデ	7.5YR5/6 明褐色 ハケム	10YR3/2 明褐色 ハケム	○	スス・コゲ・黒炭
56	22	23	RA087	土師器	坏	80	16.9	5.7	0.6	ミガキ	内面、ミガキ	10YR6/6 明褐色 ハケム	10YR4/4 明褐色 ハケム	○	黒炭	
57	22	23	RA087	土師器	坏	90	12.6	—	4.4	0.6	ミガキ	内面、ミガキ	10YR6/6 明褐色 ハケム	2.5Y/1 黒	○	スス
58	22	23	RA087	土師器	坏	40	(15.2)	—	5.1	0.5	ミガキ	内面、ミガキ	10YR4/1 明褐色 ハケム	10YR4/1 明褐色 ハケム	○	黒炭
59	22	24	RA087	土師器	甕	30.1	(17.8)	—	(16.5)	0.6	ハケム	ヘラナデ	10YR6/4 明褐色 ハケム	7.5YR5/6 明褐色 ハケム	△	
60	21	24	RA087	土師器	甕	30.1	(15.3)	—	(13.0)	0.7	ハケム	ヘラナデ	10YR6/6 明褐色 ハケム	7.5YR5/6 明褐色 ハケム	△	
61	22	24	RA087	土師器	甕	30.1	—	7.5	—	0.6	ハケム	ヘラナデ	7.5YR6/6 明褐色 ハケム	7.5YR6/6 明褐色 ハケム	△	
62	22	24	RA087	土師器	甕	30.1	19.8	—	9.8	0.6	ハケム	ヘラナデ	7.5YR6/6 明褐色 ハケム	7.5YR6/6 明褐色 ハケム	○	カマド支脚
63	22	24	RA087	土師器	甕?	30.1	—	(8.6)	—	—	ヘラナデ	ケズリ	10YR5/4 灰青褐色 ハケム	10YR6/2 明褐色 ハケム	○	
64	22	24	RA087	土師器	小甕?	30.1	—	7.1	—	0.6	ケズリ	ヘラナデ	7.5YR2/1 黒	7.5YR4/2 灰青褐色 ハケム	△ ×	
65	22	24	RA087	土師器	坏	30.1	(9.6)	—	(3.7)	0.6	内面、ミガキ	内面、ミガキ	10YR5/3 明褐色 ハケム	10YR4/1 明褐色 ハケム	○	
70	24	24	RA088	土師器	坏	45	(18.0)	—	(4.2)	0.4	内面、ミガキ	内面、ミガキ	5YR6/6 赤	5YR6/6 赤	○	
71	21	24	RA088	土師器	甕	30.1	(22.4)	—	(10.3)	0.3	内面、ミガキ	内面、ミガキ	5YR4/8 赤褐色 ハケム	5YR4/5 赤褐色 ハケム	△	スス
72	24	24	RA088	土師器	甕	30.1	(21.0)	—	(9.6)	0.7	ヨコナデ	ヨコナデ	5YR5/8 明褐色 ハケム	5YR5/8 明褐色 ハケム	△	
73	24	24	RA088	土師器	坏	35	(15.2)	—	(3.4)	0.4	内面、ミガキ	内面、ミガキ	7.5YR6/6 明褐色 ハケム	7.5YR6/6 明褐色 ハケム	○	
74	24	24	RA088	土師器	坏	30.1	(14.2)	—	(3.7)	0.4	内面、ミガキ	内面、ミガキ	7.5YR6/6 明褐色 ハケム	7.5YR6/6 明褐色 ハケム	○	
75	21	24	RA088	土師器	坏	30.1	(14.0)	—	(4.2)	0.4	内面、ミガキ	内面、ミガキ	5YR3/6 明褐色 ハケム	5YR3/6 明褐色 ハケム	○	
76	24	24	RA088	土師器	坏	30.1	(7.0)	—	(7.0)	0.3	—	—	7.5YR6/6 明褐色 ハケム	2.5YR6/1 黒	○	追加品切取
77	24	24	RA088	土師器	甕	30.1	—	(9.4)	—	—	—	—	7.5YR6/6 明褐色 ハケム	7.5YR7/6 明褐色 ハケム	△ ×	
78	24	24	RA088	土師器	坏	30.1	(13.0)	—	(2.9)	0.6	内面、ミガキ	内面、ミガキ	10YR3/1 黒	10YR4/1 明褐色 ハケム	△	
79	24	24	RA088	土師器	坏	30.1	(13.6)	—	(4.0)	0.3	内面、ミガキ	内面、ミガキ	7.5YR6/6 明褐色 ハケム	7.5YR6/6 明褐色 ハケム	○	
80	24	24	RA088	土師器	坏	30.1	(11.6)	—	(3.6)	0.4	内面、ミガキ	内面、ミガキ	7.5YR6/6 明褐色 ハケム	7.5YR6/6 明褐色 ハケム	○	

第6表 遺物観察表(5)

採取 番号	国産	年号	出土遺構	種別	器種	坑位	法			高さ			位置			色調			胎土	施度	備考	
							口径	坑径	器高	器厚	外周	外周	内径	断面	外形	内径	断面	胎土				
81	24	24	RA088	土師器	環	30.1	(12.2)	—	(3.0)	0.4	同軸ナデ	同軸ナデ	7.5YR7/6	7.5YR7/6	断面	7.5YR7/6	断面	同軸糸切痕	○			
82	24	24	RA088	土師器	環	30.1	(14.2)	—	(2.4)	0.4	同軸ナデ	同軸ナデ	7.5YR5/3 7.5YR6/6	7.5YR5/3 7.5YR6/6	断面	7.5YR5/3 7.5YR6/6	断面	同軸糸切痕	○			
83	24	21	RA088	土師器	環	30.1	—	4.3	—	—	同軸ナデ	同軸ナデ	10YR4/7.1	10YR4/7.1	断面	10YR4/7.1	断面	同軸糸切痕	○			
84	24	21	RA088	土師器	環	30.1	(5.6)	(2.0)	0.4	同軸ナデ	2ガキ	同軸ナデ	5YR5/6 7.5YR7/1	5YR5/6 7.5YR7/1	断面	5YR5/6 7.5YR7/1	断面	同軸糸切痕	○		同軸糸切痕高心	
86	26	25	RA089	土師器	高台付環	30.1	—	8.4	(2.7)	0.6	同軸ナデ	内周ミガキ	同軸ナデ	7.5YR6/6	7.5YR6/6	断面	7.5YR6/6	断面	同軸糸切痕	○		
87	26	25	RA089	土師器	環	30.1	—	5.8	(2.7)	0.6	同軸ナデ	同軸ナデ	7.5YR7/6	7.5YR7/6	断面	7.5YR7/6	断面	同軸糸切痕	○			
88	26	25	RA089	土師器	環	30.1	—	6.8	—	—	同軸ナデ	3ガキ	同軸ナデ	7.5YR7/6	7.5YR7/6	断面	7.5YR7/6	断面	同軸糸切痕	○		
89	26	25	RA089	土師器	環?	30.1	—	—	—	—	ナズリ	ハナメ	7.5YR7/6	7.5YR7/6	断面	7.5YR7/6	断面	同軸糸切痕	○			
90	26	25	RA089	土師器	環	30.1	(6.8)	(3.2)	0.5	ヘラナデ	ヨコナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	7.5YR7/6	7.5YR7/6	断面	7.5YR7/6	断面	同軸糸切痕	○		高心割痕?
91	26	25	RA089	土師器	環	30.1	(16.9)	(2.9)	0.4	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	7.5YR4/3	7.5YR4/3	断面	7.5YR4/3	断面	同軸糸切痕	○		
92	26	25	RA089	土師器	環	30.1	(13.0)	(2.4)	0.4	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	7.5YR7/4 7.5YR4/6	7.5YR7/4 7.5YR4/6	断面	7.5YR7/4 7.5YR4/6	断面	同軸糸切痕	○		
93	26	25	RA089	土師器	環	30.1	(15.5)	(2.6)	0.4	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	7.5YR7/6	7.5YR7/6	断面	7.5YR7/6	断面	同軸糸切痕	○		
94	26	25	RA089	土師器	環	30.1	(7.3)	—	—	—	—	—	—	7.5YR7/6	7.5YR7/6	断面	7.5YR7/6	断面	同軸糸切痕	○		
95	26	25	RA089	土師器	環	30.1	—	—	0.3	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	7.5YR6/6	7.5YR6/6	断面	7.5YR6/6	断面	同軸糸切痕	○		
96	26	25	RA089	土師器	環	30.1	(12.2)	(2.6)	0.4	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	7.5YR5/4 7.5YR6/6	7.5YR5/4 7.5YR6/6	断面	7.5YR5/4 7.5YR6/6	断面	同軸糸切痕	○		
97	26	25	RA089	土師器	環	30.1	(11.0)	(2.5)	0.3	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	10YR7/4 7.5YR4/3	10YR7/4 7.5YR4/3	断面	10YR7/4 7.5YR4/3	断面	同軸糸切痕	○		
98	26	25	RA089	土師器	環?	30.1	(24.0)	—	—	—	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸糸切痕	○			
100	27	25	RA090	土師器	環	30.1	(14.2)	—	(3.9)	0.4	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸糸切痕	○		
101	28	25	RA090	土師器	環	30.1	—	5.6	—	0.5	—	—	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸糸切痕	○		
102	27	25	RA090	土師器	環	30.1	(14.7)	(5.2)	0.5	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸糸切痕	○		
103	28	25	RA090	土師器	環	30.1	(13.0)	(13.0)	0.3	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸糸切痕	○		
104	28	25	RA090	土師器	小環	30.1	(9.2)	—	—	0.4	ハケメ	ハケメ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸糸切痕	○		
106	30	25	RE2016	土師器	環	35	(13.6)	(5.4)	5.0	0.4	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸ナデ	同軸糸切痕	○		同軸糸切痕高心
107	30	25	RE2016	土師器	環?	30.1	—	(8.2)	—	—	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	ヘラナデ	同軸糸切痕	△		同軸糸切痕高心

第7表 遺物観察表(6)

探検 番号	回廊	写真	出土遺物	様式	器種	形状	底径 (cm)	高さ (cm)	位置		土質		備考				
									内面	外面	内面	外面					
108	30	25	RE2016	土師器	壺	30.1	(13.0)	—	(5.0)	0.4	同帳ナテ	同帳ナテ	新開7/6	○	○		
109	31	26	RD188	土師器	壺	95	(16.0)	—	(26.2)	0.6	ハケム	ハケム	2.5YR7/6	○	○		
110	31	26	RD189	土師器	壺	30.1	(22.8)	—	(15.7)	0.8	ナズリ	同帳ナテ	同帳ナテ	2.5YR6/8	○	○	ス・ス・黒炭
111	34	26	RD190	土師器	壺	30.1	(28.0)	—	—	0.7	ケズリ	同帳ナテ	同帳ナテ	10YR6/4	○	○	
112	34	26	RD190	土師器	壺	30.1	—	(8.6)	(2.9)	0.4	同帳ナテ	同帳ナテ	5YR6/6	○	○		
113	34	26	RD190	土師器	壺	30.1	(33.0)	—	(4.5)	0.4	同帳ナテ	同帳ナテ	10YR5/4	○	○		
114	34	26	RD190	土師器	壺	30.1	—	(3.1)	(2.1)	0.4	同帳ナテ	同帳ナテ	7.5YR6/6	○	○		
115	34	26	RD190	土師器	壺	30.1	—	(5.6)	(2.6)	0.4	同帳ナテ	同帳ナテ	2.5YR6/6	○	○		
116	34	26	RD190	土師器	壺	30.1	(22.2)	—	—	0.6	ヨコナテ	ヨコナテ	7.5YR6/6	○	○		
117	34	26	RD190	土師器	壺	30.1	(15.6)	—	—	0.4	同帳ナテ	同帳ナテ	10YR5/4	○	○		
118	31	26	RD190	土師器	壺	30.1	—	(6.2)	—	—	—	—	10YR4/3	○	○	同帳赤切痕	
119	37	26	RG138	土師器	壺	30.1	(21.8)	—	(5.0)	0.8	ハケム	ハケム	10YR6/4	○	○	同帳赤切痕	
120	37	26	RG138	土師器	壺	30.1	(15.2)	—	(5.5)	0.4	同帳ナテ	同帳ナテ	7.5YR5/2	○	○	ス・ス・黒炭	
121	37	26	RG138	土師器	壺	30.1	—	(8.4)	(5.0)	0.7	ヘラナテ	ヘラナテ	2.5YR5/4	○	○		
122	37	26	RG138	土師器	壺	30.1	—	(7.6)	(2.8)	0.6	ハケム	ハケム	5YR6/4	○	○		
123	37	26	RG138	土師器	壺	30.1	—	(8.1)	—	0.5	ハケム	ヨコナテ	10YR6/4	○	○		
124	37	26	RG138	土師器	壺	30.1	(16.5)	—	—	0.7	同帳ナテ	同帳ナテ	7.5YR7/6	○	○		
125	37	26	RG138	土師器	壺	30.1	(13.2)	—	(4.3)	0.4	同帳ナテ	同帳ナテ	7.5YR6/8	○	○		
126	37	26	RG138	土師器	壺	30.1	—	—	—	0.8	ケズリ	内面・ミガキ	7.5YR6/4	○	○	黒炭	
127	37	26	RG138	土師器	壺	30.1	—	(4.5)	—	0.5	同帳ナテ	同帳ナテ	10YR6/4	○	○		
128	37	26	RG138	土師器	壺	30.1	—	(4.5)	—	0.4	同帳ナテ	同帳ナテ	10YR6/5	○	○		
129	38	26	RG139	土師器	壺	30.1	—	—	—	0.9	ハケム	ハケム	7.5YR4/6	○	○		
130	38	26	RG139	土師器	壺	30.1	—	(9.2)	—	—	—	—	10YR5/2	○	○		
131	38	26	RG139	土師器	壺	30.1	—	—	—	0.4	ヨコナテ	ヨコナテ	7.5YR6/6	○	○		

第8表 遺物観察表(7)

採取 番号	図版	方向	出土遺構	種別	形状	容量	容量 (ml)	法		調整		色調		胎土・焼成	備考
								口径	高さ	口径	高さ	内面	外面		
132	38	26	RG139	土師器	小甕?	30	—	—	—	ヨコナテ	10YR5/3 にぶい黄褐色	10YR5/3 にぶい黄褐色	○	○	
133	39	27	遺構外	土師器	甕	30	(17.8)	—	—	ヘラナテ	7.5YR6/4 にぶい褐色	7.5YR6/2 N2 黒	△	△	スス・コタ・出灰
134	39	27	遺構外	土師器	坏	30	(6.0)	—	—	内面・ミガキ ヘラナテ	10Y5/4 にぶい黄褐色	2.5Y1/1 N2 黒	○	○	黒漆
135	39	27	遺構外	土師器	甕	30	(20.6)	—	—	ハケム	10YR4/4 にぶい黄褐色	5YR4/4 7.5YR4/6 黒	△	△	○ 埴丸2個
136	39	27	遺構外	土師器	甕	30	(3.8)	(6.0)	—	ハケム タズリ	10YR6/6 7.5YR6/6 黒	7.5YR6/4 黒	△	△	
137	39	27	遺構外	土師器	甕	30	(16.4)	—	—	ヨコナテ	10YR6/3 にぶい黄褐色	10YR6/4 にぶい黄褐色	○	○	
138	39	27	遺構外	土師器	甕?	30	—	—	—	ハケム	7.5YR2/2 7.5YR2/2 黒	7.5YR2/2 黒	△	△	スス
139	39	27	遺構外	土師器	甕?	30	—	—	—	ヘラナテ	10YR2/4 赤褐色	10YR1 赤褐色	○	△	外・赤褐色土 内・赤褐色土
141	39	27	遺構外	土師器	甕?	30	—	—	—	ヘラナテ	10YR8/4 赤褐色	10YR2/2 黒	○	△	外・赤褐色土 内・赤褐色土
142	39	27	遺構外	土師器	甕?	30	—	—	—	ヘラナテ	10YR8/4 赤褐色	10YR2/2 黒	○	△	外・赤褐色土 内・赤褐色土

須恵器

採取 番号	図版	方向	出土遺構	種別	形状	容量	容量 (ml)	法		調整		色調		胎土・焼成	備考
								口径	高さ	口径	高さ	内面	外面		
99	28	25	RAM99	須恵器	甕	30	—	—	—	外高 タタキ	7.5Y2/1 N4 灰	7.5Y5/1 N4 灰	○	○	
140	39	27	遺構外	須恵器	甕?	30	—	—	—	タタキ ヨコナテ	N4 灰	N4 灰	○	○	3PB 硬質灰

陶器

採取 番号	図版	方向	出土遺構	種別	形状	容量	容量 (ml)	法		調整		色調		胎土・焼成	備考
								口径	高さ	口径	高さ	内面	外面		
85	24	24	RA088	陶器	甕	30	(4.5)	—	—	面灰軌	2.5Y7/2 灰褐色	2.5Y7/2 灰褐色	△	△	子集庫19日記

\* 残存率は%で表し、30%以下のものは特に「30」とした。

\* 法量の数は、残存率・推定量を( )で表すこととしたが、器高は1/3以上残存するものについて( )とし、それ以下は—とした。

\* 胎土は「精良」C、「やや粗」D、「粗」Eとした。

\* 焼成は「良好」C、「やや不良」D、「不良」Eとした。

## V ま と め

### 1 遺 構

#### (1) 第25次調査との関係

平成16年度、本宮熊堂B遺跡第27次調査（盛岡市）と本宮熊堂B遺跡第25次調査（国土交通省）は並行して発掘調査が行われ、今次調査A区北端は第25次調査区と接する。標高差は20～30cmを以って今次調査区が高い。第25次調査においては、古代の堅穴住居跡が43棟確認されている（奈良時代22棟、平安時代15棟、時期不明6棟）。調査区境にまたがり共通する遺構は十和田aテフラを含むRG138溝跡とRD189近世土坑である。

第25次調査と合わせて想定されることは、奈良時代、平安時代の住居跡ともに一定の場所でまとまりをもって存在するという点である。奈良時代の堅穴住居跡は大型の住居を中心に、周りに小型の住居を配置する形で存在する（第42図）。住居間の距離は10m以内である。RA084・RA085・RA087堅穴住居跡はこのまとまりに含まれる小型の住居跡である。まとまりの中心になる大型の住居は第25次調査のRA098堅穴住居跡である。規模は東西5.58m、南北6.01m、深さは最大で49cmを測る。他の住居よりも20～30cm高い場所に立地する。このような集落のまとまりが、奈良時代で3カ所、平安時代で1～2(?)カ所認められた。

さらに、奈良時代の集落は河岸段丘面の縁に沿って帯状に存在し、平安時代の集落はそれよりも南側に存在する。集落は奈良時代から平安時代へと時間の経過とともにやや南に移動していることがわかった。そして、平安時代になると住居の大きさはほぼ統一され差異が見られなくなる（註3）。

#### (2) 調査区及び遺構の特徴

全体地形から見た調査区及び遺構の特徴について述べる。

今次調査区はA区、B区、C区に分かれ総調査面積は3,661m<sup>2</sup>である。A区は北西寄りに位置し三角形を呈している。面積は2,113m<sup>2</sup>、平均標高は124.00mである。本遺跡は雫石川が形成した扇状地形の低位河岸段丘上にあり、A区の南端は段丘の変換点に当たる。変換点に沿うように現況では水路になっていた。そして、地形の落ち込みは旧河道となる。旧河道には黒ボク土層が堆積し黒く帯状を成している。規模は長さ71m、幅9～11.5m、最大層厚50cmを測る。黒ボク土層上には十和田aテフラを含むRG138・139・140の溝跡3条が東西に走る。

堅穴住居跡は7棟検出しており3棟が奈良時代、4棟が平安時代の堅穴住居跡である。奈良時代の堅穴住居跡は旧河道の縁付近に位置し、平安時代の堅穴住居跡はそれよりも北方向にやや離れ5～30cm高いところに位置する。RA084焼失住居とRA087の奈良時代の堅穴住居跡は良好に残存するが、それ以外の堅穴住居跡は削平や攪乱を受けている。他に住居状遺構RE016、土坑RD187～189、墓壇RD190を検出した。古代から近世までの遺構があり集落と密接に関係するエリアであると言える。

B区は第20次調査に挟まれるエリアで、面積は1,128m<sup>2</sup>である。平均標高は124.54mを測る。両脇のエリアからは古代の堅穴住居跡22棟が確認されている。しかし、B区においては十和田aテフラを含む溝跡1条RG110のみの検出であった。第20次調査区とは全く接するわけであるが、ピット1個も存在せず遺構の空白域であった。このエリアは広場的な意味合いを有し多目的に利用されたのではないかと想像される。

C区は現況水路に当たり、面積は420m<sup>2</sup>、平均標高は124.59mである。遺構は検出せず出土遺物は



土師器の小破片が2点だけであった。

### (3) ま と め

住居群の位置関係についてだが、奈良時代は旧河道の付近且つ段丘面の縁にそって住居が存在することがわかった。さらに、集落はやや標高の高い場所に位置する大型住居を中心として周りに小型住居を配属する形で構成されていることも見えてきた。R A084・085・087は小型住居に当たる。平安時代の住居群はそれよりもやや南に位置し、住居の規模はほぼ統一される。

黒ボク土層面において十和田 a テフラを含む R G138～140溝跡を良好な状態で検出できた。黒ボク土層は旧河道跡に生成される土壌として礫石川流域でよく見られる。黒ボク土層中に遺構・遺物は無いものと見て除去または無視することがあるが、火山灰(十和田 a テフラ)を手がかりに削平することなく検出できたことは一つの成果であったと考えている(註5)。

## 2 遺 物

### (1) 土師器の細分比較

遺物の大部分は奈良時代の3棟の竪穴住居跡から出土した土師器の甕と坏である。その内、まとめて遺物が出土した R A084と R A087の2棟について比較検討し考察を加えることにした(表は R A085を含む)。

分類基準は、器種で分けて坏・甕・鉢とした。さらに器種を細分し、坏については体部の中位に段を有するものをⅠ群、下位に段を有するものをⅡ群、段が無いものをⅢ群とした。さらに口縁部の外形で細分し口縁部が外反するものを a、外傾するものを b、屈曲するものを c とした。甕はⅠ群長胴甕、Ⅱ群中間甕(長胴甕と球胴甕の中間に位置する甕で体部にふくらみを有する)、Ⅲ群球胴甕、Ⅳ群小甕とした。そして、それぞれについて口縁形が外反するものを a、外傾するものを b、屈折するものを c とした。鉢は2点であるので器種の細分をせず、口縁形が外反するものを a、外傾するものを b、屈曲するものを c とした。

まずは、R A084と R A087の竪穴住居跡について器種の共通点と差異を検討する。共通して言えることは、坏、長胴甕、球胴甕、小甕、鉢がそれぞれで出土していることである。R A087の坏58は小型で平底であると思われる。それ以外の R A084と R A087の坏は丸底で僅かでも段を有することからお互いが類似する。

R A084と R A087の両者から出土した甕の口径は16～21cm、器高は25～28cmを測りそれほど大きな差異はない。ただし、体部中央が膨らむ中間甕は R A084にあって R A087には無い。さらに口縁形で見ると、坏は外傾する b タイプと内湾する c タイプに分けられる。甕と鉢は、口縁部がはっきりと外反する a タイプ、外傾する b タイプ、屈折する c タイプに分かれる。また、b タイプは a と c のどちらかのタイプに寄る。長胴甕で言えば、屈折する c タイプは R A087からは43・45・48の3点出土しているが R A084には無い。球胴甕は外反する a タイプが R A084から出土している。小甕と鉢は b タイプ又は c タイプである(註4)。

この口縁形 a b c のタイプの分類から見えてきたことは、口縁形と胎土、整形との間には決まった関係性が見られるということである。まず外反する a のタイプであるが、頸部は無段で口縁部と体部の境目に明瞭な段を有する。器厚は0.7～1.0cmと厚く、胎土焼成とも良好で硬く締まるものが多い。R A084の12・13・15は好例である。一方、屈折する c タイプは頸部に1～3条の段を有する。口唇部の端部に沈線を有するものもある。器厚は0.6～0.7cmと薄く胎土は粗く焼成も不良であるが、丁寧

な整形が施されている。スヌヤコゲが付着するものがあり使用頻度は高かったと思われる。R A084の2・5、R A087の43・45・46・48は好例である。また、タイプbはaかbどちらか湾りの傾向を示す。堿と鉢に限って総じて言えることは、R A084はaまたはb-aタイプが主流(6/11点)であり、R A084はcまたはb-cタイプが主流(7/11点)を成しているということである。

坏について言えることは、体部に段を持つ内黒丸底がR A084、R A087共に主体であるが、内面に段を持つ古手と思われる坏がR A084から出土しているのに対して、R A087からは、小ぶりで平底の新し目の坏が出土している。この2点だけを取ればR A084の方がやや古いと言えそうだが、時間差を決定するには極めて弱い。両堅穴住居跡ともに、時期は7世紀末葉から8世紀初頭であろうと推測される。

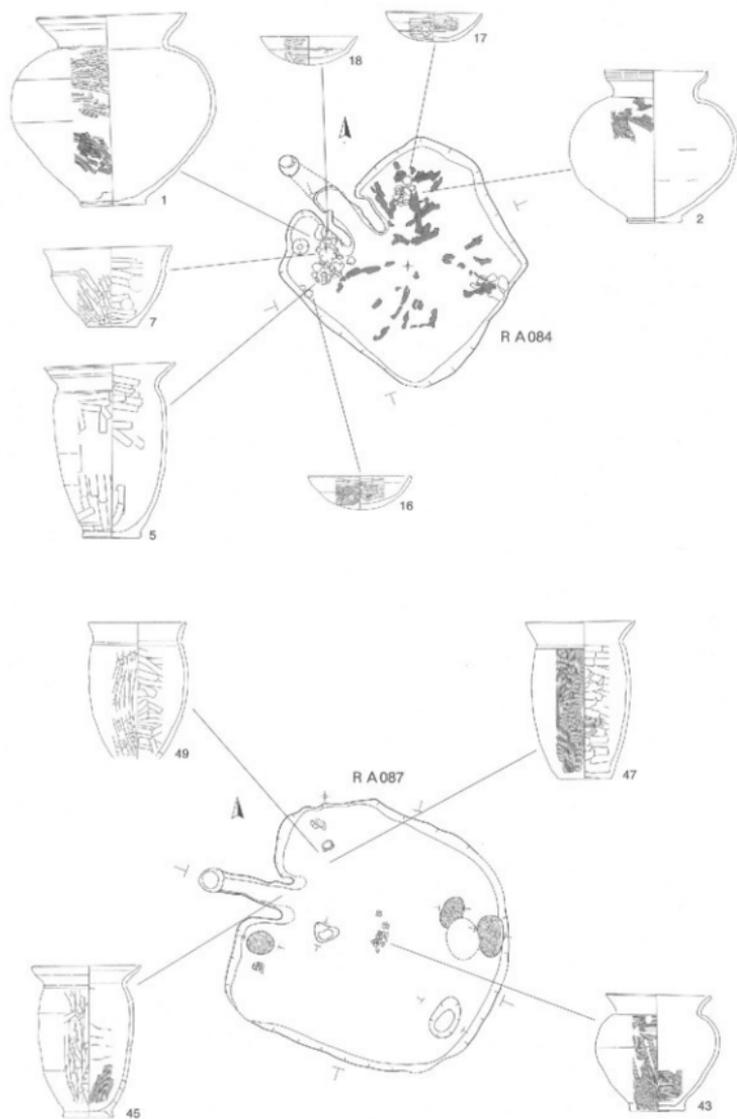
## (2) 酒美平遺跡Ⅱとの遺物比較

第9表で本宮熊堂B遺跡第27次調査堅穴住居跡R A084・R A087の出土土器と青森県八戸市酒美平遺跡Ⅱ堅穴住居跡S I 17・S I 18の出土土器を比較した。酒美平遺跡Ⅱは遺物の特徴から飛鳥～奈良時代の遺跡で、本宮熊堂B遺跡第27次調査の7世紀末葉から8世紀初頭の時期と重なる。

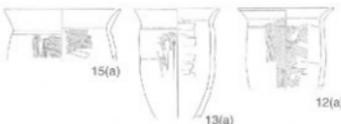
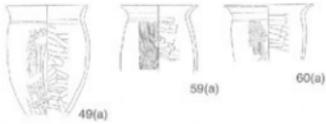
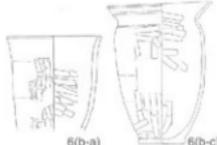
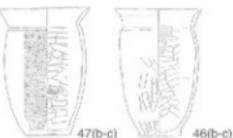
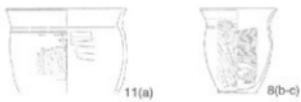
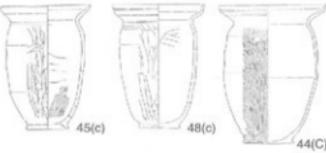
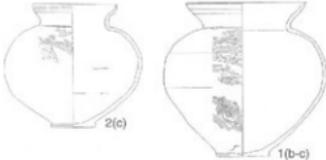
酒美平遺跡ⅡS I 17の2は口径18.0cm、4は16.6cm、体部に段の無い大型の坏である。堿では長胴堿・球胴堿・小堿が出土している。5の球胴堿は口縁端部が屈折する。体部はヨコナアの後にミガキ調整が施され丁寧に整形されている。胴部外面の中央部分と口縁部、内面の中央部分にはスヌヤコゲが付着し使用頻度が高かったと推測される。

第9表 土器細分一覧

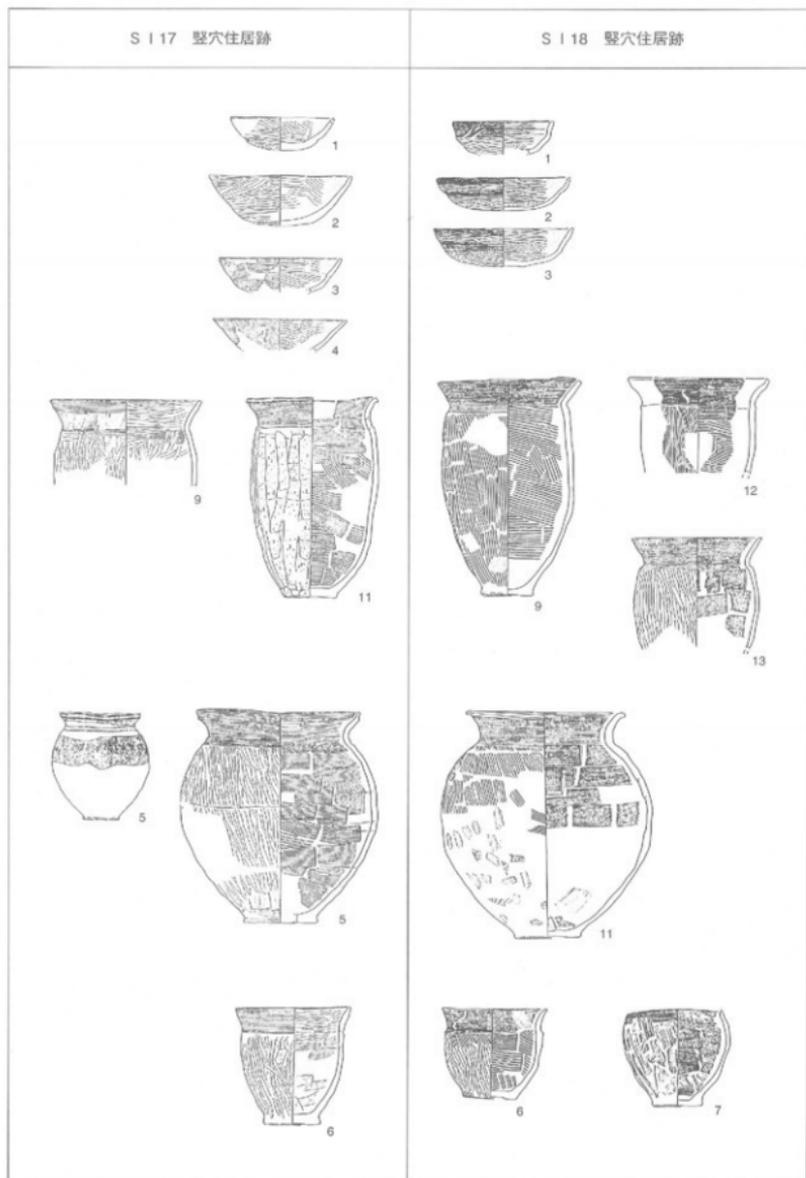
器種	器種の細分	口縁形	R A084	R A085	R A087	S I 17	S I 18
坏	I群段中	A:外反					*1
		B:外傾	18・19			*3	*3
		C:内湾					*2
	II群段下	A:外反					
		B:外傾	17		58	*1	
		C:内湾		(28)	56・57		
III群段なし	A:外反						
	B:外傾			65	*2・*4		
	C:内湾	16				4	
堿	I群長胴堿	A:外反	12・13・15		46・59・60	*11・12	
		B:外傾	5・6・(14)		47・49・62	*9・10	8・*9・10・*13
		C:屈折		27	44・45・48		*12
	II群中間堿	A:外反	11				
		B:外傾	8				
		C:屈折					
	III群球胴堿	A:外反					*11
		B:外傾	1		43		
		C:屈折	2			*5	
	IV群小堿	A:外反					*6
		B:外傾			55		*7
		C:屈折	9			*6	
鉢	A:外反						
	B:外傾	7					
	C:屈折			51			



第42図 R A 084・087 竪穴住居跡遺物出土状況

形式		R A084 竪穴住居跡	R A087 竪穴住居跡
坏	I群(段中)		
	II群(段下)		
	III群(段無)		
甕	I群(長胴甕)		
			
	II群(中間甕)		
	III群(球胴甕)		
IV群(小甕)			
鉢			

第43図 R A084・087竪穴住居跡土器集成図



第44図 S 117・18豎穴住居跡土器集成図

同じく S I 18 の 1 は坏で口縁端部が外反する。2 と 3 の坏は口径が 17cm 以上で大型である。甕は S I 18 においても同様、長胴甕・球胴甕・小甕が出土している。供膳具としての坏、煮沸具としての長胴甕・小甕、貯蔵具としての球胴甕。これら土器の關係は同一時間幅の内で日常的に使用されたことを意味する普遍的セット關係と考える。12 の甕の口縁は屈折しその端部に僅かな抉れ調整が見られる。同様の抉れ調整が R A 084、R A 087 の中にも見られる。

R A 084・087、S I 17・18 が存在した 7 世紀末葉～8 世紀前葉には両地域ともに東北中部または南部の影響がより強く波及していると考えられる（註 6）。

### （3）まとめ

掲載点数は R A 084 が 23 点、R A 087 が 27 点である。兩聚穴住居跡から出土した遺物は、量的な多さだけでなく残存状態が良好であったため、どのような土器のセット關係をもつて同一時間幅の中で使用されていたのかを把握するのに好例であった。また、同時期である青森県八戸市酒美平遺跡 II の土器と比較分析することによって、より普遍的な土器のセット關係について確認することができた。細分分析に至っては、口縁が屈折する甕は丁寧な整形が施されており、スズ等が多く付着していることから使用頻度が高かったものと考えている。口縁が屈折する c タイプの甕は器厚が薄く火のまわりが良く重宝されたものと推測する。類似する土器が青森県八戸市酒美平遺跡 II から出土していることに鑑み、文化的な影響關係があったものと考えられる。二戸市荒谷 A 遺跡・同市上出面遺跡の出土甕類の中に口縁部が屈折する c タイプと類似するものが見られる（註 7）。また、同時期の坏や甕の外形的特徴を捉えると、仙台市郡山遺跡・蔵工町塩沢北遺跡（7 世紀後葉から 8 初頭）、仙台市六反田遺跡・下ノ内遺跡・利府町郷楽遺跡（8 世紀前半）の土器に類似するところがある（註 8）。東北北部のみならず中部・南部の文化的影響をも少なからず受けていると思われる。

### 註

- (1) 吉田・金子 2004 『本宮熊堂 A 遺跡第 17 次発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団歴史文化財センター・453 集 p 1 引用。〈参考・引用文献〉岩手県識識村教育委員会 2000 『岩手山の地質』滝沢村文化財調査報告書第 32 集／活断層研究会 1992 『日本の活断層』東京大学出版会／川村信人「日本列島最古の化石海洋プレート—早池峰帯の古生代付加体—」／地質調査研究推進本部地質調査委員会 2001 『北上低地帯西断層帯の評価』
- (2) 竊に銭貨を副葬する、いわゆる「六道銭」の風習は、平安時代の中頃以降にわが国に広まった。浄土信仰における六道輪によるものと考えられる。考古学的には、各地の古代末から鎌倉時代にかけての墓にこの風習の萌芽と思われる銭貨の共伴事例が認められる。そして室町時代の後半頃には 6 枚の銭貨を供える風習として一般化して、江戸時代に引継がれてきたことが分かってきている（阿部・佐藤 1997：p 200）。
- (3) 本宮熊堂 B 第 25 次調査と合わせて遺構の関連から分かった成果である。本宮熊堂 B 第 25 次調査報告書を一読願いたい。
- (4) ここでいうタイプとは Type = 型式のことではなく外形の意味で用いている。
- (5) 「黒ボク土（黒色腐植質火山灰土）は、火山粉砕物（軽石、火山灰、テフラ）の土壌化に伴い黒色の腐植が著しく集積して形成された土壌である。火山活動の静穏期には被植が回復し、土壌生成作用で風化が進み腐植層が形成される。黒色腐植層が生成される成因はテフラ中の活性アルミニウムとイネ科起源の植物珪酸体（P・O）が結合し腐植化を促進させるためである。したがって、黒色腐植層は草原植生下において進行する。草原植生は、自然あるいは人為的（森林伐採・火災・焼畑）に起こり得る。」（佐瀬 1991：p 49-52）  
※上記は佐瀬氏の論文の一部を黒ボク土層の生成に関わり筆者が要約したものである。
- (6) 口縁の上端が屈折し受け口状になるタイプの土器 R A 084 の 2、R A 087 の 35、S I 17 の 5、S I 18 の 12 は 7 世紀後葉～8 世紀前葉の時期と考えられる（宇部 2002：p 251）。
- (7) 二戸市荒谷 A・上出面遺跡・米沢遺跡、二戸町上野遺跡らの甕類の中に口縁が屈折し受け口状になるものが比較的多く存在する。（集落遺跡検討会 2004：p 9、p 17、p 36、p 39）
- (8) 【7 世紀後葉から 8 世紀初頭】

仙台市郡山遺跡Ⅱ期官衛階段、蔵工町塩沢北遺跡1・2号住居跡出土資料を基準とする。

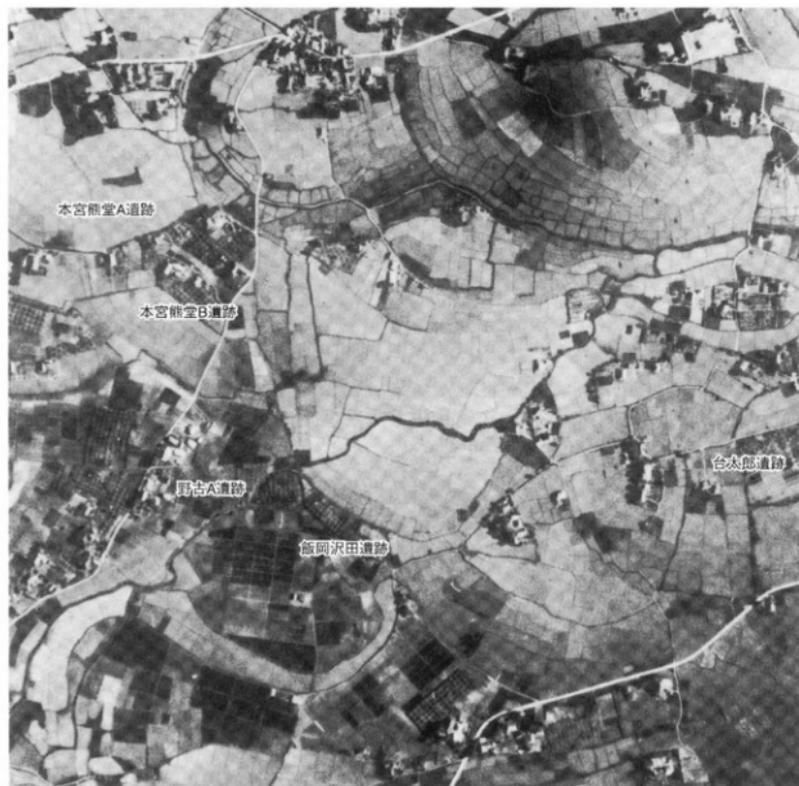
【8世紀前半】

仙台市六反田遺跡1・6・7号住居跡、下ノ内遺跡S11住居跡、利府町郡山遺跡第107住居跡出土資料を基準とする。  
(村田2000:p45,47,48)

## 引用・参考文献

- 田中琢 1988『形式学の問題・日本考古学を学ぶ(1)』有斐閣
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『本宮熊堂A遺跡第17次発掘調査報告書』453集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『本宮熊堂B遺跡第13・15・20次発掘調査報告書』第467集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『細谷地遺跡第8次発掘調査報告書』第454集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『下楯遺跡第2次発掘調査報告書』第446集
- (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2004『島田Ⅱ遺跡第2～4次発掘調査報告書』第450集
- 青森県八戸市教育委員会 2000『高美平遺跡Ⅱ・八戸市埋蔵文化財センター調査報告書第88集』
- 青森県八戸市教育委員会 2002『宮境沢(3)遺跡・八戸市埋蔵文化財センター調査報告書第92集』
- 阿部正光・佐藤敏幸 1997『近世の出土銭Ⅰ考古編・水井久美男編』1997兵庫県埋蔵銭調査会
- 宇部剛保 2002『東北北部型十師器にみる地域性』『海と考古学とロマン・市川金丸先生古稀記念論集』刊行会
- 村田晃一 2002『飛鳥・奈良時代の陸奥北辺—移民の時代—』宮城考古学
- 斎藤隆・麻栢一志 1981『近世印田墓』『魚津市埋蔵文化財報告書』第8集 魚津市教育委員会
- 鈴木公雄 1994『念仏銭、題目銭と六通銭』『史学』第63巻第3号 三田史学会
- 集落遺跡検討会 2004『岩手県土師器集成』盛南産業株式会社
- 古代城柵官衛遺跡検討会 2005『第31回古代城柵官衛遺跡検討会資料集』
- 平尾政幸 1996『甕内の土師器壺の製作技法』『古代の土器研究—律令的土器様式の西・東4煮炊具—』古代土器研究会
- 佐瀬隆 1991『黒色腐植層(黒土層)の生成に関する覚書』『紀要Ⅸ(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター』

# 写真図版



昭和22～23年頃の遺跡周辺の様子（米軍撮影の空中写真）



遺跡遠景（南から）



調査区空中写真（南から）

写真図版2 空中写真（2）



RA084住居跡 出土遺物



RA087住居跡 出土遺物

写真図版 3 土器集合写真

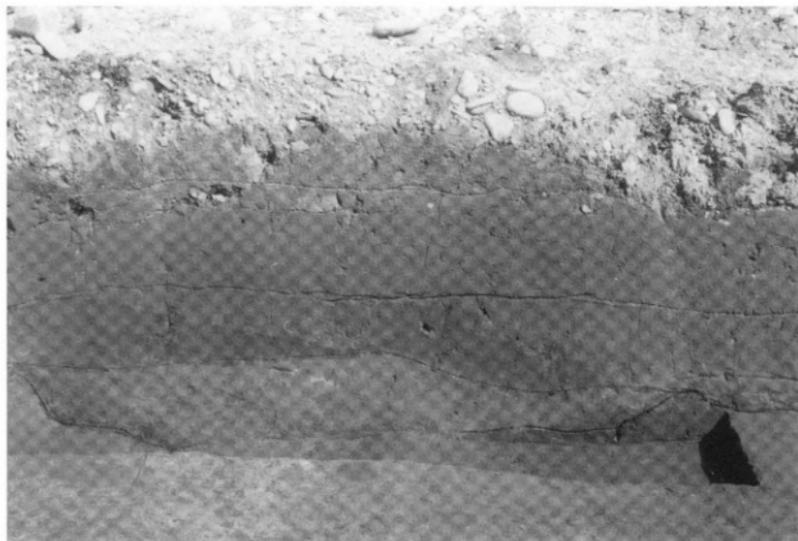


A区表土除去黒ボク土層検出状況（東から）

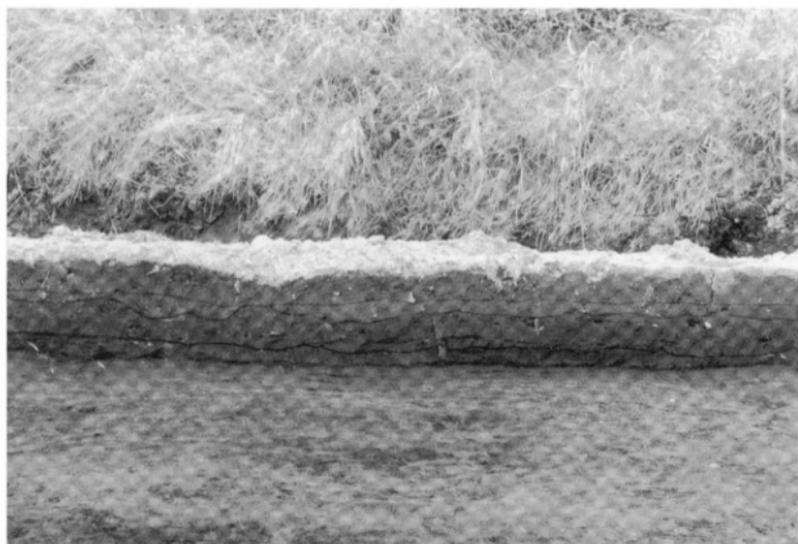


C区調査前風景（西から）

写真図版4 表土除去・調査前風景



A区基本層序 (南北)

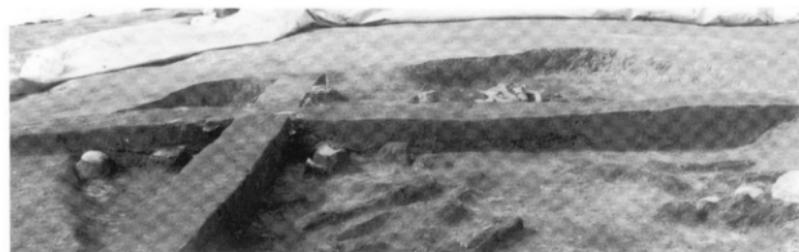


A区基本層序 (東西)

写真図版5 基本層序



平面（東から）

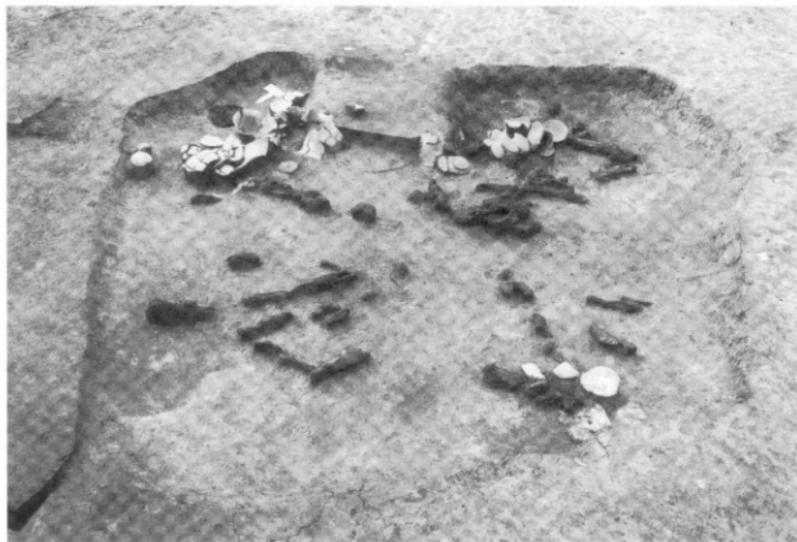


断面（南から）

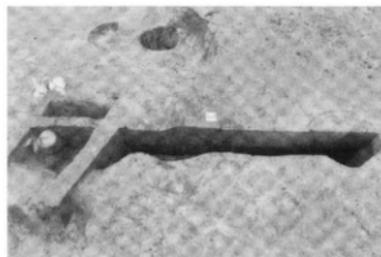


断面（西から）

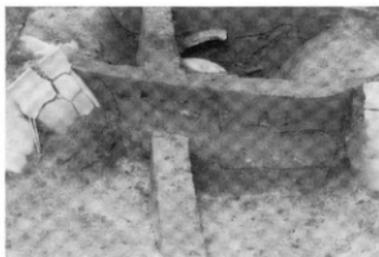
写真図版 6 RA084竪穴住居跡（1）



焼失状況平面（東から）



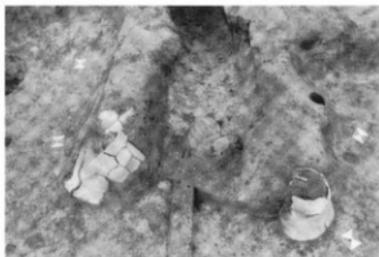
カマド煙道縦断面（北から）



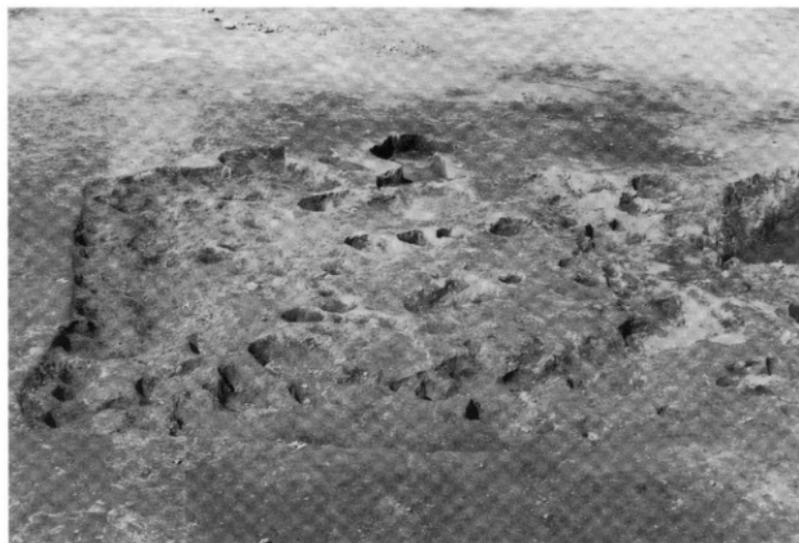
カマド横断面（東から）



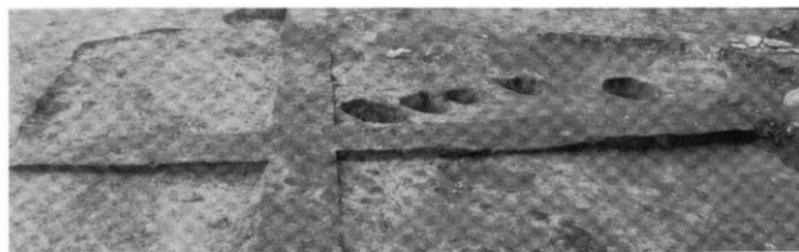
カマド使用状況（東から）



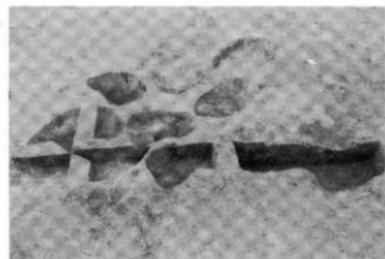
カマド燃焼部断面（東から）



平面（東から）



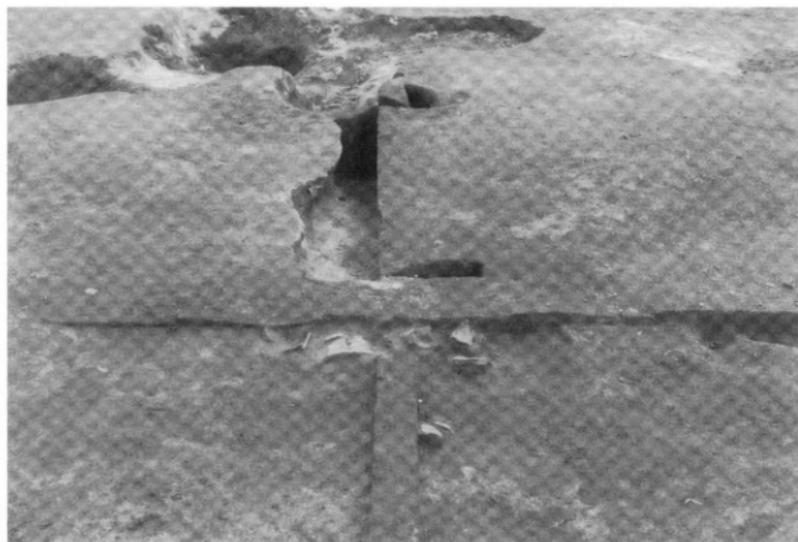
断面（東から）



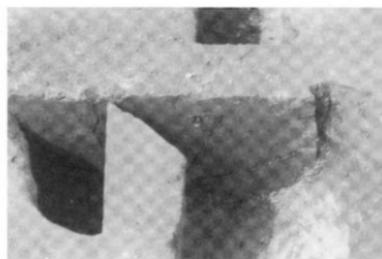
煙道縦断面（北東から）



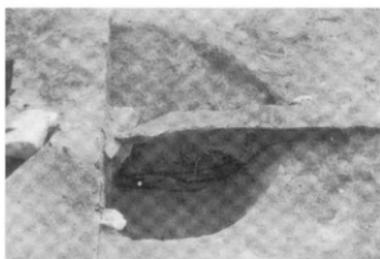
煙道横断面（南東から）



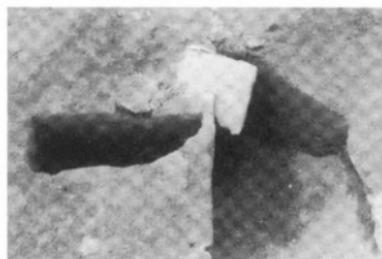
検出状況 (西から)



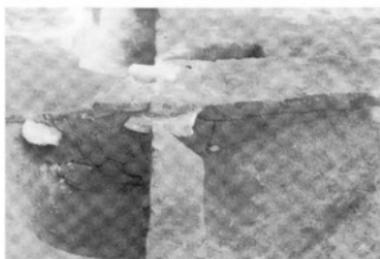
煙出し断面 (東から)



煙道縦断面 (北から)



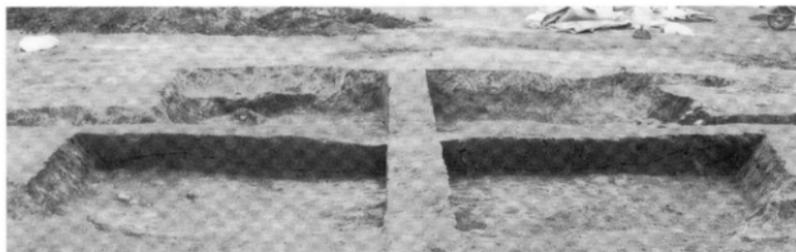
煙道横断面 (東から)



カマド熱煙部断面 (西から)



平面（東から）



断面（南から）



断面（東から）

写真図版10 RA087竪穴住居跡（1）



遺物出土状況（東から）



カマド横断面（東から）



カマド縦断面（東から）



カマド使用状況（東から）



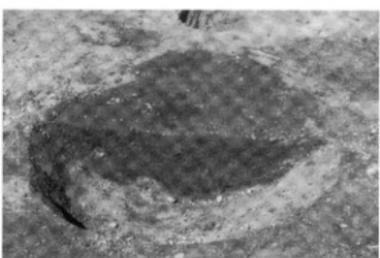
P2断面（南から）



P3断面（南から）



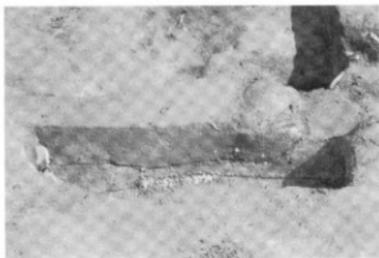
P4断面（南から）



P5断面（東から）



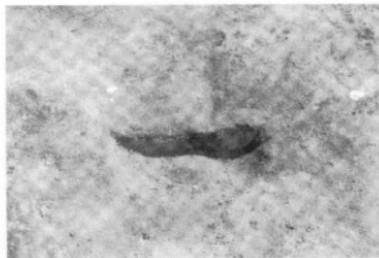
カマド横断面（西から）



カマド縦断面（南から）



P1断面（東から）



P2断面（東から）



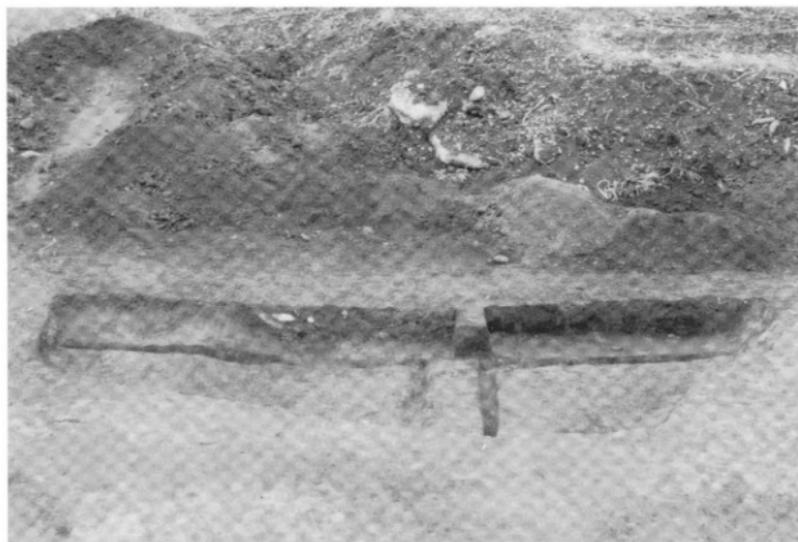
A区（土層ベルト含む）調査現状



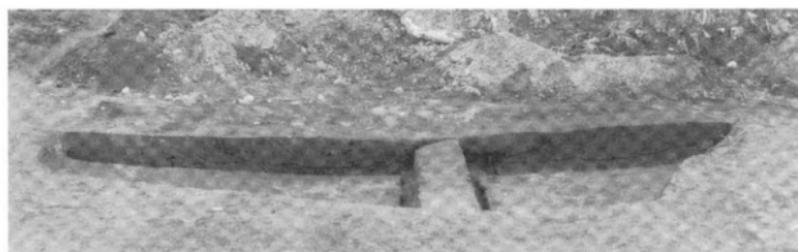
作業風景



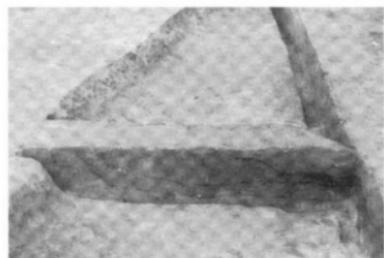
作業風景



平面（西から）



南北断面（西から）



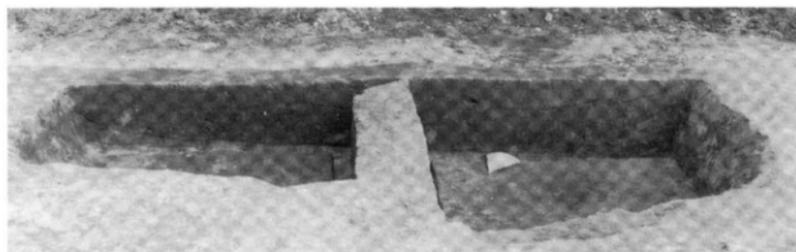
東西断面（北から）



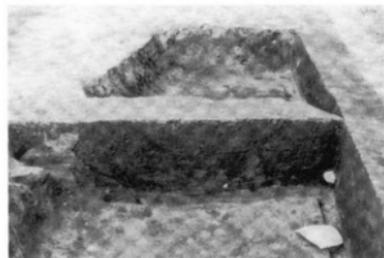
P1 断面（東から）



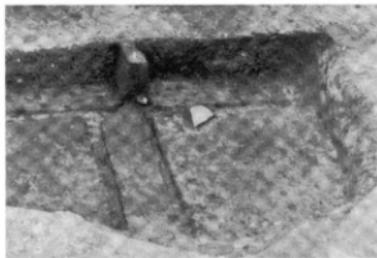
平面（西から）



南北断面（西から）

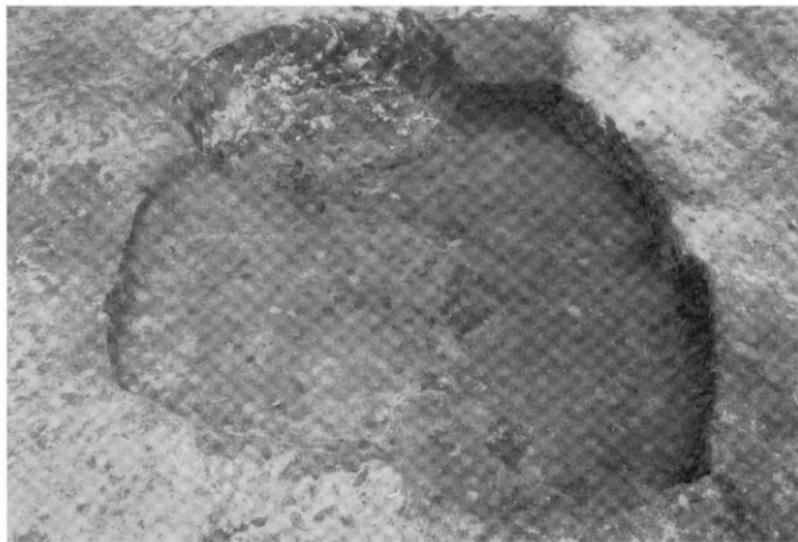


東西断面（北から）

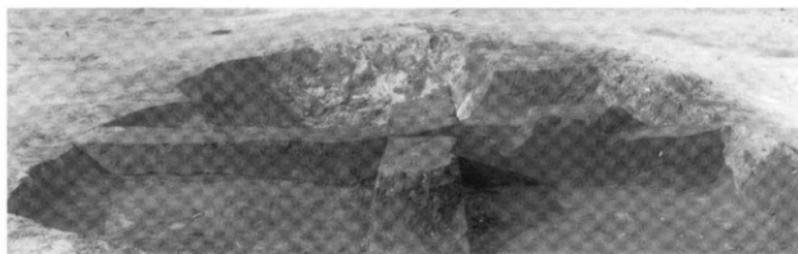


遺物出土（西から）

写真図版14 RA090竪穴住居跡



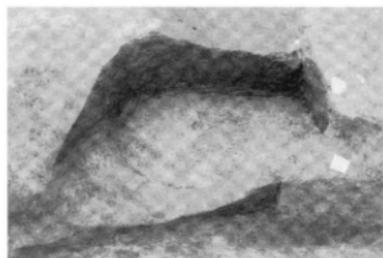
平面 (南から)



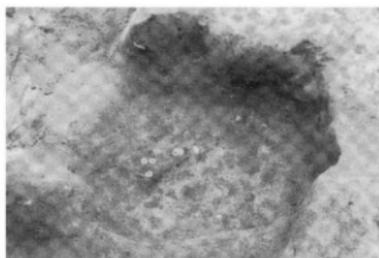
断面 (南から)



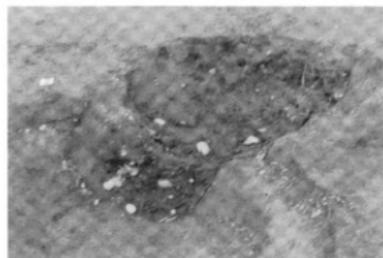
断面 (西から)



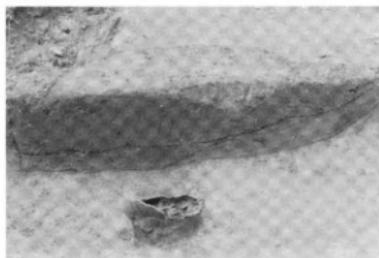
RD187 平面 (北から)



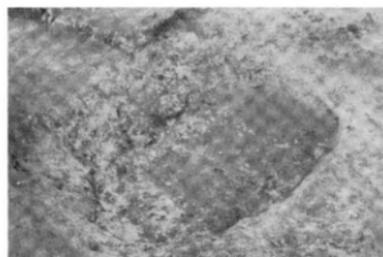
RD190 遺物出土状況 (西から)



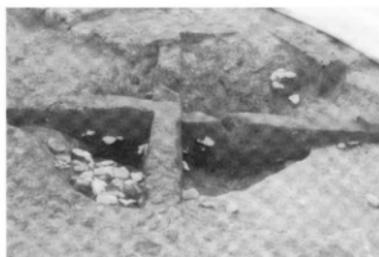
RD188 平面 (南東から)



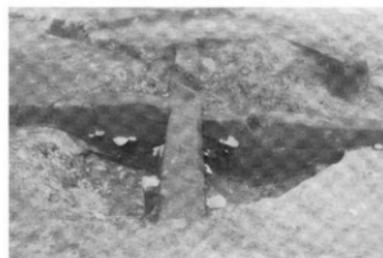
RD188 南北断面 (西から)



RD189 平面 (南東から)



RD189 検出状況 (西から)



RD189 南北断面 (東から)

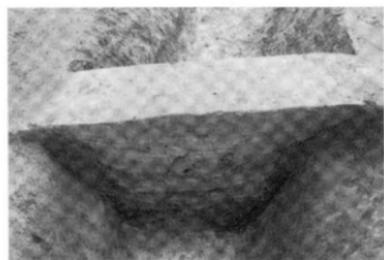


RD189 東西断面 (南から)

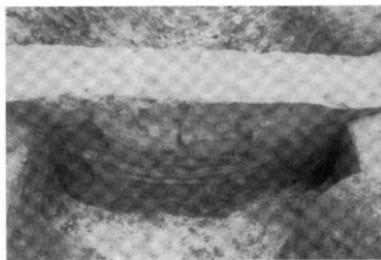
写真図版16 RD187・188・189・190土坑



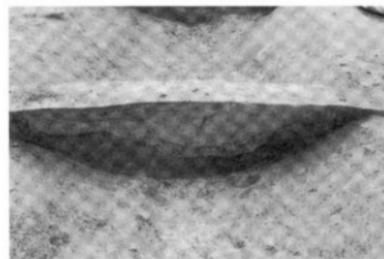
RG138・139 平面 (東から)



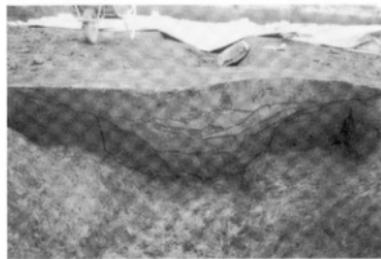
RG138 A-A断面 (西から)



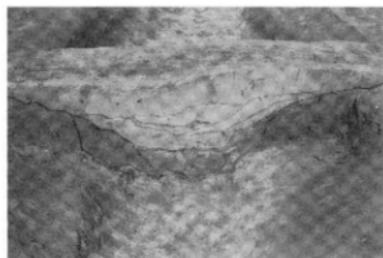
RG138 C-C断面 (西から)



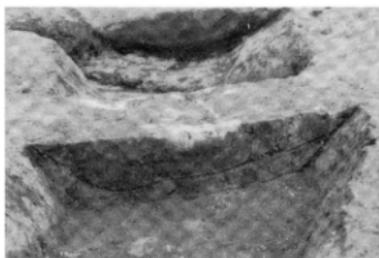
RG138 E-E断面 (東から)



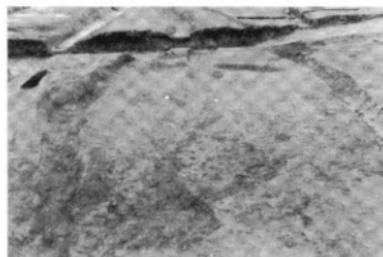
RG138 F-F断面 (東から)



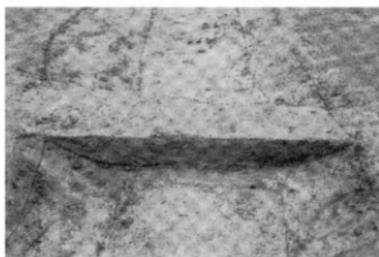
RG139 G-G断面 (東から)



RG110 平面・断面 (東から)



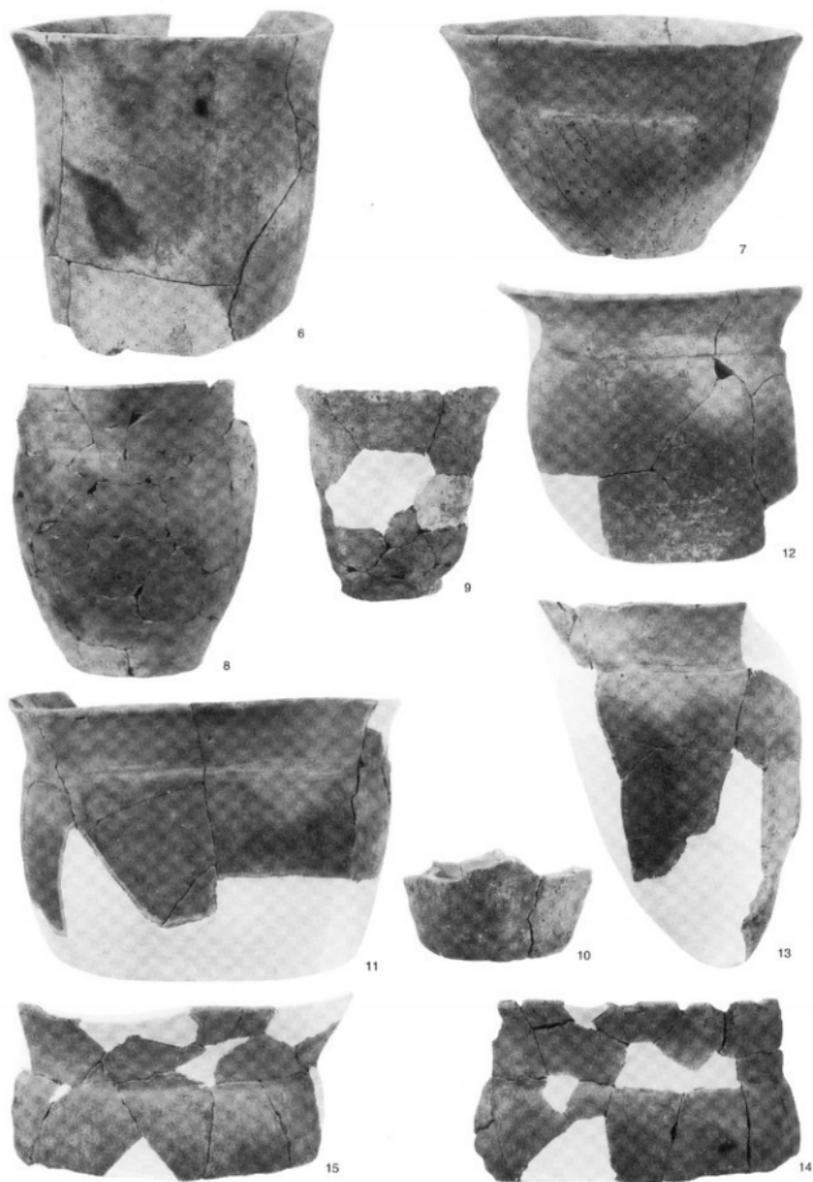
RG140 平面 (東から)



RG140 H-H断面 (西から)



写真図版19 RA084竪穴住居跡出土遺物(1)



写真図版20 RA084竪穴住居跡出土遺物（2）



写真図版21 RA084(3)・085・086竪穴住居跡出土遺物



44



45



43



46



47

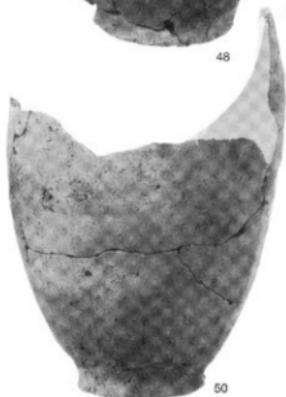
写真図版22 RA087竪穴住居跡出土遺物(1)



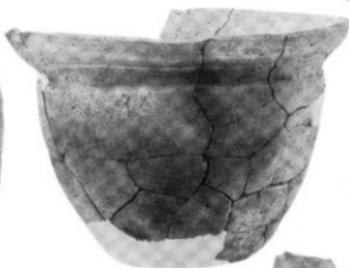
48



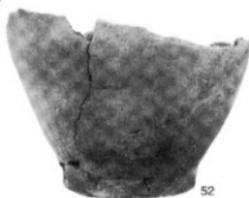
49



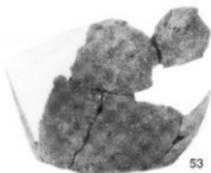
50



51



52



53



54



55



56



57

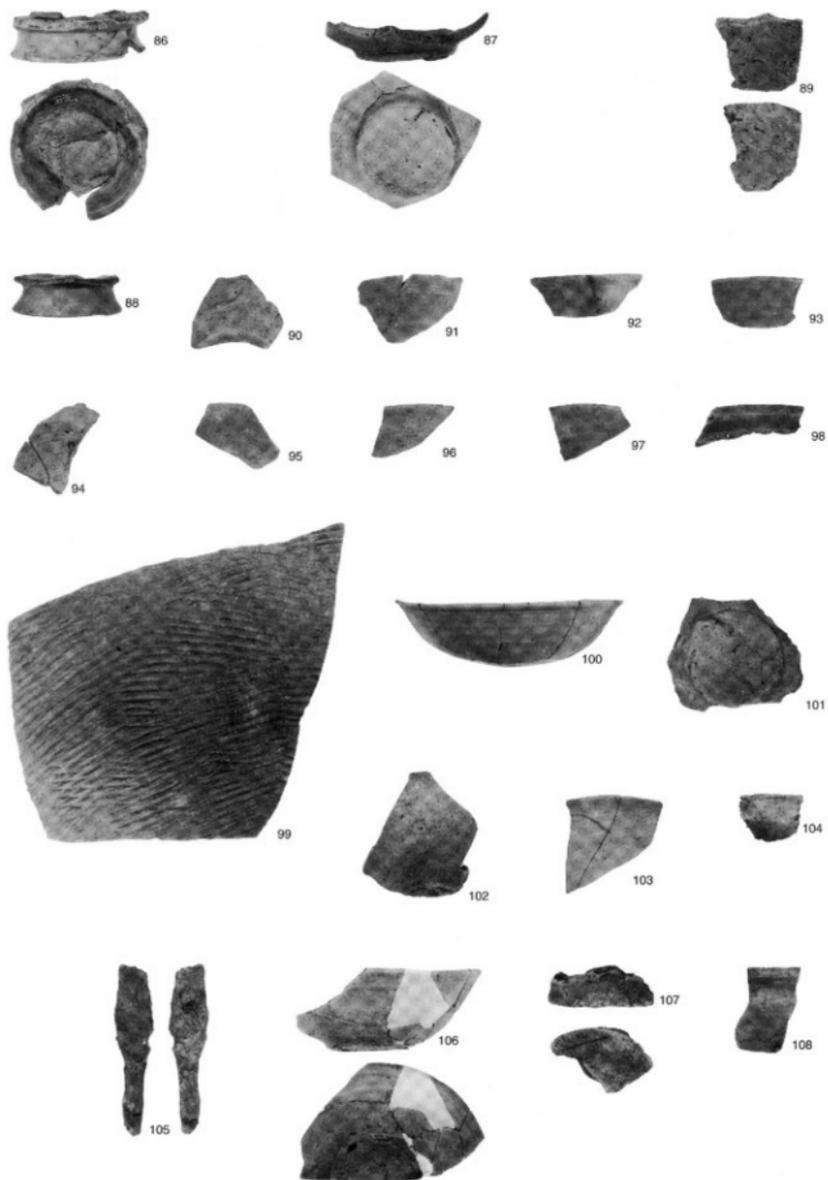


58

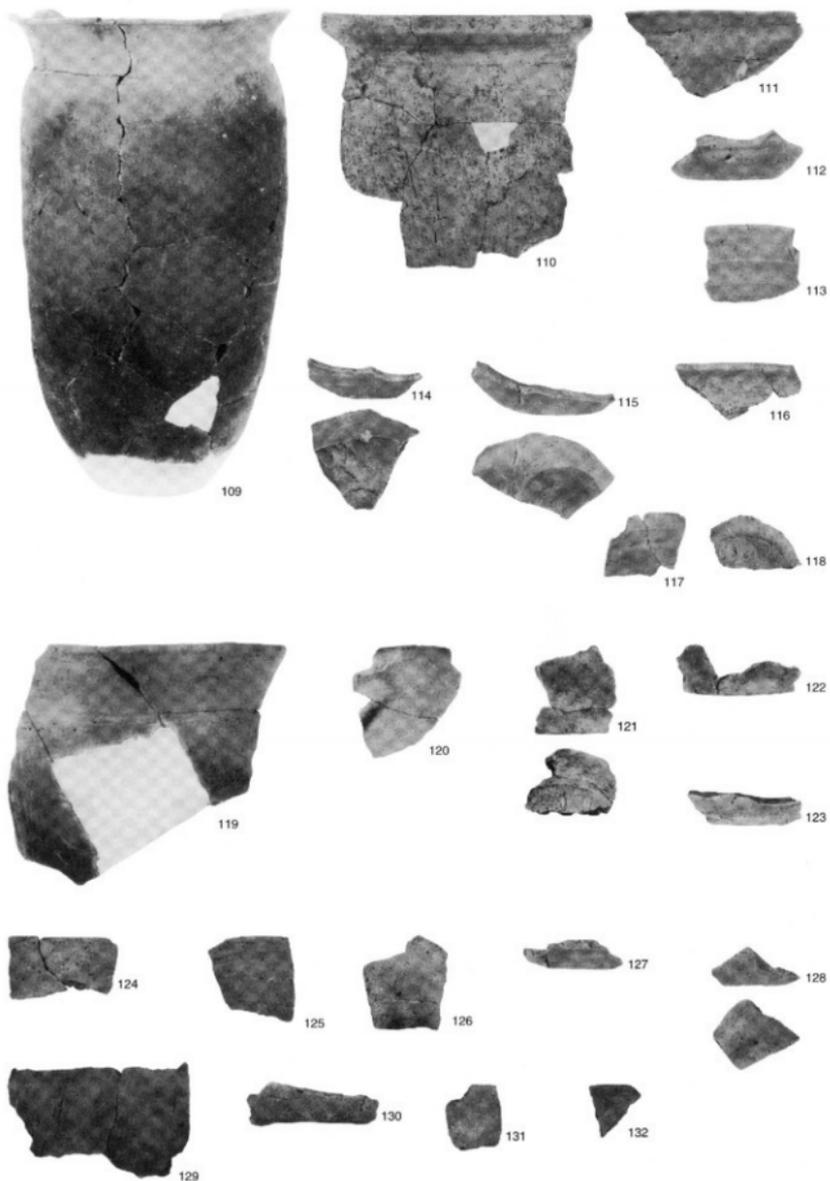
写真図版23 RA087竪穴住居跡出土遺物(2)



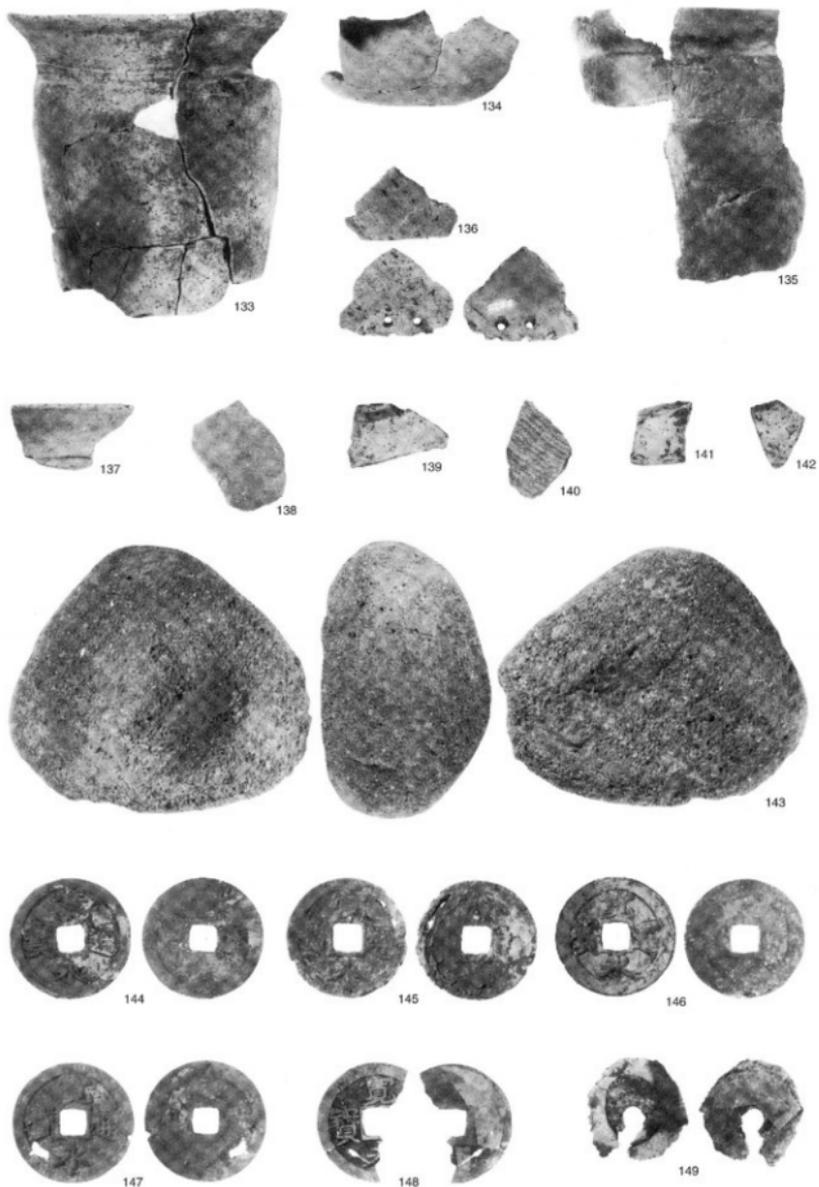
写真図版24 RA087(3)・088竪穴住居跡出土遺物



写真図版25 RA089・090竪穴住居跡、RE016住居状遺構出土遺物



写真図版26 RD188・190土坑、RG138・139溝跡出土遺物



写真図版27 遺構外出土遺物、RD190土坑出土錢貨

## 報告書抄録

ふりがな	もとみやくまどうびーいせきだいにじゅうななじはっくつちょうさほうこくしよ							
書名	本宮熊堂B遺跡第27次発掘調査報告書							
副書名	盛岡南新都市区画整理事業関連遺跡発掘調査							
巻次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第487集							
編著者名	小松剛也							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL (019) 638-9001							
発行年月日	2006年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東経 ° ° °	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
本宮熊堂B遺跡 第27次	岩手県盛岡市 本宮字熊堂38-5 ほか	03201	LE16-2118	39度 41分 06秒	141度 07分 38秒	2004.08.06 ～ 2004.09.14	3,661㎡	盛岡南新都市 土地区画整理 事業に伴う緊急 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
本宮熊堂B遺跡 第27次	集落跡	奈良時代	竪穴住居跡 土坑	3棟 1基	土師器(杯・甕・鉢) 須恵器		奈良・平安時代の集落跡	
		平安時代	竪穴住居跡 住居状遺構 土坑 溝跡	4棟 1棟 1基 3条	陶器 鉄製品(鋤先・角釘) 土製品(紡錘車・土鍾)			
		時代不明	土坑 溝跡	1基 1条	石器(凹石)			

---

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第487集

## 本宮熊堂B遺跡第27次発掘調査報告書

盛岡南新都市区画整理事業関連遺跡発掘調査

印刷 平成18年3月9日

発行 平成18年3月15日

発行 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地

電話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印刷 有限会社 博光出版

〒020-0122 岩手県盛岡市みたけ5丁目8番43号

電話 (019) 641-0671

